
サクラ大戦 花たちからの手紙

デロリアン4号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラ大戦 花たちからの手紙

【Zコード】

Z4365T

【作者名】

デロリアン4号

【あらすじ】

『今から遡ること約100年前の太正時代。帝都東京・花の都巴里を救つた帝国華撃団・巴里華撃団。戦闘部隊・花組は一人の男性隊長のもと女性隊員で構成されており、靈子甲冑「光武」に搭乗し平和を乱す魔物たちと戦い勝利をおさめた。2度目の世界大戦の終了と共に組織は解散。』文献にはこう書かれており、男性隊長と女性隊員の余生の事は書かれておらず知る者はごく少数である。

そして現代、女性にしか動かせない兵器IS。そのISのパイロットを育成するIS学園に一人のサムライが転入してきた。それは未来にサクラが咲く瞬間でもあった。

はじめまして

はじめまして、作者の「テロリアン4号」です。

サクラ大戦の大ファンである自分がみつけた作品「IS」。メカ設定、キャラ性格が非常に似ていおり、両作品も一人の男性が、複数の女性陣に囲まれ生活していくといついわゆる「ハーレム」と呼ばれる立場にあるので組み合わせてみました。

本作は「IS」の世界を舞台にサクラ大戦をリンクさせていきます。サクラ大戦は舞台が架空の1920年代「太正時代」で町並みもモロに現実の大正とそっくり、「IS」の舞台は2010年代の近未来。時代年数は100年以上の差がありますが、上手く書いていきます。

第1章の登場人物紹介（前書き）

ネタバレ注意！

第1章の登場人物紹介

【本作オリジナルキャラ】

大神
一樹

「性別」男

「年齢」16歳

「身長」175cm

「出身」日本・栃木

「ISランク」A（非公式：S）

「誕生日」2000年8月15日

「紹介」この物語の主人公（ビジュアルは大神一郎と同じ）。約100年前に存在した組織、帝国華撃団・巴里華撃団の隊長大神一郎のひ孫。一夏に続くISを動かせる男性であり、世界的財閥・神崎グループとも縁がある。

剣道が得意で流派は一天一流で一刀流。さらには弓道・銃撃も得意でイーストウッド・ランボー・ゴルゴ13の弟子と呼ばれるほどの腕前。特技に機械工作、音楽、天体観測、戦斧、手品、スリ、など多彩な才能をもつ（スリは危険物を所持している者へ使い、犯罪行為としては一回もしたことはない）。なお帝国華撃団・巴里華撃団の女性隊員全員と交流、指導がある。大神一郎が帝都と巴里に現れた魔物と戦った事は知らないまま。

女性99%のIS学園で生活する一夏と仲良くなる。ISの操縦技術・戦闘力は織斑千冬を上回ると言われている。ヒマになるとiPod touch(32GB)に入っている超高音質変換した太正時代の帝国・巴里華撃団の音楽を聴いている。

制服のデザインは一夏のとは違う学ランタイプの制服。アンナが気になるお年頃。

アンナ・フォンティーヌ

「性別」女

「年齢」15歳

「身長」156cm

「出身」フランス・パリ巴里

「ISランク」B

「誕生日」2000年5月31日

「紹介」約100年前に存在した巴里華撃団・エリカ・フォンティーヌのひ孫（ビジュアルはエリカ・フォンティーヌと同じ）。やはりエリカのひ孫と言うだけあって、ドジで天然で、看板にぶつかつたり何もないところで転んだりと、エリカの生き写しそのままである。

一樹とは幼馴染同士で家族ぐるみの仲で、一樹との相思相愛にかなり近い人物。

加山雄四
かやまゆうじ

「性別」男

「年齢」15歳

「身長」175cm

「出身」日本・和歌山

「誕生日」2000年5月5日

「紹介」約100年前に存在した組織、帝国華撃団月組隊長・加山雄一のひ孫。一樹の小学生のころからの幼馴染（ビジュアルは加山雄一と同じ）。生まれは和歌山でその後栃木に引越し、一樹と同じ学校に通った。相性のいいコンビで周りからは『カズとヨージ』と呼ばれていた。現在は地元の普通高校に通っている。代々忍びの家系で雄四もそれを受け継いでいる。

武田沙苗
たけださなえ

「性別」女
「年齢」15歳
「身長」155cm
「出身」日本・静岡
「誕生日」2000年6月21日
「紹介」新聞部の一年で黛の助手をしているオレンジ髪の女子生徒（ビジュアルはジェミニ・サンライズと同じ）。黛が言うには彼女は天然で、普通の人なら気づく事が数ヵ月後になつて気づく人だと言つている。

松本かすみ
「性別」女
「年齢」ヒ・ミ・ツ
「身長」169cm
「出身」日本・東京
「誕生日」?/??年3月9日
「紹介」IS学園の校医。金髪で微笑みを絶やさない菩薩のような人。菜食主義者的一面もある。生徒、教員問で数多くのファンがあり、真剣に交際を望む女性からのラブレターを彼女宛に送る者もいる。

【ISからの登場人物】

織斑一夏

「紹介」原作IS「インフィニット・ストラトス」の主人公で本作では一樹の友人というポジション。一樹と同室になり、仲が良くなれる。原作同様、恋愛に関しては超鈍感。

「紹介」原作IS×インフィニット・ストラトス×のヒロイン1号。本作では一樹の剣道仲間というポジション。一樹と剣道の手合せをして仲良くなり、その後自分の稽古のときは相手に一樹を誘うようになる。その際一樹に名前で呼ぶことを許した。IS勝負でも敗北し、ISの決闘もするようになつた。一樹曰く、「やくらばあちゃん」とグリシースばあちゃんを合わせた感じ」。

セシリア＝オルコット

「紹介」原作IS×インフィニット・ストラトス×のヒロイン2号。ポジションは特になし。転入した一樹に興味を示し、ISの模擬戦で敗れた後色々関わつてくるようになる。のちに一樹に恋心を抱くようになつた。高飛車な態度は原作と変わらない。一樹曰く「すればあちゃんと織姫ばあちゃんを合わせた感じ」。また学園ではサボテン女と呼ぶものがいる。

凰鈴音

「紹介」原作IS×インフィニット・ストラトス×のヒロイン3号。ポジションは特になし。一樹の転入から1週間後に入つてきた。一樹のことを「イイ男」と言つてゐるが落とされることはないと思つていたが、未確認IS乱入事件後、一樹に少しづつ意識し始める。

シャルル・デュノア

「紹介」原作IS×インフィニット・ストラトス×のヒロイン4号。ポジションは一樹と一夏のルームメイト。3人目のISを動かせる男性として転入してきたがある機会を機に女性であることが発覚。実家はヨーロッパで一番大きいIS企業「デュノア社」。一樹曰く「『クリ』おばあちゃんと『クリ』おばあちゃんを合わせた感じ」

ラウラ・ボーデヴィッヒ

「紹介」原作IS×インフィニット・ストラトス×のヒロイン5号。

ポジションは一樹を敵視している代表候補生。一夏を叩き潰そうとするが一樹の妨害が入り、彼のことをうつとうしく思うようになるが、命懸けで助けに来た一樹にホレる。一樹曰く「レーヨバあちゃん」とマリアおばあちゃんを合わせたかんじ

まゆずみ かおり
黛 薫子

「紹介」原作ISVインフィニット・ストラトスに登場する2年生。新聞部の副部長である点は変わらない。

織斑千冬

「紹介」原作ISVインフィニット・ストラトスの一夏の姉。設定は原作と変わらない。一樹に対しても一夏と同様、容赦なしの教育をする。一樹の編入試験時、気絶した山田に代わりIS操縦の試験官をした。試験終了後、彼女は一樹の戦闘力を見切り「私を上回る」と言っている。一樹の曾祖父さんについて何か知っている。

山田 真耶

「紹介」原作ISVインフィニット・ストラトスの一夏のクラスの副担任。一樹の編入試験時、IS操縦の試験官をしたが一樹の一撃で気絶してしまった。

【サクラ大戦からの登場人物】

大神一郎

「紹介」原作「サクラ大戦」の主人公。本作では一樹の曾祖父さんで故人（享年113歳）。約100年前に存在した組織、帝国華撃団・巴里華撃団の隊長で一樹が中学卒業まで存命していた長寿者。一樹の幼小中時代に様々な事を教え、二天一流を教えたのも彼である。ISの登場をあらかじめ予測していたと一樹は語る。

真宮寺さくら

「紹介」原作サクラ大戦のヒロイン1号。本作では故人（享年111歳）。一樹とも交流があり北辰一刀流免許皆伝で一樹の二人目の剣術師範（一人目は大神一郎）。仙台にある北辰一刀流道場の館長。一樹の剣術の基礎は彼女に教わった。晩年も大神に好意を示しておりやきもち焼きな所も変わらない。ISについて何か気づいている様子。

神崎すみれ

「紹介」原作サクラ大戦のヒロイン2号。本作では故人（享年109歳）。世界的財閥・神崎グループの終身名誉会長で、一樹のIS操縦を見抜いた人物で、いつか一樹がISに乗ることを想定して彼専用機を神崎グループ総出で制作を言い渡した人物。高飛車で高らかな笑い声が印象的だったと一樹は言う。元祖サボテン女であった。

ソレッタ・織姫

「紹介」原作サクラ大戦のヒロイン7号。本作では故人（享年111歳）。世界的な音楽家でイタリア貴族。一樹の特技の音楽は彼女から教わった。女性でありながら女尊男卑の時代に納得がいかず、男性の社会的立場の回帰活動に参加した。楽天家の人だったと一樹はいう。

レニー・ミルヒシュトラーセ

「紹介」原作サクラ大戦のヒロイン8号。本作では故人（享年106歳）。ドイツ軍の元軍人で最終階級は大将（特進ナシ）。事実上ラウラの上官に当たる人物。彼女の少女時代の写真を見た人間は誰もが男の子と勘違いするほどである。

エリカ・フォンティーヌ

「紹介」原作『サクラ大戦』のヒロイン9号。本作では故人（享年106歳）。アンナの曾祖母。フランスのモンマルトルにある教会のシスター。晩年、ロベリアと孤児院『ボヌール』を創設し、子供達の世話をした。実はアンナに自身の遺産という名である物を渡した。

グリシーヌ・ブルーメール

「紹介」原作『サクラ大戦』のヒロイン10号。本作では故人（享年106歳）。フランスの超名門貴族ブルーメール家の当主。一樹専用ISの制作のスポンサーを担当した。織姫と同じく女尊男卑の時代に納得がいかず彼女と共に男性の社会的立場の回帰活動に参加した。セシリ亞のオルコット家と親交があつた。

ゴクリゴ

「紹介」原作『サクラ大戦』のヒロイン11号。本作では故人（享年101歳）サー・カス界で古株で有名なサー・カス団、シルク・ド・ユーロの団長で亡くなるまでその職を務めていた。一樹の特技である手品は彼女から教わり、形見である髪留め「ゴム」を彼に託した。

ロベリア・カルリーニ

「紹介」原作『サクラ大戦』のヒロイン12号。本作では故人（享年110歳）。エリカ・フォンティーヌと共に孤児院『ボヌール』を建て、そここの院長を務めた。二面性のある人物で一樹も大神一郎もしょっちゅうダメされた。

第1章の登場人物紹介（後書き）

話が進むたび、登場人物・詳細を書き込んでいきます。
設定は自分の想像・空想をもとにつくりました。

舞台・用語・アイテム・事件（前書き）

ネタバレ注意ーこのページはウィキペディアのよひに更新して行きます。

舞台・用語・アイテム・事件

【舞台・施設】

I S 学園

原作と変わらない設定。一樹は一夏と同じ部屋になった。沿岸部に臨海公園があり、屋上は木陰もあるなど自然豊かな校舎。本作では東京都、東京湾海上の人工島にある設定。一樹は新聞部は副部長薦の許可により出入り自由とされた。

デュノア社

シャルルの父が経営しているI S企業。一応フランスで一番大きなI S関係の企業であるが経営危機に陥り、開発許可が剥奪されるほど追い込まれている。シャルルの父親である社長は彼女に光武のデータを盗んで来いと命令した張本人。

シャトー・ブリアン社

一樹の光武のレールガン「エクレール」、アンナの専用機「エヴァンジル」を開発したフランスのI S企業。

神崎グループ

終身名誉会長・神崎すみれが経営していた世界トップクラスの財閥。彼女の亡き後は孫が就任。一樹個人の付き合いがある。I S訓練機の量産も行っており、一樹専用機の制作も担当した。

ブルーメール家

フランスの超名門貴族。グリシーヌが当主で世界の財界に深く関わりのある名家。彼女亡き後は孫が家督を継いだ。一樹個人の付き合いがある。神崎グループの一樹専用機制作のスポンサーに就いた。セシリアのオルコット家とも親交があった。

【用語】

帝国華撃団（歌劇団）

約100年前、司令・大神一郎を中心に活躍。邪悪な魔物から帝都東京を救つた組織。第二次世界大戦終結後、解散。

巴里華撃団（歌劇団）

約100年前、隊長・大神一郎を中心に活躍。奇怪な怪人から花の都巴里を救つた組織。第一次世界大戦終結後、解散。

靈力

華撃団の隊員達が持つ不思議な力。回復・武装・身体強化以外にも分け合う事ですることで寿命をわずかだが伸ばすことや、ある程度若返りが出来る。

女尊男卑

ISの登場により男女間のパワーバランスが崩れ、女性＝強いといふことが定着した時代のこと。男が女よりも強いのはISが出来る前となり、男が女に戦争しても3日もたないと言われているほど。いわば大奥の時代である。

R陽子

一樹のISの装備「銀狼」・「白狼」の攻撃力を上をあげるのに、シールドエネルギーと併用されるエネルギー。設計図には説明がなく詳細は不明。

歌劇団の葬儀

帝国華撃団・巴里華撃団の大神隊長・花組隊員の葬儀。大神一郎や隊員達は互いの靈力を共有することで長生きしてきた。「生きるも

死ぬのも一緒に「だつた大神隊長・花組隊員13人は、同じ日の同じ時刻に息を引き取った。一樹が中学を卒業後、IS学園に入る前の事。

【アイテム】

能面のカケラ

一樹がネガのような世界で出会った能楽師からもらつた能面のカケラ。顔に付いたら機体のエネルギーが回復した謎のシロモノ。

変換プログラム

一樹の自作したコンピュータプログラム。古い音楽をiPodに高音質に変換できる以外にも、BD、DVD、VHS、LD、8ミリ、CD、カセット、レコードなどの媒体をリマスターできるプログラム。

一樹のiPod

一樹がいつも使っているiPod。入っているのは帝国華撃団、巴里華撃団、大神華撃団の3組の歌しかない。歌劇団の字が華撃団になつており一樹自身も「なんでだ?」と疑問に思っていた(歌劇団の魔物たちと戦う組織・華撃団として的一面があることを一樹は知らないため、単なる誤変換だと思い込んでいる)。

【事件】

未確認IS乱入事件

クラス対抗戦時、正体不明のISが破壊活動をした事件。会場に1機、学園から500m離れた上空に1機の計2機が襲撃した。2機のうち、1機は一樹が両腕を切り落とし逃亡。もう一機は、一樹、一夏、セシリ亞、鈴の4人により破壊。残骸は学園に回収された。

学年別トーナメント事件

学年別対抗戦時、武者姿をした「脇侍」と呼ばれる機械が2機現れ、破壊活動をした事件。ラウラを操り、スタジアムの半分を破壊するという被害が出た。「能面のカケラ」をつけた一樹が一人で脇侍2機を撃破し事態は終結した。残骸は学園に回収された。

登場人物・兵器（複数用）

ネタバレ注意です。このページはウェブサイトのよう定期的に更新していくかも。

登場 I S・兵器

名称：第5世代 I S『光武F式』（こうぶえふしき） 通称『青い
剣豪』

搭乗者：大神一樹

カラー：紺色（淵に白いラインがある）

武装：対 I S用大太刀型ブレード「銀狼」（右腰に装備）

対 I S用大太刀型ブレード「白狼」（左腰に装備）

対 I S用レールガン「エクレール」（右肩に装備）

高性能レードーム（左肩に装着）

高機動兼瞬発力強化ブースター「疾風改」（スラスター後の
両肩に装備）

装備収納バックパック

（収納武器）対 I S用ダネルM G L型グレネードランチャ

1

「詳細」 神崎グループ総出のもとに制作した一樹専用 I S（ I Sス
ーツは大神の戦闘服と同じデザイン）。ハイパー・センサーはもちろ
んのこと、搭乗席からのびるコードを I Sスーツにあるコネクター
と直結することで自分の体のように操作できるといった性能がある。
一樹の戦闘スタイルは「疾風改」を使い「銀狼」「白狼」の二刀流
が主流。未完の段階である I Sの完成型に一番近い機体と呼ばれて
いる。

待機状態は絵馬に似た紐付きの札（表と裏に帝国・巴里華撃団の工
ンプレムが彫つてある）。

武器：「銀狼」 「白狼」
ぎんろう はくろう

光武 F式の主力装備。（刀デザインは光武の太刀と瓜二つで刀身
が肉抜きされている）。「銀狼」「白狼」は特殊な金属でできた刀

で砲弾を切つても刃こぼれしない、ダンプカーにひかれても刀身が1ミリも曲がらないなどかなり頑丈。日本刀をベースに設計し、日本刀本来の性能を忠実に再現した武器である。刀身・鍔・柄そして鞘まで日本刀を再現したデザインでシャルルからも「見た目もすごいカッコイイ」と好評。

二刀は白式の能力に似たものがあり、シールドエネルギーを刀身にコーティングすることで高い攻撃力を出すことが可能で、エネルギーの込め度で高い攻撃力を出せる。一度コーティングすると持続時間は最大3分～6分。必殺技使用時、エネルギーを雷に変換しそれを刀身に覆わすことで相手に大ダメージを与える。

シールドエネルギーで刃を形成の白式と違う所は、コーティング時、少量のシールドエネルギー以外にもう一つ別のエネルギーと混合してコーティングすることで攻撃力強化をしている。そのためシールドエネルギーの消費が少量で済むことから、白式よりも燃費が良い。別のエネルギーは一樹本人にも不明で、設計図には「R陽子」と書かれていた。

武器：エクレール

右肩に装備されたレールガン。フランスのシャトーブリアン社製で装弾数は40発。高い命中精度で、チャージにより威力、距離が変化する。欠点はレールガン一番の特徴である、チャージに時間がかかることがある。レドームと組み合わせることで射撃能力が極限にまで上昇する。

弾倉のスペースが大きすぎるため現在の光武では予備弾を積めない。そのため一回の戦闘が終わるたびに再装填しなければならない。

装備：高性能レドーム

左肩に装備された高性能のレドーム。これには望遠、暗視、赤外線、相手の情報表示ほか、あらゆるレーダーが組み込まれている。それをエクレールとリンクさせて、絶対的な長距離攻撃を可能にし

ている。アメリカ国防省が使うようなレーダーを小型化して搭載されていると予想されている。

装備：疾風改

両スラスターの後ろに装備されたブースター。起動させることで機動力が向上し従来のISよりも機動性が格段に上がる。また瞬発力を向上させる機能もありラウラのワイヤーブレードを掴んで振り回すほどの力を出せる。

装備：装備収納バックパック

学年別トーナメント前の装備ではラウラに勝てないと言う一樹の要望で、急遽神崎グループに依頼した装備。バックパックと言つても大容量ではなく武器2・3個積めるだけのサブバックのような物で、一樹曰く「サバイバルキット」のこと。

武器：対IS用ダネルMG-L型グレネードランチャー

バックパックに積まれた対IS用のグレネードランチャー（形状は実在のダネルMG-L型）。学年別トーナメントでラウラの「白式に射撃武器は無い」という心理を利用して用意した武器。試合では一夏が使用。ダットサイト以外にもレーザーサイトを付けているので、射撃初心者の一夏でも使えた。

必殺技

狼虎滅却・快刀乱麻

二刀の刀身に高電圧の電気を覆わせ、相手を切りつける攻撃。技を出すとき刀の色が青白になる。高い攻撃力だが、近接戦闘で一対一のときしか高い威力が發揮出来ないという欠点がある（よつぱり一チが短い）。

狼虎滅却・天地一矢

快刀乱麻の強化版。威力は快刀乱麻より上な分、消費エネルギーの量も多い。電気量・発光量が増している。

狼虎滅却・刀光剣影

短期決戦用の特攻型必殺技。相手のシールドエネルギー残量が3分の2以下なら確実にダウンさせるほどの威力だが、自身のエネルギー残量が2分の1以上なければ相打ち、または自爆になるというまさしく捨て身の技。

破邪劍征・桜花天昇

刀にエネルギーを込め、それを飛ぶ斬撃にかえて放出する攻撃。技を出すとき刀の色が桜色になる。斬撃を飛ばせるので離れた相手にも攻撃出来る。有効射程距離は約30メートル。ただ一直線に放出するのでかわされやすい。

名称：第5世代IS『エヴァンジル』 フランス語で『福音福音

搭乗者：アンナ・フォンティーヌ

カラー：不明

武装：不明

「詳細」

エリカ・フォンティーヌがシャトーブリアン社に製造を要求したアソナ専用IS。待機状態はロザリオ。アンナがエリカの死後から1週間後に届いた手紙を受け取り、シャトーブリアン社でIS訓練を2ヶ月間受けたあと、『エリカの遺産』という名前で彼女が貰った。

白式
ひやくしき

一夏の I.S.。設定は原作通り。

ブルー・ティアーズ

セシリアの I.S.。設定は原作通り。

甲龍
シェンロン

鈴の I.S.。設定は原作通り。

ラファール・リヴィアイヴ・カスタム I.I

シャルルの I.S.。設定は原作通り。

シュヴァルツェア・レーゲン

ラウラの I.S.。VT システムはない以外は原作と同じ。

何者か

クラス対抗戦に乱入した謎の機械。武士のような外見に両腕にキャノン砲を装備した機体。一樹に破壊され現在、学園の何処かにあるラボに収容されて調査が進められている。

脇侍

学年別トーナメントで突如現れた謎の機械。全力でかかつてきたりと一夏をひと振りでシメたほど強い。片言だがしゃべる。また金色の超音波を出すことで相手を操る事も出来る。

第一話 学校に舞う桜吹雪

「IJKがIS学園か、すぐ広そうだな。」初めて学校に来る生徒の決まり文句。編入試験は別の施設で受けたため、学校の敷地をまたぐのは今日が初めてである。

「大神くん、ここが教室よ。」

山田先生に案内されて教室の前に来る。廊下から教室を見ると99%女子しかいない。先生の話では、織斑一夏という男子が一人だけいると聞いているが、それでも心細い。共学になつた女子高でも、男子は10人以上はいるもんだと思う。しかしここはIS学園、ISを動かせる人しか集めない学校なため共学でも女子高でもない。

「では、今日からのクラスに転入した大神一樹くん、自己紹介をお願いします。」

「本日付けでこのクラスに転入した、大神一樹です。皆さんもご存知の通り、「世界で一人目の男性IS操縦者」と呼ばれています。特技は剣道で、剣道部入部希望です。IS専用機も所有しておりますが、代表候補生ではありません。初めてでわからないことだらけですが、教えていただければ幸いです。不束者ですが粉骨碎身の覚悟で頑張ります。」

（一郎じいちゃんに、自己紹介の際は「粉骨碎身」を入れたほうが印象付けやすいつて教わったな）と心中で思った一樹。その結果、クラスからやや高めの拍手が送られた。

「あいつが一人目の男性操縦者か。やつと男友達ができる嬉しいぜ」

「剣道が出来るのか。なかなかの腕の者とみた、一度手合させを願いたいな。」

「お手やわらかにな、篠。」

「なかなかいい人じやありませんの。機会があれば、私のブルーティアーズと手合させ願いたいですわ。」

「お手やわらかになセシリ亞。」

「席は織斑くんの隣ね」

山田先生は、一夏の左側にある一樹の席を指定した。一樹は速やかに席についた。

「よう。俺、織斑 一夏。一夏つて呼んでくれ」

一夏は握手しようとした手をさしのべた。それに答えるように一樹は手をだした。

「よろしく。噂はかねがね聞いているよ。」

その光景にクラスがザワつく。

「静かにしろ。質問なら休み時間にすればよからう。」

千冬先生が腕を組んで姿勢で注意した。

休み時間、千冬先生に注意された通り、一樹の席の周りに女子が集まる。

「ねえねえ、大神くんってIISをどういう風に動かしたの？」

「どうつて、ただ普通に乗つただけで動かせたけどな。」

「織斑くんと握手した感想は？」

「いい友達と出会つたと思つていいよ」

この光景は転入生にありがちな光景であるが、二人目の男性操縦者「という」ともあって女子達は興味津々な目で、一樹に質問攻めをしていた。

「すごい人気だな、大神。」

「それはそうだ。お前と同じ男性IIS操縦者だからな。」

「廊下も見てください、全学年の生徒が覗いてますわよ。」

帰りのSHRが終わり山田先生が教壇に立った。

「今日の授業はこれで終わりです。気を付けてお帰りください。大神くん、織斑くんはこの後職員室に来てください。」

先生の呼び出し、なぜこの一人なのかは不明のまま職員室へ。

そこで待っていたのは千冬先生。

「大神、お前の寮の部屋だが一夏と同室になつてもらひ。荷物もすでに届いている。」

言われたのは入寮の部屋のこと。

「同室つて、筹建はどうすんだよ。」

「篠ノ之は別の部屋にした。本来学生寮で男女混同はダメだからだな。すでに他の部屋に移してある。一夏、大神に色々と教えてやれ。

「一夏と筹建は同室だつたらしい。一夏はこの知らせに嬉しいような残念なような、複雑な心境だつたことが感じられる。

そしてその夜、一樹は一夏の部屋へ。寮への道、一樹・一夏の後ろから大勢の女子がついてきたこともあり、かなり疲れた。

「ここが部屋か、ビジネスホテルより豪華だな。」

「初めてここに来た時と同じセリフだぜ。」

男の部屋に笑いが立ち込める。

「前いた篠ノ之くんつてどういう人なんだ。休み時間、ずっと一緒にいたけど。」

「幼なじみで小学生のころ、あいつと剣道やつていたんだ。ああ、お前と剣道の手合させしたいって言つてたぜ」

「へえ、剣道部なんだ。」

一樹は少し食いついた。

「もう一人イギリス人の子、セシリ亞くんとも関係があるのか」「なんでセシリ亞を知っているんだ?」

「フランスのブルーメール家っていう屋敷に居候してたとき、ばあ

ちゃんと聞いたんだ。両親を失つても家を守つた眞の貴族だつて言つてた」

ブルーメール家はフランスの超名門貴族で、一夏も知つていほどの有名。一樹は一時期、ブルーメール家に居候したことがあり、当主のグリシーヌと交流があつた。その際、彼女と親交のあつたイギリス貴族のオルコット夫妻の訃報、残された娘は家を守ろうと努力した事を聞いたことがある。

「あいつもお前と工合で手合させしたいって言つてたぜ。」

「さすが女尊男卑の時代。女性から勝負してくるのは当たり前だな」

近いうち手合わせが来ることを思いながら、かすかに簾の匂いが残る布団をかぶる一樹であった。

第一話 岳輩の猫である（前書き）

転入日から次の日の朝の出来事です。

第一話 呂輩の猫である

午前6：30

一樹はこの時刻ちょうどに目が覚めた。別に悪い夢でもみたわけではないがこの男、目覚ましナシで切りのいい時間に起きるという几帳面な身体機能がある。

一樹は基平のパジャマを脱ぎ、制服に着替えた。着替え終わつたと同時に一夏

が目を覚ました。

「一樹の飯はうまいな。さすが国立の学校、良い飯つくるぜ」
「やっぱり、朝はご飯に味噌汁だな」

一夏が着替え終わり、二人は食堂でご飯大盛り、味噌汁、焼き魚の朝食を食べている。

「大神、昨日はよく眠れたか？」

横から声がして、振り向くとポーテールの子がやや顔を赤めながら座った。

「ああ、篠ノ之くんおはよう。よく眠れたよ」

「そ、そうか眠れたならい。」

篠の使っていたベッドがそのまま一樹に使われたので、女の子としてやつぱり気になるのか。

「どうしたんだい、顔赤いけど」

篠の顔がさらに赤くなる。

「な！なんでもない！ そうだ大神！お前剣道できるんだよな。今日の放課後、私と手合わせお願いできなか」

「うん、いいよ」

あっさりOKした一樹。すると、その後から高らかな笑い声が聞こえてくる。

「お~~~~~ほほほほ、何言っているんですか篠さん。今日の放

課後、大神さんはわたくしと I.S で手合させを願うんですよ。」

周りから「もうアタックしているよ」「先越された～」などの声が上がっていた。

「何を言うか！私が先に約束したのだ。お前のは私の組手が終わってからにしろ！」

「剣道の組手よりもまず先に、大神さんの I.S 操縦を見るのが代表候補生の勤め。わたくしが先に手合させさせていただきますわ！」

二人の一樹の取り合いは食堂中に知れ渡つた。

「落ち着けよ二人とも、周りの子たちも食事中だし、」

一夏が仲裁に入つたが、

「一夏（一夏さん）は黙つてろ（黙つててくださいまし）！」

二人同時に怒鳴られて縮こまる一夏。

「わかった、わかった二つとも受けるよ。最初に篠ノ之くんの剣道で、次にセシリアルくんの I.S でいいかい。」

この一言で二人の態度は一変した。

「まあ、大神が言うなら私もそれで良いとしよう」

「わたくしも、大人気なかつたですわ。大神さんが言うならかまいませんわ」

なんとか戦争は回避された。一樹は額の汗を拭き、一息ついた。

「一夏、お前も最初はこんなのだつたのか」

「いや、俺のはもつと辛かつた」

「お互い、苦労人になりそうだな」

二人は深いため息を同時に吐き、残つた朝食を胃にいれた。

第一話 吾輩の猫である（後書き）

次回は一樹の「天一流・一刀流が冴えます。サブタイトルは夏目漱石の「吾輩は猫である」のパロディ

第三話 最後のサムライ（前書き）

女尊男卑の時代に最後のサムライが現れた瞬間。

第二話 最後のサムライ

今朝の食堂での一樹争奪抗争は一時おさまり、時はその日の放課後一樹・一夏・篠の3人は剣道場にいた。篠・セシリ亞の手合わせの事は生徒間で知れ渡り、3人以外にもギャラリーが何人かいた。

「大神、剣道はどのくらいだ」

防具をつけながら一樹に話しかけた篠。

「7、8年くらいかな。段位4段で、小1からやつてたよ」

一樹の剣道は一郎とさくらから教わり、IS学園編入試験で千冬を押したほどの実力を持つ。

「そうか、手加減ナシ・最初から本気でいかせてもらうぞ」

「篠の奴、実力がわかつてヒートアップしやがって」

さすが篠の幼なじみ。性格も手に取る用ようになかつてている。彼女は剣道全国大会の優勝者である。

防具が付け終わり、一樹・篠の二人は定位置についた。

「お前のセシリ亞との組手があるので勝負は一回きりだ。用意はいいか、大神」

「ちょっと待ってくれ。お~い、竹刀もう1本貸してくれ。」

一夏に声をかけ、彼はすかさず竹刀を一樹に投げる。ギャラリーがざわつく。

「お前、二刀流か」

「二天一流の二刀流が俺のスタイルだ。北辰一刀流も使えるよ」

その言葉に篠のヒートアップはさらに強くなつた。このとき一夏は頭を手で押されて、あちゃ~なリアクションだつた。

一樹は二刀流の3・4回素振りし、再び位置についた。

二天一流は剣豪・宮本武蔵が考案した剣術で、二刀流の中でも最もポピュラーな流派である。集団戦闘では高い威力を發揮出来るもの

だが、一騎打ちではそれを使う剣士の腕次第で優位性は大きく上下する。

北辰一刀流は幕末の・日本で多く広まつた剣術。かの坂本龍馬もこの流派である。剣道において技術追求型でスタンダードな剣術である。

「では行くぞ！」

その言葉と同時に切り込んできた。一樹は二刀で防ぎ、弾き返す。箒はすかさず次の攻撃を連続して打ち込む。一樹はその一撃一撃を的確に見切り、防ぐ。真左から強めの一撃が来る。防ぐのも難しいコース。箒は決まったと思つた。しかしその直後その気持ちは崩れ、驚愕する。彼女の竹刀は一樹の左竹刀の柄頭で止められた。一樹は右竹刀ですかさず打ち込む。箒はすぐ反応してかわし一樹から距離をとる。

「（私の太刀筋を見切つた？並の動体視力では読めないぞ）」
今度は一樹が攻めに入る。一樹の攻撃に箒は防戦一方。しかしづかなかスキが出来た。箒は今度こそと思い、一撃を入れる。その一撃は左竹刀で受けながされ、右竹刀が彼女の胴に入る。勝負アリだ。二人は互いに礼をした後、ギャラリーから拍手が送られた。

「（私が負けた？この者、強い。）」

彼女は困惑していた。全力で打ち込んだ全国大会優勝者の一撃はいつも簡単に防がれ、5分もかからず試合終了してしまつたのだから。

一樹は面を外し汗を拭いた。一夏は箒が負ける所を久しぶりに見た。

「お疲れ。あの箒を負かすなんて大神、強いな」

「彼女もなかなかの腕前だ。一撃が重く、回避反応も良い。一刀流の太刀筋を読む動体視力も並じやない。また手合わせしたいよ。ふと箒が後ろから一樹を呼び止める。

「大神、剣道部に入るんだろ。入つたら私の組手に付き合え。いつ

かお前を負かしてみせるからな！」

筈はそう言い残すと筈は更衣室へ歩いていった。

「もしかして彼女、負けず嫌い？」

「ああ、勝つまで相手をさせられるぞ。ガキのときも勝つまで俺に勝負を挑んでた。」

小学生のころ剣道は一夏の方が上だったが、今では実力は筈のほうが上である。

「一夏、お前も付き合つてくれ。先が怖い。」

ともあれ、手合わせを見ていた剣道部長に入部届けを出し、次の対戦相手のいるアリーナに走つて行つた。

筈は更衣室で何か考えていた。

「（サムライ、この時代にその心を持つ男はない。TVの時代劇でしか見たことがない存在だ）」

彼女の剣道は全国レベルで、IIS学園剣道部で1年生で大将を勤めるほどである。剣道で男に勝負をしたがどれも弱すぎてすぐ音をあげた。むしろ女よりも弱かつた。

「（大神、この時代でお前みたいなサムライがいたとは。次こそ勝つてお前を全生徒の前で土下座をしてや……いやいや、それだと変な疑いがかかる。）」

筈は首をふり考え方直した。

「（お前に勝つて一夏に良い所をみせて……って、なんであいつのために勝たなきやいかんのだ！）」

筈は自分の頭をポカポカたたいて、妄想にふけこんでいた。

「（おのれ、大神一樹つ！私にこんな思いをさせるとは、今に見ておれっ！）

アリーナに向かう一樹に悪寒が走る。

15分後。今度はアリーナでセシリニアとIISの組手。一樹は更衣室でIISスーツに着替え、格納庫にいた。

「それがお前のＩＳスーツか？貴族みたいな服だな。」

「これは神崎グループが開発した新型ＩＳスーツだ。俺の専用機に合わせて作ったものだ。」

千冬先生と山田先生が、コンテナと一緒に歩いて来た。今回は両先生の立会いのもとの模擬戦だ。外を見ると剣道のときよりもギャラリーが多い。一夏以外の男性操縦者を見るのがよっぽど気になるのか。

「大神、それが新型のＩＳスーツか。品が良すぎるな。」

「大神くん、あなたのＩＳが神崎グループから届きました。メンテナンスもバツチリです。」

コンテナが開き、中から一樹専用ＩＳが出てきた。それは一夏の『白式』や、セシリ亞の『ブルー・ティアーズ』とも全く違うＩＳだった。操縦席からコードが伸び両肩部分にブースターみたいな物があり、両腰に刀みたいのがさげていた機体でなんだか侍を思わせるような雰囲気を持つ。

「これが俺の専用機『光武F式』だ。装備は今の所は近接ブレード2つで肩にあるブースターを使って戦う、近接戦闘主体のＩＳだ。」一樹が自慢そうに入っているが、この装備でセシリ亞と戦う事は自殺行為だと一夏は目に見えている。なぜなら一夏はブレード『雪片』一つでセシリ亞と戦つた人間だからだ。

「ちょっと待て、その装備じゃ俺の二の舞になるぞ！」

「馬鹿者、大神はお前みたいにヘマはしない。」

千冬先生から厳しい言葉をもらつた。千冬先生は一樹の編入試験のＩＳ操縦の教官だったから一樹の操縦はすでに見ている。しかしあの千冬先生がああ言う所は見たことがない。まるで自分を上回つている事を言つているみたいだつた。兄弟だからわかるのか、一夏はそう悟つた。

表で待つていてるセシリ亞を待たせるのも悪いだろ？一樹は乗り込むかのようにＩＳに搭乗した。一樹のＩＳは操縦席に座つたと同時に機体から伸びるコードが彼のＩＳスーツのコネクターに接続され

た。あのコードが何の役割をするのか、このとき一夏はまだわからなった。

一樹がカタパルトに乗り、飛び出す前に山田先生からルールが告げられた。

「アリーナの使用時間は30分です。勝負は1本。先にIISのシールドエネルギーがなくなつた方が負けです。引き分けの場合はシールドエネルギー残量で勝敗を分けます。」

「わかりました、じゃあ行つてきます。」

そう言つと勢い良く飛び出し、空で待つていたセシリ亞の前についた。

「待たせたね、セシリ亞くん。」

「それがあなたのIISです。スーツ・デザイン・武装も全く違いますわね。でも見たところ武器はその2つのブレードのみ。一夏さんの二の舞になりますわ」

一夏と同じセリフ。セシリ亞の機体『ブルー・ティアーズ』は中距離射撃型IIS。近接戦闘型IISである『光武F式』では分が悪い。それは『白式』も同じである。

「当たりだ、今の武器はこの刀のみ。二刀流の白兵戦が俺の主流だ。」

「圧倒的にこっちが不利なのに、このとき一樹は余裕な顔していた。」

「両者、位置につけ」

千冬先生のアナウンスが流れる。一人は位置につき、一樹は二刀を鞘から抜き構えた。

「（どうゆうことですか！機体はわたくしの方が有利なのは絶対。なのにはあの澄んだ顔はなんですか）」

「3、2、1、始め」

開始のアラームが鳴る。

「先に攻めさせてもらいますわ！」

セシリ亞が先攻に出了。主力装備ライフル・スター・ライトmkⅠ、ビット型武器ブルー・ティアーズのレーザー・ミサイルの狙いを一樹に向け撃ち放つた。

一樹はこれをスイスイかわし、セシリ亞に接近する。これを防ぐとビット型武器ブルー・ティアーズのレーザー・ミサイルの照準が一樹に定まり一樹に集中砲火がいく。見ているギャラリー、一夏もこれはダメかと思ったが、信じられないものを見た。

彼はこれらをすべて二刀で防いだ。レーザーを弾き返し、ビット・ミサイルを斬鉄剣で切ったかのようにキレイに両断した。攻撃をくぐり抜けセシリ亞の横を通り過ぎながら二刀の斬撃を入れた。彼女のシールドエネルギーは2撃により結構削られた。

「くつ、まだまだですわ！」

残ったビットとライフルで、一樹に対抗しようとした。だが一樹の機体にある変化が起きていた。機体の両肩にあつたブースターから火が噴射された。

すると一樹はスゴイスピードでセシリ亞に接近した。レーザー・ミサイルを撃つが、向こうが速すぎて一発も当たらない。

「（そんな！ わたくしの攻撃が当たらないなんて。いくらEISでもあんなに速く動くことなんて不可能よ）」

そう思つた瞬間、目の前に一樹がいた。一樹の刀が青く光り刀身に雷が帯びていた。

「ダメツ！ 避けられない！」

「狼虎滅却・・・・・・快刀乱麻あ！」

会心の一撃を受けたセシリ亞は絶対防御が発動し、シールドエネルギーがゼロになつた。その瞬間、終了のアラームが鳴つた。

「勝者・大神一樹！ 両者は速やかに下降すること」

千冬せんの判定を受けた二人は下に降りていつた。

「セシリ亞くん、大丈夫かい。」

「敗者に声をかけるなんて情けのつもりですの？ 私が女だから慰めようど？ いらぬお世話をすわ。」

セシリ亞の心はこれまで味わった事のない敗北感に包まれていた

「とてもいい勝負だつた。ありがとう」

彼女はキヨトンとしていた。なぜお礼を言われるかがわからなかつた。

「なぜですの！敗者が勝者にお礼を言われる筋合いはありませんわ。代表候補生が敗北、それも男に負けるなんていい恥さらしですわ。」

「勝敗なんて関係ないよ。この模擬戦で君と仲良くなりたかった。君のような優れた操縦者と出会えて嬉しいんだ。また俺と手合わせをしてくれるかい？」

こんなにまっすぐな瞳を持つ男性は一夏だけだと思っていた。でもこんな真摯な態度は彼女の心に衝撃を与えた。

「か、か、考えさせていただきますわ、失礼します。」

この言葉にセシリ亞は顔を赤らめ、その場を立ち去る。

一樹は格納庫に戻り、一夏・千冬、山田先生に出迎えられた。

「大神くん、ただいまの戦闘時間は5分。その撮影したビデオがこれですので、今後操縦の反省点を改善するに役立ててください」

一樹はこの模擬戦を撮影したビデオの入ったデータを山田先生からもらつた。

「スゴイ動きだつたな、大神。今度お前のI.U教えてくれよ。」

「馬鹿者、大神は基礎も応用も出来ないお前とはわけが違う。貴様は基礎から勉強し直せ。でなきや大神のI.Uを知ることは出来んぞ。」

「千冬先生から厳しいアドバイスをくらつた一夏。」

「そう落ち込むなよ、今度はお前と模擬戦やってみたいし・・・」

慰めようとする一樹だったが、千冬先生の厳しいアドバイスは彼だけではなく一樹にも降り注いだ。

「大神、お前は猪か。射撃武器もあつたのに装備せず、ブレードだけで突っ込みおつて。戦術をもつと勉強しろ。チーム戦では足を引つ張ることになるぞ。お前ら一人これから私たちの特別補講を受け

させてやる。ありがたいと思え」

この二人は千冬先生と山田先生の特別講習で夜まで勉強させられた。

シャワーを浴びてるセシリ亞は昔あることを思い出した。子供のころ親交のあった、フランス貴族・ブルーメール家当主のグリシーヌ・ブルーメールに会い、彼女が昔の事を話をしたときのことを。

「（マドモアゼル・オルコットよ。私が若き頃、東洋の国・日本から一人のサムライという男が来た。そのサムライは何も迷いもない強い瞳を持ち、澄んだ綺麗な目をしている。私に真の誇りというのを教えてくれた。お前もいざれその心を持つ者と出合うだろ。」女尊男卑のこの時代、心の強い男なんて見たことがないし実の父親ですら冴えない男だった。だからそんな男いるわけがないと思つていた。

でも一夏という強い瞳を男性に出会い、もう一人の強い瞳・そしてサムライという心を持つ男性・大神一樹に出会つた。

「（一夏さん・大神さんあなたたちのこと、もっと知りたい）」
彼女は一人に意識し始めた。

一夏・一樹の二人は、幕・セシリ亞に対しライバル・恋心などの感情を植え込んだ。一樹はやや気づいていたが、一夏はそのことに気づかず特別補講に苦しんでいた。

第三話 最後のサムライ（後書き）

タイトルは映画「ラストサムライ」から

第4話 スナップ・パニック

篠とセシリアとの手合わせから数日。

「なあ、大神。この間聞きそびれちまたけど、お前のIISって第5世代型なんだよな。どういうのか教えてくれ」

「そうですわ、私も気になります。大神さん、あなたの専用機について詳しく説明してください。」

「私も教えてくれ。」

一樹は一夏・篠・セシリアから、自分の専用機・第5世代IIS「光武F式」の説明を迫られた。光武F式はセシリアとの組手で全生徒の間に広まり、当然「男が動かすIIS」なので興味を抱くのも当たり前なのである。その要求を受けた一樹は説明する。

「じゃあ説明するよ。光武F式は神崎グループのもと作られた第五世代IISだ。その特徴は操縦席にあるコードをIISスースに直結することで、従来のIISよりも操作性が良い所だ」

一夏・セシリアは気になつたあの「コードはそういう意味があつたと納得する。

「後ろにあるのは機動性と瞬発力を強化するブースター『疾風改』。近接戦闘型である機体に必要なのは、間合いを縮める機動性と高い攻撃力を出す力だ。それを補うための装備だ。」

セシリヤの集中砲火を出来たのはこれのおかげだ。シールドエネルギーがあつという間に0になつたのも、このブースターの瞬発力強化によるもの。

「大神さん、あなたの武器の一本の刀、通常のIISが装備する物と違いますわね。」

「あれは光武F式の主力装備は両腰に差した刀『銀狼』『白狼』だ。この装備は特殊な金属でできていて、シールドエネルギーを刀身にコードティングすることで攻撃力を増幅出来るんだ。」

「俺の白式と似ているな。エネルギーで攻撃力を上げるのは」

一夏の専用機「白式」は自分のシールドエネルギーを使いバリアーを無効化できる攻撃特化型ISだ（欠陥機のレットルが貼られている）。しかしこの刀は少し違う。

「白式のことは調べさせてもらったよ。シールドエネルギーで刃を形成の白式と違う所は、コーティング時、少量のシールドエネルギー以外にもう一つ別のエネルギーと混合してコーティングすることで攻撃力強化をしている。シールドエネルギーの消費が少量で済むことから、白式よりも燃費が良いんだ」

「マジかよ、かなり高性能じゃん。」

一夏がうつらめしそうな顔をした。ここで篠が疑問を抱いた。

「シールドエネルギー以外に何のエネルギーを使っているんだ。」

それには3人同時に思ったことである。

「すまないが俺もよくわからないんだ。設計図を見た時はそのエネルギー名が『R陽子』と書かれているだけで詳細が書いてなかつた。」

『『R陽子』。それは従来のISになれば、マニュアルに載つている用語でもない。どういう意味かわからなかつた4人にはその疑問が残つてしまつた。『R陽子』について考えているとき予鈴がなつた。』

「そろそろ時間だ。もっと知りたい場合は毎次にある『登場IS・兵器』で見てくれ。」

読者に解説する。一樹。と横から一夏が

「誰に話してんだ？」

とツッコミをいれる。

今日の授業はISの操縦訓練。

「まず基本的な飛行操作を行う。大神、織斑、オルコットやってみせろ。」

千冬先生に言われセシリ亞は待機状態にあつたイヤリング状のブルーティアーズを展開し、続いて一樹も待機状態にあつた絵馬状の光武を展開したが、一夏はまだ出来ない。まだ展開がうまくできないらしい。

「織斑、何をしている。熟練者なら展開に1秒もかかるんぞ」

「イメージ、イメージ……来い！白式！」

力を込めなんとか白式を展開した一夏。

「よし、飛べ」

大神、セシリ亞は勢いよく飛んだ。一夏はふらつきながらもなんか空へ飛んだ。下から篝が不安そうに見ていた。グランド上空を旋回する3機。大神機、セシリ亞機を先頭に後ろから一夏機が来る

「遅いぞ、織斑。スペック上、出力は白式が上だ」

一夏はISを動かしてまだ一ヶ月も経っていない素人同然。

「ええと・・・『自分の前方に角錐を展開するイメージ』っと」

横から速度を落とした大神、セシリ亞がアドバイスをする。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がわかりやすい方法を摸索する方が建設的ですよ」

「そういわれてもなあ」

「そうだ、Don't think・Feel 考えるな、感じるんだ」

昔の香港映画にそんな言葉があつたが、今どきの若者は知る訳がない言葉に一人は首をかしげた。

「三人とも、急降下と完全停止をやってみせる。目標は地表から十センチだ」

「はいっ。では、お先に」

セシリ亞は急降下し、地上数センチの完全停止を難なくクリアした。

「じゃ、下で待っているぜ」

一樹も急降下、地上数センチの完全停止をクリアした。最後は一夏の番。スゴイ速さで急降下した。

キイ

ン一ズド

ン一

急降下ではなく墜落だった。グラウンドに大穴があき、下を見ると一夏の顔が埋もれていた。一樹は下に降りて一夏を掘り起した。

「アラレちゃんかお前は。大丈夫か、一夏」

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すいません」

肩を落とす一夏を心配すかのようにセシリアが寄ってきた。

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやつただろう。それにISを装備していて怪我などするわけがないだろ？ 」

篠が降りてきた。

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

一人がだんだん仲が悪くなっているのは氣のせいだろうか。一夏はそう思い、一樹は昔見たすみれとグリシーヌの喧嘩を思い浮かべてた。

「お前ら、何をやつている！ 無事ならさつと上がつて来い！」
上から千冬先生の怒鳴り声に驚き、4人はすぐに穴を登った。

「次は武装展開だ。では始める。」

一夏は『雪片式型』、セシリ亞は『スター・ライト』と展開し、一樹は両腰の刀『銀狼』・『白狼』を抜いた。
「織斑、遅いぞ。0・5秒で出せ。オルコット、そのポーズはやめ

ろと言つたはずだ。・・・大神、武装はそれだけか?」

「二刀は量子化しにくいから腰に差しているんです。他の武装は調整中で。」

ISは武器を量子化しデータ保存することができ、複数の武器を内蔵することができる。でもこの二刀は特殊金属のせいか量子化しつくづく、IS待機状態の保存がやつとのこと。そのため展開すると同時に常に差している状態である。

「そうか、まあいい。それじゃあ各自訓練を始めろ!」

終鈴5分前。

「今日の授業はこれで終わる。それとクラス対抗戦だが織斑ともう一人、大神が特別に参加が認められた。代表はクラスから一人が原則だが、単独名義で出場することとなつた。」

千冬先生から衝撃の発言。これにはクラス一同が騒然する。

「大神くんが特別出場ですって」

「やっぱり男だからかな、上も気になるからデータがほしいのかも「スゴイですわ大神さん、単独名義で出場なんて。このセシリ亞・オルコット、心から祝福を申し上げますわ」

「えつ、ウソでしょ」

これには一樹も驚いた。聞いていたクラス対抗戦に単独で参戦するのだから、トーナメント表に1組、2組、3組、大神一樹と表記されるということになる。

「織斑はクラス代表の名に恥じぬよう精進しろ。では授業は終了だ。あつ、言い忘れたが織斑は開けた穴を埋めておけ。では解散」

千冬先生から、さりげにグランド整備を言い渡された一樹。それを不憫に思った一樹は整地を手伝つた。ふと一樹は訓練時、視線を感じたことを一夏に話した。

「なあ一夏、訓練のとき誰かに見られている気配しなかつたか?」

「いや、なにも感じなかつた」

「そうか・・・」

一樹は首をかしげ、黙々と整地を手伝った。

その日の夕食後の自由時間。一樹・一夏は2人の女子生徒によびだされて、寮の食堂に連れて行かれた。

「織斑くんクラス代表アーノンド大神くん特別出場おめでとう!」
壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれ、下に黒マジックで『&大神くん特別出場記念パーティー』と書かれている紙がかけてある。まあ今日知ったから慌てて書いたんだろう。

「まさかウチのクラスから一人も出場するなんてね~」

「ホント、同じクラスになれてラツキー」

「二人ともセシリアとの、戦いもイイ線行つてたよね~」
「織斑くんのIISもカッコイイけど、大神くんのIISも武士見たいでステキ。」

女子たちが一人の話題でキャイキャイしている。

「人気者だな、お前ら一人」

篝はそうつぶやいて茶を飲む。

「どうも~、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏くんと大神一樹くんに特別インタビューをしにきました~。あ、私、副部長の篝薰子です。」

二人に名刺を渡す篝。

「ではまず織斑君! クラス代表になつた感想を、どうぞ!」

「えーと……まあ、なんていうか、がんばります」

冴えないコメントである。篝の「馬鹿者」という声が小さく聞こえた。

「冴えないけど、まあ適当に捏造しておくからいいとして」

この人、相当綱渡りなコト繰り返したんだろうか、一樹はまるで命懸けの博打をやって来た人のように見えた。一夏にもう何もないと悟った彼女は、次に一樹をインタビューした。

「じゃあ次は大神くん！ 特別参加ということで出場することになつたけど、その感想は」

「特別出場出来ることをとても嬉しく思っていますので、参加する以上、粉骨碎身の覚悟で頑張ります。あと代表の一夏によい結果を期待しています。」

「一夏以上にいいコメントを言い残した一樹。

「いいね～。次にあの第5世代ISについて何か教えてくれませんか」

「自分のはまだプロトタイプなので、第5世代型はあの1機だけですとしか言えません。」

「じゃあ最後の質問。IS学園にきた理由は」

「男でISを動かせるのにはそれなりの訓練が必要です。学園に入った理由はもつと上手く操縦できるようになりたいからです。」

「ありがとうございます。じゃあ、代表を一夏くんに譲ったオルコットちゃん・

セシリシアは息を整え語りだす。

「わたくしはこうゆうの苦手ですが、まあいいでしょ！ホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかといふと・・・」

「・・・は長いから適当に捏造しておくれ。」

セシリシアはズルッと口ケた。

「じゃあ最後に写真とるから、まず織斑くんと大神くん握手をしている写真ね。ハイ、チーズ！」

二人の写真は、後に生徒間で高く売買されることになるだろう。「今度は大神くん、織斑くん、オルコットちゃんの手の甲を重ねて3人で撮るよ。」

その瞬間、クラスの女子全員が田を光らせた。

「その写真は貰えますの？」

「もちろん。」

「（貰えたら額に入れて飾つて置きますわ。あと一夏さんと大神さ

「のツーショットも）」

「じゃあ撮るよ、ハイ、チーズ」パシャ
撮り終わるとクラス全員がフレームに入っていた。幕もどさくさに
紛れて一夏と一樹の間に入っていた。

「あ、あなたたちっ！せっかくのスリーショットが台無しですわ！」

「まあ、まあ、まあ」

「オルコットだけ抜け駆けはさせないわよ

「クラスの思い出になつてい旃やん」

クラスの全員が同じ行動に入るとは想定外だった。3人で撮ると
き全員が目の色を光らせていたのはこつゆうことだった。ちなみに
一樹・一夏のIS操縦時の隠し撮り写真も生徒間で売りさばかれい
ることはあまり知られていない。

この後ドンチャンは続き、パーティーは終わったのは10時過ぎで
一樹、一夏は疲れて布団に潜った。布団に入つて一夏はすぐに寝て
しまつたが、一樹はパーティーとき黨の

「IS学園に入った理由は」

について考えていた。一樹はISを使いこなしたいと言つたが、彼
のIS操縦は非公式であるが世界一の実力で、基礎を勉強する必要
なんてないハズ。その世界一の人間がなぜ今更、この学園に入った
のか。一樹は自分の机の引き出しから手紙の入つた封筒を取り出し
て読みはじめた。そして4、5分経ち、読み終わつたところでつぶ
やいた。

「一郎じいちゃん、俺をIS学園に行かせた本当の理由は何？」

文末に差しし人の名前が書いてあり、「大神一郎」と書かれていた。
その手紙は「大神一郎」の書いた遺書である。

第4話 スナップ・パニック（後書き）

タイトル由来は「フルメタル・パニック」より

第5話 中國からの転校生×

「～走れ 高速の 帝国華撃団～」
一樹は剣道部の朝練の後、授業が始まるまでの間iPodを聞いていた。筈も席に座つて不機嫌そうな顔で外を眺めていた。また一樹との勝負に負けたのである。

「おはようございます、大神さん」

セシリ亞と一夏がそろつてきた。この二人も対抗戦に備えて朝練をしていた。

「おはよう。一夏クラス対抗戦頑張れよ。」

だんだんクラスの生徒が登校してきた。するとあることを耳にはなんだ。

「おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校？、一樹以外に？」

「転校生？この時期に？！」

「確かにIS学園への転入つて、国の推薦がないとダメなんじゃなかつたか？俺は特例で入れさせてもらつたけど」

「なんでも中国の代表候補生らしいですわ。私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

なるほど、それなら国のお墨付で転入出来る。さすがはセシリ亞。代表候補生らしく、他の候補生の情報をしつかり仕入れてる。

「どんなやつなんだろうな」

「きっとチャイナ服で、メガネで、そばかす・三つ編みで関西弁を話す子かな？」

明らかに誰かを指しているような発言。一樹の知っている中国人女性はこの人しか知らない。

「む……気になるのか？」

筈は一人を睨んだ。

「ん？ ああ、少しば

「俺も、少し」

「ふん……」

篠の機嫌が悪くなってしまった。すると女子たちが寄ってきた。

「一人とも、クラス対抗戦、頑張ってね。一位のクラスには優勝商品として学食デザートの半年フリー・パスが配られるのよ。」

「二人も出場するんだから、どちらか脱落しても最後の一人が辿りつければ商品はもらえるよね~」

「俺には商品出ないよ。先生が特別出場者は対象外だつて言つてた。」

「その言葉に女子たちががつくりする。その後一夏に思いつきり発破をかける。

「織斑くん！ 頑張つて！！ 男の底力見せてあげて！！」

彼女たちはああ言つているが、100%商品田当てだらう。

「まあ、やれるだけやってみるか

「やれるだけでは困りますわ！ 一夏さんには勝つていただきませんと！」

「そうだぞ。男が弱氣でどうする。負けたら承知しないぞ」

クラスの女子、セシリ亞、篠が好き勝手に言つてる。一夏は一樹に助けを求めた。

「大神、なんとか言つてやつてくれ

「ファイトオー、一夏。」

助ける空気じやなかつたのか、フォローの言葉が何も思い浮かばなかつたのか、あつせり一夏を見捨ててしまつた一樹。南無三。

「でも、今のところ専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから、余裕だよ」

「その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえた。見るとツインテールの氣の強そうな子が立っていた。

「一組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから。久しぶりね、一夏。」

「鈴……？　お前、鈴か？」

「なんだ、知り合いか？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たつてわけ。」

「宣戦布告？決闘の果たし合いかい。」

「なつ！　なに言つてんのよ、対抗戦に決まつているでしょ。それにアンタ誰よ！」

「申し遅れた、俺は大神一樹。今度の対抗戦に特別参加するんだ」

「へえ、あんたね。「世界で一人目の男性IHS操縦者」っていうのは」

鈴は一樹に寄つて彼の顔をジッと見る。

「ふうん、イイ男じゃない。でも、あたしを落とすのは諦めなさい。

「お、俺は何も・・

何がなんだかわからないが、ふられてしまった。

「さて、一夏。今はあんたに用があ・　げんこつ・

永遠の5歳児が叩かれるような音が響いた。

「いつた～、ちょっと何すんのよ！　つて千冬さん・・・

「織斑先生と呼べ。早く自分の教室に戻れ、バカモノ」

「は～い。一夏、またあとで来るからね！逃げないでよー。」

彼女はあっかんべ～をして去つて行つた。

授業が終わり、昼食の時間。一樹、一夏、箒、セシリ亞、鈴は食堂にいた。

「一夏…どうこう」とか説明してもらおうか…」

「そうですわ！ま・まさかこの人とつ・付き合つていらっしゃるの！」

「箒とセシリ亞は一夏に迫る。

「セカンド幼馴染だよ。箒がファースト幼馴染だ」

「 篠が引っ越していったのが小四の終わりだつただろ？ 鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。つまり二人は入れ違いで引越しして来んだ。中一に転校したから会うのは一年半ぶりだな」

「（幼馴染にファーストもセカンドもあるのか）」

「数奇な出会いだな。

「で、こっちが篠。ほら、前に話したろ？ 小学校からの幼なじみで、俺の通っていた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ。初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

軽い火花が散つた。

「こいつが大神一樹。ここで唯一の男仲間だ」

「改めまして、よろしく」

「こちらこそよろしく」

「ちょっと！ わたくしの存在を忘れてもらつては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「・・・誰？」

「なっ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリ亞・オルゴットですよ！？ まさかご存じないの？」

「うん、あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ・・・！？ い、い、言つておきますけど、わたくしはあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦つたらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

「い、言つてくれますわね・・・」

「（落ち着くんだ、セシリ亞くん）」

怒りが頂点に達する前に一樹が止めた

「あんた、対抗戦に特別出場するんでしょ。特別つていうくらいだから強いんでしょ」

「鈴は一樹に訪ねた。

「たぶん、それに上が決めたからな」

「まあ、頑張ってね）。それより一夏。アンタ、クラス代表なんだ

つて？」

「お、おひ。成り行きで。」

「あ、あのさあ。HSの操縦、見てあげてもいいけど？」

「そりゃ助か……」

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「あなたは一組でしょうー？ 敵の施しは受けませんわ」

「一夏の決定権は一人の発言で飛ばされた。

「あたしは一夏に言つてんの。関係ない人は引っ込んでよ

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしてもと頼まれているのだ」

「一組の代表ですか、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて図々しいことを

「後からじゃないけどね。あたしのほづが付き合はは長いんだし

「そ、それを言つなら私の方が早いぞ！」

何の勝負をしてるのか。男子にとつてはびくともいいが、女子にとつては大事なことらしい。なんとか軌道変更しないとますますヒートアップする。

「そういえば、親父さん、元気にしてるか？」

「あ・・・・うん、元気・・・だと思う」

なんとか軌道変更は成功だが、元気だと思つのはどうにかことなか。

「それより、積もる話もあるでしょ？ 放課後にでも……」

「あいにくだが、一夏は私とHSの特訓をするのだ。放課後は埋まつている」

「そうですね。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏ー！」

鈴は食器を片付けて食堂を出て行つた。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「一夏さん、わたくしたちの有意義な時間を使つていいといつ事實をお忘れなく」

「前途多難だな、一夏。俺も付き合つよ。」

放課後、グラウンドに集まつた4人。

「な、なんだその顔は。おかしいか？」

「いや、その、おかしいっていつか・・・」

「篠ノ之さん!? ど、どうしてここにいますのー?..」

一樹と一夏、セシリ亞の前にいるのは篠。しかも純国産のEIS『打鉄』を展開している。何というか、篠の侍のような雰囲気にすゞく合つてゐる。一樹の光武を展開すればもっと似合つ。

「どうしてもなにも、一夏に頼まれたからだ」

確かに篠にも頼んでたし、格闘訓練の相手を頼んだ。でも、あれは篠に近接格闘のコツを教えてもらつていう意味だったんだが、訓練機を借りてくるとは。おまけにライバルである一樹にEISで勝負するため目的も兼ねてだろう。恋・対抗心ある女子の行動力はスゴイ。

「くっ。まさかこんなにあつさつと訓練機の使用許可が下りるだなんて・・・」

とても悔しそうな声を上げるセシリ亞。一樹と一夏の男二人で訓練できると思つていたらしく、すゞく悔しそうだ。

「では一夏、大神、始めるとしよう。剣を抜け」

「お、おひつ」

「いぐぞつ!」

一夏は雪片を展開し、一樹は銀狼・白狼を勢い良く抜いた。

「では・・・参るつ!」

と、そこにセシリ亞が割り込んだ。

「お待ちなさい! 一夏さんとお大神さんのお相手をするのはこのわたくしですわ!」

「ええい、邪魔な! ならば斬る!」

「訓練機ごとに遅れを取るほど、優しくはなくつてよ!」

そしてそのまま一人は戦闘に入ってしまった。一樹と一夏は顔を見合わせ、相談する。

「どうするんだ、一夏」「

「しょうがないからお前が教えてくれ」「

「わかった。男同士・女同士で訓練するか」

戦闘をしている一人の方を見る。一人の戦闘を見て、星一徹のようにしてごかれると一夏は思った。一人は急にこっちを振り向いた。

「一夏！大神！」

「何を黙つて見てますの！？」

「いいっ！？　だつてどつちかに味方したらお前ら怒るだろ？」「

「当然だ！」

「当然ですわ！」「

「（よくもまあ、この二人好かれたな一夏）」「

どちらかに加勢しても怒られる。加勢せずに傍観していても怒られる。なら他に選択肢はないのか。一樹が考えた。

「じゃあこうしよう。一人対一夏で勝負し、一夏がダウンしたら俺と交代、回復したら俺と交代っていうのはどうかな。その繰り返しで」

「いいだろう。覚悟しろ一夏。その後は大神お前だ」

「まあ、いいでしょ。一夏さんが近接・中距離両方を訓練できますし」

「おい、それって俺が地獄になるんじゃないか」

「（どちらかに加勢して、どつちかに恨まれるよりはマシだよ。それにお前は『クラス代表』の看板を背負っているわけだから、厳しくしなきや勝てないぞ）」

一夏に耳打ちした一樹。体を犠牲にして、好感度を極力落とさない選択肢、大神家の考え方である。これしかないので一夏はそれに乗つた。結局星一徹のようにじごかれてしまったのである。

第5話 中國からの転校生X（後書き）

タイトル由来は映画「遊星からの物体X」より

第6話 ICHIKA 約束の男

時は日入り、辺りは暗くなってきた。グラウンドに、あおむけに倒れている一人の男がいた。一夏である。一樹の考えた特訓法にのつた結果である。

「ゼエ、ゼエ、ゼエ……お前……俺を……殺す……気……か……か……ゼエ」

「今日は、このくらいにしておきますか」

「情けない、それでも男か。鍛えてないからそうなるのだ」

「一対一じゃこうなるって」

その横で一樹がケロツとした顔で、立っていた。

「生きているか、一夏」

「それに比べて、大神さんは平然としていますわね。あんなに動いたのに、疲れがきてなさそうですし」

「俺はあと5時間はイケるよ」

「（お前のIS稼動時間は何時間だよ）」

心の中でつぶやいた一夏。あつという間に打ちのめされ、休んでいる間、一樹の訓練を見ていると二人相手に全く疲れる色をしていかつた。

「剣道以外にもISでお前に負けるとは、何たる未熟！明日こそは私が勝つ！」

剣道以外にもISで一樹に対抗心を燃やす籌。よほどの決闘マニアなのか。筹と一樹の戦闘訓練は激しいチャンバラを繰り広げ、あつという間に一樹に軍配が上がった。

「では、一夏さん、大神さんちほど」
セシリ亞はそう言い残すと去つて行つた。

「私たちも寮に戻るぞ」

「先行つてくれ、俺はまだ動けない」

「俺も一夏と後から行くよ」

「しょうがない奴だな、後から来い。大神、明日の朝練も私と手合わせしてくれ」

「わかった、簞くん。じゃあとで」

簞も去つて行つた。あれ今、簞のこと名前で。

「大神、今、簞のこと名前で言わなかつたか」

「ん、ああ。今日の朝練のとき、（お前は私が認めた、ライバル好選手だ。

だから私のことは名前で呼んでくれ）って言われたんだ」

あの簞が名前で呼ぶことを許すなんて、どういう心境の変化だ。

数十分後、一夏はなんとか動けるようになり、二人は更衣室にいた。

「これからクラス対抗戦まで、ずっとこの調子かよ」

「二人もお前のためを思つてやつてくれてんだ。期待に答えてあげないと」

一樹はISスーツを脱いで、制服に着替え終わつていた。一夏はまだISスーツを着ていて、ぐつたりしていた。よほどしごかれたんだろう。何せ打ち込まれた上に撃ち込まれ、星飛雄馬も逃げたくなるような訓練だった。

「お疲れっ、一夏！飲み物はスポーツドリンクでいいよね。」

元気な声がした。一夏のセカンド幼馴染・鈴だ。一夏にタオルを

「あれ、カズキ、あなたも一緒？ 一夏の特訓に付き合つてたの？」

「ああ、一夏がクラス代表で出るからな。俺も訓練がてら、協力しようと思つて」

「へえ、やさしいのね。あつ「ゴメン。飲み物とタオル、一夏の分しかないや」

「いいよ、いいよ、俺先に帰るからそんなに気を使わなくて。じゃあ一夏、先行つてるよ」

一樹はさつそつと更衣室から出て行つた。本当は一夏と鈴を一人きりにさせてあげるという、彼の心遣い。1年半ぶりに再会したんだから、一人きりにさせてあげるのが武士の情けである。

「（アレがサムライというのね。ありがとうカズキ） やつと・・

・一人きりになれたね

小さな声で鈴がつぶやく。

「ん・ああ、そうだな」

1025号室、一樹と一夏の部屋。一樹はシャワーを浴びて、寝巻の甚平に着替えて布団につくところだった。

「～はじめてのことなのに～みんな知つている～」

iPodをスピーカーにつなげて音楽を流していた。

「一夏のやつ、遅いなあ、いつまで話ているんだ。・・・まあいいや、カギは持つているんだし先寝るか、明日も朝練だし・・・」

iPodを切つて、布団に入ろうとした瞬間！ドアが勢いよく開いて鈴がズカズカ入り込んで来た。

「カズキ！部屋代わって！」

「いいっ！」

なんだ？一夏と一緒にじやなかつたのか。あのあと何話したんだ？わけがわからなかつた。一夏も後からきて更衣室での出来事を、かくかくしかじか説明した。

「というわけで、部屋代わって？」

彼女は可愛げで一樹にお願いする。彼女の要求に戸惑う一樹。

「無理だよ、部屋を男女混合にするのは禁止だし、代わっても俺は何処で寝たらいいんだい？」

「そうだ！男女の相部屋なんて、私は許さんぞ！」

鈴の後ろに、笄が寝巻の長着を着て立つていた。一樹は彼女の寝巻を見たのは初めてで、なかなか綺麗だったが今は見とれている場合じゃない。

「私は一夏の幼馴染だからいいの。ねつ一夏つ

「俺に振るなよ」

「とにかく部屋は代わらない！お前はさつさと自分の部屋に戻れ！」
「そういう訳だから、一夏も戸惑つているから！」は引き取つても
らえないか、鈴」

鈴はむうつと顔をした後、話をそりそりと一夏に子供のことを交わした約束を話した。

「ところで一夏、約束覚えてる?..」

「約束?」

「そ、小学生の時の・」

「無視するなつ・こなつたら・・成敗つ」

筍が竹刀で鈴に斬りかかった。これはヤバイと思い、一夏と一樹は止めに入ろうとした。鈴は自分のT恤の右腕を部分展開し、筍の一撃を防いだ。

「部分展開! ? しかも早い」

「(この子、なかなかデキるな)」

「いまのが生身の人間だったら、本気にあぶないよ。ま、いいけどね」

筍は竹刀をさげ、鈴は展開を解除した。展開速度が早いほど、その者が強いことを意味する。つまりそれだけ鈴が強いということである。

「そ、そうだ、約束がどうとか言つてたな。何の話だ。」

「あ、うん! .. .あのさ・・えつと・・覚えてる・・よね」

一夏は手をあごに抑えて思い出そうとする。

「えつと・・あれか。鈴の料理の腕が上がつたら毎日酢豚を・・・

「そう、それ!」

「お! つてくれるつてやつか」

いい約束だと思うが、鈴はハイツ? という顔をした。

「だから、俺に毎日メシを作ってくれるつてことだろ。いや〜、一

人暮らしの身にはありがたい・」

バシンツ! 鈴は一夏の頬を強く叩き、彼の頬には手形がくつきり残つた。

「最つ低! 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて! 男の風上にもおけないヤツ! 犬に噛まれて死ねつ!」

彼女は激昂し、一方的に一夏を責めた。一樹と筍はいきなりすぎて、

キヨトンとしていた。

「な、なに怒つてんだよ。ちゃんと覚えていただろ？」「

「約束の意味が違うのよー意味が！」

「だから説明してくれよーどんな意味があるってんだー!?」

「聞くかぎりとても良い約束である。女の子にご飯作つてもらえるなんて。だが他に何の意味があるのか、一樹・篠には理解不能だった。一夏に説明を迫られた鈴は、顔を少し赤らめ小声で言つた。
「せ、説明なんて、そ、そんなこと言えるわけないでしょ。……じゃあこうしましょう。来週のクラス対抗戦、そこで勝つた方が負けた方になんでも言つことを聞かせられる。」

「おういいぜ。俺が勝つたら説明してもらひからな
「そつちこそ覚悟しなさいよつ！」

彼女はカバンをもつて出て行つた。

「一夏」

篠が怖い顔で一夏を睨みつけた。

「馬に蹴られて死ねっ！」

そう言い残すと竹刀を持って出て行つた。

「女のビンタは心身共に痛むなあ。お前この調子が続けば、大奥みたいになつてしまふぞ。あつ、頬がまだ赤い・・・」

「あいつつ。女ってなんであんなに怒りっぽいんだ」

一樹は氷を一夏に渡した。なんでこうなつたのか。一樹と一夏はもう何がなんだか、わけがわからなかつた。

一樹・篠・セシリ亞の一夏に対する星一徹のような指導が一週間続
き、そしてあつという間に対抗戦当日を迎えた。

第6話 ICHIKA 約束の男（後書き）

タイトル由来は映画「HACHII 約束の犬」より

第？話 タタミネーター

試合当日、アリーナの席には生徒以外にもVIP席にお偉いさんが座っていた。今大会の目玉は、何といっても一人の男性出場である。しかも専用機持ち同士の戦いとあって、アリーナは満席。それどころか通路まで立つて見ている生徒で埋めつくされ、会場の外ではモニターで試合を観戦する生徒もいる。第1試合の組み合わせは一夏と鈴で、一樹は第3試合に単独名義出場とのことである。一樹、篠、セシリ亞の3人は千冬先生、山田先生とともにモニタールームからその試合を観戦することになった。

モニターには鈴の「甲龍」が映つて。ブルー・ティアーズ同様第3世代のIISで、肩の横に浮いたスパイク・アーマー装甲が、攻撃的な主張をしている。

「一夏は大丈夫だろうか・・・」

「どういうことですの？」

「一夏はIISを操縦してから一ヶ月しか経っていないシロウトだ。

相手は代表候補生で、不利じゃないのか」

「何を言っていますの、大神さん。一夏さんはこのわたくしと互角に戦つたのですよ？ 心配は不要でしょう」

「でも鈴は一夏とセシリ亞の模擬戦をビデオで見ているんだ。それに武器・操作・経験のアドバンテージは彼女が上だと思う」
一樹とオルコットが一夏の勝敗予想をしているを話している。それに千冬先生が割り込んだ。

「いや、この一ヶ月で一夏もある程度成長したし、元々あいつには才能があると私は思っている。それにあいつは土壇場で逆転するタイプだからな」

「（一夏、勝てよ）」

篠が不安そうにモニターを眺めていた。

いよいよ試合開始だ。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』
アナウンスが聞こえ、一夏と鈴が戦闘態勢に入る。

『それでは両者、試合開始！』

その後、一夏が展開した雪片式型が鈴の青龍刀・双天牙月に弾かれる。一夏はそのまま旋回して鈴を正面に捉えた。その後も鈴は縦横斜めと、自在に角度を変えながら斬り込んでくる双天牙月を雪片式型でなんとか防ぐ。防戦一方の一夏が距離をとろうとしたとき、鈴の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間、一夏は見えない衝撃を受けた。

「あれは一体？」

「弾が見見えなかつたぞ」

モニターを見ていた一樹と篠が呟く。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す わたくしのブルー・ティアーズと同じ第三世代型装備ですわ」

「そうなのか？セシリ亞」

「ええ。しかも、砲弾だけじゃなく、砲身まで見えない。それに加えて砲身が実体じゃないから、どこにでも撃てる・・・」

「完全にステルスか。これは厄介だな」

一夏の技術はブルー・ティアーズならまだ回避して攻撃できるが、見えないというのは辛い。しかも鈴の技術も加わってかなりの強さを誇っている。一夏は鈴の攻撃をかわしながら、何かを狙つて動き回っている。それに気づいた山田先生が呟く。

「織斑くん、何かするつもりですね・・・」

「瞬時加速だろう。私が教えた。一瞬でトップスピードを出し、敵に接近する奇襲攻撃だ。出し所さえ間違えなければ、あいつでも代表候補生と渡り合える。セシリ亞と大神の勝負のとき、大神が使つたものだ」

「わたくしと大神さんの勝負？」

「俺がセシリ亞くんとの勝負のとき、光武のブースターを使ってセシリ亞くんの攻撃を避けたのと似たものだ。俺の場合は奇襲よりも間合をつめての接近法として使っているんだ」

である。

「しかし、通用するのは一回だけだ。一夏の瞬時加速はあくまで奇襲攻撃。奇襲というのは普通一度しか通用しない」

—そ、そこなのですか！？

「たが成功すれば一夏にも勝機が生まれる。失敗すればそのまま負けるだろう」

「すまなー、ちょっと席外す！」

「どうしたんでしょう、大神さん。あんなに慌てて

と/or 手洗いたる、一夏の遠軽處は見れすしましたな

ターザーを凝視したとき、ついに一夏が瞬時加速を発動させた。一夏と鈴の距離が一気にゼロになる。そのまま零落白夜を発動させた雪片式型で鈴に切りかかる。

ズドオオ

ン

その直前、大きな衝撃がアリーナを襲つた。

たみたいですね！」

山田先生の言葉を聞きながらモーターを見ると、ステージ中央からは黙々と煙が上がっている。どうやら今さっきの衝撃はその『何者か』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたことによるものらしい。アリーナの遮断シールドはEISと同じもので出来ている。通常の兵器なら傷をつけることすらできないそれを貫通するだけの威力を持つた『何者か』が入ってきた。その事実は観客全員に不安

を与えるには充分すぎるものだった。

煙がはれ、『何者か』の姿がモニターにはっきり映る。そこに映っていたのは異常としか言いようのないエラだった。

深い灰色で手が異常に長く、『ゴーレム』が武者姿をしたような形をしている。何より特異なのが、その『全身装甲』。その巨体も2メートルを超え、全身にスラスター、頭部にはむき出しのセンサーレンズ、腕には先ほどのビーム砲台が左右合計四つある。『何者か』は棒立ちしている鈴めがけてビーム砲を打つ。しかし間一髪、一夏に助けられ鈴は彼に抱えられた。

「バカ、バカ、バカ、一夏なにしてんのよ！ はやく降して～」「こんなときに何恥ずがしがつていいのか。お礼の言葉すらナシだつた。

「織斑くん！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！ すぐに先生達がISSで制圧に行きます」

山田先生が一夏と凰に通信を入れる。しかし、返ってきたのは先生の意に反したものだった。

「いや、先生達が来るまで俺たちで食い止めます。いいな、鈴」「だ、誰に言つてんのよ。そ、それより離しなさいってば！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

「織斑くん！？ だ、ダメですよ！ 生徒さんにもしものことがあつたら」「

山田先生の言葉をさえぎるように、通信が切られた。モニターを見ると一夏と鈴が『何者か』に向けて飛び出していく。

「もしもしー！？ 織斑くん聞いてますー！？ 凰さんも！ 聞いてますー！？」

「本人たちがやると言つていいのだから、やらせてみてもいいだろ

う

「お、お、織斑先生！ 何をのんきなことを言つてるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイラライラする

んだ」

「・・・先生。それ塩ですけど」

「・・・」

ぴたりと「コーヒーに運んでいたスプーンを止め、千冬先生は白い粒子を容器に戻す。

「あつ！ やつぱり弔さんのが心配なんですねー？ だからそんなミスを」

「・・・」

イヤな沈黙。山田先生は話を逸らしつと試みる。なんだか無駄な抵抗な気もするが。

「あ、あのですね」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ・・・」

「どうぞ」

「えつ、そ、そんなあ」

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔だ。ダミアンほどではなかつたが、人のかわを被つた悪魔だ。
「先生！ わたくしに I.S 使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」
「そうしたいところだが、遮断シールドがレベル4に設定。扉がすべてロックされていてる」

「そ、それって あの I.S の仕業ですか！？」

どうやらこの仕業も『何者か』によるものだ。

「そのようだ。しかし、三年の精鋭がシステムクラックにを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

淡々と述べる千冬先生。なんとかセシリ亞も食い下がるつとする。
「で、でしたら… その部隊にわたくしも」

「お前は突入隊に入れないからな。お前の I.S の武装は一対多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

確かに中距離射撃型で行つたら、敵と一緒に味方まで撃つてしまつ。

「そんなことはありませんわ！ このわたくしが邪魔だなどと」

「では連携訓練はしたか？ その時のお前の役割は？ ブルー・ティアーズをどういう風に使う？ 味方の構成は？ 敵はどのレベルを想定してある？ 連続稼働時間」

「わ、わかりました！ もう結構です！」

「ふん。わかればいい」

千冬先生のマシンガントークにさすがのセシリ亞も白旗を挙げた。

「先生！ 大神がいません。さっき出て行つてまだ帰つて来ません」

篠が走つて来た。途中退席した一樹が何処にもいない。

「よく探しましたの？！ 今アリーナは誰も出られないんですよ！ あなたの目は節穴ですか？！」

「探した！ でも何処にもいない！ そんなに言つんだつたら自分で探しにいけッ！」

篠とセシリ亞が言い争い、山田先生が止めに入つた。でも千冬先生は違つた。

「大神なら大丈夫だ。心配いらん」

偉く落ち着いていた。その根拠はなんだろうか。あの千冬先生がこう落ち着いているのを見て二人は言い争いを辞めた。

そのころアリーナでは、一夏と鈴が『何者か』との戦闘が続いていた。

「くつ……！」

4度目の切り込み。しかし一夏の斬撃はするりとかわされてしまつ。

「馬鹿！ ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙つてるつづーの！ アイツの動きが速すぎるんだよ！」

『何者か』は全身につけたスラスターの出力が尋常ではなく、鈴がどれほど注意を引いても俺の突撃には必ず反応して一瞬で回避する。一夏シールドエネルギー残量が60を切つていた。零落白夜を出せるのはよくてあと一回。敵は攻撃を受けた後、でたらめに長い腕を振り回して接近、反撃をしてくる。しかも、その高速回転状態からビーム砲撃までやるのだから回避しか出来ない。

「ああもうっ、めんどうかいわね」「イシー！」

鈴が衝撃砲を展開、砲撃を行う。 がしかし、敵の腕はその見えない衝撃を防ぐ。これでもう二度目だ。

「くそつ、なんてやつだよ。後ろにも目があるんじゃないか？」

「ISならハイパー・センサーで後ろも見えるわよ」

異常だった。IS搭乗者が感覚的に後ろを見るなんてことが簡単にできるとは思えない。

「鈴、エネルギーの残りは？」

「150くらいね。離れて砲撃してたから、あまりダメージも食らってないわ。あんたは？」

「俺は60もない。零落白天夜もあと一回できるかどうかってところだ。あいつ強いな。でも何か違和感を感じる……」

「違和感？ あいつは違和感の塊でしょうが」

「まあ、そうなんだがな。なにか攻撃のときの動きが変なんだよ」セシリシアとの模擬戦、彼女と、一樹との訓練のときとも何かが違う。ふと一夏は何かに気がついた。

「なあ、あいつの動きって何かに似てないか？」

「何かつて何よ？」

「いや、なんつーか……機械じみてないか？」

「ISは機械よ」

そんなコト小学生でも分かることだ。でも一夏の言つてこいることはそんなことではない。

「そう言つんじゃなくてだな。えーと、あれって本当に人が乗ってるのか？」

「は？ 人が乗らなきやISは動かな」

とそこまで言つて鈴の言葉が止まり、『何者か』を見た。

「 といえばアレ、さつきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような……」

「あいつの攻撃はいつも正確だった。正確すぎるほどにな。無人機

ならあの全身装甲も、異様な回避性能も納得がいくしな

「でも無人機なんてありえないわよ。I.Sは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

確かにそうだが、そう考えれば全ての違和感は解消される。

「仮に、仮にだ。無人機だつたら、容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

「全力も何もその攻撃 자체が当たらないじゃない

「次は当てる」

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対ありえないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょーか」

一夏に一策あると知つてか、鈴はにやりと不敵に笑つた。

「一夏、どうしたらしい？」

「俺が合図したらアイツに向かつて衝撃砲を撃つてくれ。最大威力で」

「？　いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ、当たらなくとも。アイツの注意をそらしてくれ。一瞬だけでもいい」

「了解！」

「じゃあ、行くぞっ！」

一夏の出たとこ勝負作戦を信じ、さつきと同じように『何者か』に突撃、攻撃を開始する。ただし、さつきよりも攻撃に集中する。相手の攻撃が何回当つても構わない。一夏は全力でこいつの注意をひく。

「一夏あつ！」

そんな中、真後ろからいきなりアリーナのスピーカーから大声が響く。その声は筈のものだつた。その声に意識を向けてしまつた一瞬にも満たない隙をつかれ、一夏は『何者か』の長い腕に殴り飛ばされてしまった。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうするー！」

「・・・・・」

まずい。『何者か』は今の大声、その発信者に興味を持つたようだつた。一夏からセンサーをそらし、じっと簫の方を見ている。数秒間簫を見つめた後、『何者か』はそのビーム砲の砲口を簫のほうに向ける。

彼女の方に飛びなんとか『何者か』の注意を再びそらすことに成功した。

その瞬間、一夏は鈴の衝撃砲、その射線上に躍り出る。

「鈴、やれ！」

「ちょっと、ちょっとと馬鹿！ 何してんのよ！ どきなさいよ！」

「いいから撃て！」

「ああもひつ・・・！ どうなつたって知らないわよ！」

高エネルギー反応を背中に受け、一夏は瞬時加速を作動させる。瞬時加速は後部スラスター翼からエネルギーを放出。それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。それはつまり、外部からのエネルギーでもいいということ。そして、瞬時加速の速度は使用するエネルギー量に比例する。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

一夏の声に答えるように瞬時加速と零落白夜が発動し、『何者か』に突進する一夏。

「どりやああああああああ！」

一夏は必殺の一撃で『何者か』の右腕を切り落とした。しかし、その反撃で一夏は左拳をモロに受ける。さらに『何者か』は長い腕を一夏に向け、ビームを発射しようとする。

「一夏つ！」

簫と鈴の叫びが聞こえた。

「・・・・・狙いは？」

「完璧ですわ！」

客席からブルー・ティアーズのスター・ライトとブルー・ティアーズで『何者か』を打ち抜く。『何者か』は電流と煙を出しながら倒れた。シールドバリアーがない状態でブルー・ティアーズのレーザー狙撃を一斉に浴びれば、ひとたまりもない。一夏はここまで計算してたのである。

「ギリギリのタイミングでしたわ」

「セシリアならやれると思つていたさ」

「そつ・・・そうですの。ひとつ・・・当然ですわね」

そのセリフにセシリアは顔を赤らめた。

「まあなんにしても、これで終わ・」

ビーツ、ビーツ。白式の警告がなった。

「一夏！あいつ、まだ動いてる！」

セシリアの攻撃をくらつてもまだ動いていた。まるでターミネータ

ーだ。『何者か』は一夏に向けて再びビームを発射しようとした。

「ヤバイッ！つてあれ、白式が動かない。ダメだよけられない」

鈴の衝撃砲をまともに受けたのだ。動けなくなるのが当然だが、こんな時に動かなくなるのは勘弁してほしい。『何者か』の左腕のビーム砲の砲口に光が集まる。

「これは本気でヤバイ！頼む、動いてくれ！」

絶体絶命の危機。もうダメかと思った瞬間、空から何かが飛んできた。

IS-SUITSに繋がれたコード、両腰に差した刀、サムライを思わせる風貌。そう、光武F式を展開した一樹だった。その右手に銀狼を持つており、『何者か』に突っこんで行つた。

でいいいいいやああああああああああああああ！－ ガキイイイイイン！－

一樹は銀狼で『何者か』の額を貫いた。『何者か』はさつきよりも激しく電流と煙を放出し、光の収束をやめ左腕をおろした。一樹は

左手で右腕の手首を押さえ、機体から出る桜色の光を刀に込めた。

「破邪剣征！ 桜花天昇！」

突き刺した銀狼から、桜色の衝撃波が放出され『何者か』の頭部を吹き飛ばした。頭部がなくなつた『何者か』は完全に機能停止し動かなくなつた。どうにか一夏の、絶体絶命の危機は去つた。

「もう……動かないわ……よね」

鈴があそるおそる近づき、シンシンしてみる。本当に動かなくなつたようだ。頭ナシで動いたらそれこそあつかない。

「いや～危なかつた。なんとか間に合つて良かつたよ。一夏、大丈夫か？」

一樹は刀を鞘に收め、一夏に近づく。

「一樹、助かつたぜ～ あれ・・・意識・・が・・・」

一夏は目を閉じ、そのまま氣絶してしまつた。

第?話 タタミネーター（後書き）

タイトル由来は映画「ターミネーター」より

第?話 HSの再起動する日

「ん・・・・・？」

「ここは何処だ？薬品のにおい、誰かの気配、まさかショッカー本部！？」なわけがない、保健室である。でも顔の近くに誰かの気配。

「ひえっ」

驚く声がして一夏はまぶたを開けると、鈴が顔を赤らめて立っていた。

「何しているんだ、お前？」

「お、お、起きてたの！？」

一夏はまだ重い体を起こす。

「何そんなに焦っているんだ？」

「あ、焦つてなんかないわよ・・・勝手なこと言わないでよ、バカア！」

寝ている一夏に何をしようとしたのか、ここは読者の想像にお任せします。一夏はここで氣を失う前の記憶を思い出した。

「・・・あのHSどうした？」

「カズキがトドメをさして動かなくなつたわ。心配しなくとも、ケガ人はあんた以外一人もナシ」

それを聞いて一安心した。

「・・・そとか。つ痛つてえ」

鈴の甲龍の衝撃砲を直に受け、絶対防御をカットしていたので当たり前である。数日は地獄だろつ。一夏は窓の外の夕日を見てふと昔の事を思い出した。

「なあ・・・小学校の時、酢豚の話をしたときも、こんな夕日だったよな」

「えつ？」

ふと脳の中からこみ上げてくる、小学校の教室で約束を交わした記

憶。

「（料理が上手になつたら、毎日私の酢豚を食べてくれる？）」

「あの約束つて、もしかして違う意味なのか？俺はてつきつ、タダ飯を食わしてくれんのかと思つていたんだが・・・」

「ち、違わない！違わないわよ！誰かに食べてもらつたら、料理つて上達するじゃない。あつははは・・・」

「お前の酢豚も食つてみたいけどさ、鈴のおやじさんの料理美味いもんな。また食べたいぜ」

鈴がおやじさんの名前を出すと、転校初日の食堂の時と同じ暗い顔をした。

「あ、うん。お店はしないんだ。あたしの両親、離婚しちゃつたから。国に帰ることになったのもそのせいなんだよね」

一夏は言葉が出なかつた。あんなに美味しい中華料理を食べさせてくれたおやじさんが離婚しちゃつたなんて。数秒の沈黙のあと一夏が口を開いた。

「なあ、鈴。・・・今度・・・どつか遊びに行くか？」

「えつ、それって△テ、デート！」

一夏の思い切つた言葉に、鈴の顔から満面の笑みができる。その直後、保健室の扉が開きセシリアが入つてきた。

「一夏さん、具合はいいがですか～。わたくしが看病に来て～つて？・・・あらつ？」

一夏と鈴のイイ雰囲気みてあ然とするセシリア。われに帰り、スゴイ形相で鈴に問いかける。

「どうしてあなたがつ！・・・一夏さんが起きるまで抜けがけはナシと決めたでしょ～！（怒）」

「そういうお前も、私に隠れて抜けがけしようとしていたなあ（怒）

」

「そ、それは・・・」

セシリアの後ろに腕を組んで立っていた。

「二人ともでてつてよー。一夏はあたしの幼馴染なんだからつー…」

「それなら私も…」

「だいたい2組のあなたがつ…」

なにやら言い争いが始まり、徐々にヒートアップしてきた。保険室ドアが三たび開き、一樹が入ってきた。

「おう、一夏、目覚ましたか。気分はどうだい?」

「キツ…!…!」

「キツ…!…!」

「キツ…!…!」

纂、セシリア、鈴は獲物を取り合ひ虎のよくな眼まなこで一樹をにらみつけた。

「・・・・・・・・・じや、またあとで」

一樹はそう言い残すと保健室から出て行つた。一樹が出て行つたあとで言い争いが再開した。ふと一夏は自分の身を誰よりも心配しているハズの人間がいないことに気づく。

「あれつ・・・・・千冬姉えは?」

「そういえば」

「どこへ行つちゃつたのかしら」

「さつきまで私たちと一緒にいたのだが

一樹が保健室を訪れるところから遡ること、5分前。一樹は千冬先生、山田先生のところにいた。

「なんだ、話とは」

「織斑先生、回収した未確認ISを見させてほしいんです」

『何者か』は一樹にトドメをされたあと学園に回収された。当然、未確認であるため一般学生に見せることなんて出来ない。

「ダメです、大神くん!あのISは学園のほうで分析するので生徒に見せるなんて…」

「待て、山田先生」

千冬先生が山田先生を止め、一樹に問いかける。

「お前、会場に未確認ISが現れる前に放送室から出て行つたな。そして敵が動けない一夏に攻撃しようとした時、会場に現れてトドメをさした。お前はその間、何処で何をしていた」

「会場から500メートル離れた所にもう一機現れたので迎撃に行きました」

この証言を聞くと会場に現れた機体以外に、もう一機がこの学園に来ていたということになる。

「回収された機体は一機と聞いています！そんなウソを・」

山田先生は一樹の話を聞こうとせず、かなり疑っている。千冬先生は落ち着いており、一樹の話をまともに聞いている。

「山田先生、落ち着くんだ。その機体はどうした？」

「両腕を切り落としたあと、煙幕を出して逃げました。切り落とした両腕は敵が破壊し証拠隠滅しました。 お願いです、10分・いや5分でもいいから見せてください。」

会場の機体は一夏と代表候補生であるセシリ亞、鈴の三人がかりで倒したのに、一樹はたった一人でもう一機の『何者か』を退けさせたのである。千冬先生は考え込み決めた。

「…………いいだろ？ 30分後、昇降口に来い。時間まで一夏の見舞いでも行つてやれ」

「織斑先生！？」

「ありがとうございます！ では30分後、昇降口で」

一樹は一夏のいる保健室に走つていった。

「織斑先生、いいんですか？ 一般生徒をラボに入れるなんて」

「いいんだ山田先生。それに、奴にあの機体を見せれば我々の知らない何かを掴むかもしれません」

学園はいまだ未確認のISについて研究している機関もある。そのためISの全てを知つてているわけではない。

「それは一体？」

「それは見せてからのお楽しみだ」

そして現在。千冬先生に言われた通り、30分後昇降口にいた。本当は一夏の見舞いに行つたが、幕たちに保健室から追い出されて予定の時間より10分早く来ていた。そして定刻通り、千冬先生が来た。

「大神、一夏はどうだつた」

「ええ、元気でしたよ。やさしい女の子達に看病されてました」

「一夏を巡る戦争が起きていたことはふせておこう。

「そうか。じゃあこれから機体が収容されたラボに行くわけだが、その前にこれをつける。見せるが場所は教えられんからな」
千冬先生は笑えるデザインのアイマスクとロック音樂の流れているMP3プレーヤーを渡した。視覚と聴覚を塞ぎ、ラボの場所を知られないためである。マスクとイヤホンをつけた一樹は、千冬先生に先導されラボへ案内された。

どのくらい歩いたのだろう。目も見えず、耳に流れてくるのはロック音樂で自分が学園の何処にいるのかわからない。千冬先生の先導が終わり、一樹のイヤホンをとった。

「マスクもとつていいぞ。」

一樹はマスクを外すと、そこはうす暗い研究施設でその先には一樹が倒した頭部のないISGが横たわっていた。すぐ横に山田先生がそのISGの解析作業をしていた。

「山田先生、これは？」

「あ、大神くん。あなたが倒してそのままの状態で回収しました。

多少はいじりましたが、診れない程度にはしていません」

「上に頼んで、15分間診る許しを得た。バラバラにしない限り余計な詮索はするな」

15分も診る許しがもらえるとは、どうやって上に頼んだんだ。――

樹は機体の周りを歩き、手足、間接、破損部分を見渡す。

「何か収穫はありました?」

「これは無人機。ISのコアは世界に467個しかありません。このISには467のどれでもないコアが使用されていました」

「つまり、どの国家にも登録されていないコアで、どの国家にも登録されていないISだ」

完全の名無しの権兵衛である。ISコアは世界に467しかないし、コアはブラックボックスでIS開発者である幕の姉・篠ノ之束にしかわからない。他に何かないのか、一樹は模索したが何もないまま10分が経過した。

「（何かないのか、これが一郎じいちゃんの言っていた敵なのか？・・ダメだ、何もない。）

ふと一樹は機体の胸部のド真ん中を見て何か感じる。

「先生、機体の胸を開くことこつてできますか？」

「はい、ちょっと待つてください」

山田先生はマジックハンドを操作して、機体の胸部を開いた。覗き込むと露出したコアがあつた。完全停止したもののコアは無事でまだ動いていた。

「それがISのコアだ。いま現在では未確認ということしかわからぬ」

「（この感じ、どこかで）」

なにを感じたのか、コアに手を近づける一樹。

「ちょ、大神くん！ 何を！」

一樹がコアに手をかざした瞬間、ISの手が動き出した。そして山田先生のパソコンに左手の機能が復活したことが表示された。

「大神くん！ 止めてください！」

山田先生の叫びに驚き、一樹は手をかざすのをやめた。すると左手の機能がさがり、また動かなくなつた。千冬先生が一樹に歩いていき、げんこつをした。

「馬鹿者！ 大神！ お前、今何をした！？」

「俺はただコアに手をかざしただけです。手をかざした時（腕動かせるのかな）と考えたら勝手に動いたんです」

「コアに念じて動かしたということ? そんなことが出来るハズない。IS「コアは専用機の場合、そのマスターにしか反応しない。訓練機のは誰でも使えるが、未確認ISのコアは訓練機のようになります」

「（訓練機でもないのに、コアを動かすなんて。大神くんはいったい……）」

その時、ベルがなつた。一樹の見学時間の終了である。千冬先生は再び、アイマスクとMP3プレーヤーを一樹に渡した。

「時間だ。大神、見学終了だ、来い」

「……はい。（でもあの感じは確かに）」

心のモヤモヤが残りつつも千冬先生について行く。

「今日見た事は他言無用だ。漏らした場合、お前は退学処分だ。無論私も首が飛ぶ。一夏の心の支えを奪いたくなれば黙つていろ」

「……わかりました。織斑先生、山田先生。今日はありがとうございます」

「ございました」

「本当に言わないでくださいね。私も黙認したことがバレますし……」

「はい。決して言いません」

千冬先生がいなくなれば、一夏は再び家族を失うことになるし、山田先生も骨を折ってくれたのだ。大神家の名にかけても守らなければならぬ。一樹はアイマスクとイヤホンをつけ再び千冬先生に先導された。

「着いたぞ。アイマスクを外せ」

一樹がアイマスクを外すと、そこは昇降口だった。所在不明のラボから帰ってきた。外は日が入り、星が出ていた。

「じゃあ私はまたラボに戻る。お前も早く寮に帰れ」

「はい、わかりました。今日はありがとうございました。失礼します」

「待て！ 大神」

一樹は寮に帰ろうとした時、千冬先生が呼び止めた。

「いや、なんでもない。行つていい」

一樹は首をかしげ寮に帰つて行つた。千冬先生はラボに行く道にある事を考えていた。

「（まだ言うときではない。大神一郎さん、あなたのひ孫はきっと世界を変えるでしょう）」

一樹の曾祖父、大神一郎と何か関わりがあるのか、一樹はこのとき知るよしはなかつた。

帰る道一樹はあの未確認ICOAに手をかざした時の事を思い浮かべてた。

「（あれは確かに俺の光武と同じ感覚だつた。俺のICOAはあるの未確認ICOAと同じものなのか？）」

何か悪い予感がする。しかし現時点ではまだ何もわからず、情報がない。しばらく様子をみよう、また現れるかもしれない。

「あつ、一夏の見舞い・・・・いいや、明日行こう」

一樹が寮に帰つていつたそのころ、保健室では。

「わたくしが看病します！」

「それなら幼馴染のあたしが」

「いいや、ファースト幼馴染の私が」

まだ三人は一夏の看病ついてもめていて、一夏は心の中でよるこの有野風に助けを求めていた。

「（大神くーん、たすけてーーーーーーーー）」

第?話 HISの再起動する日（後書き）

タイトル由来は映画「地球の静止する日」より

第?話 学園の休日（前書き）

サクラ大戦名物のあの選択肢が登場します。

第？話 学園の休日

クラス対抗戦の乱入事件から2日後。学園は臨時休校で静まりかえっていた。休校の間生徒達は実家に帰ったり、外出したりとのんきな生活を送っている。あの乱入事件は、実験中のISが暴走したと学園は言っているが本当のところはどうなのか。さて、ここは一樹と一夏の部屋。現在もう一人の部屋の住人、織斑一夏。彼は乱入事件の際、負傷したが無事回復し、休校を利用して実家近くの友人宅へ遊びに行っている。現在部屋には一樹一人だ。

「 南風 南風 GOGOGO～GO～」

部屋に響く、iPodの音楽。部屋には一樹一人で、何やら考える顔でベットに横になっていた。

「あの時、俺の光武と似た感覚だつた。あれは一体？」

千冬先生に見させてもらった未確認IS、あれが頭から離れない。コアに手をかざしたとき、光武と同じ感覚。となるとあのISは光武に近い新型ということになる。光武は現在、1機しかない第5世代ISのプロトタイプ。開発した神崎グループに聞いたところ、量産はしていないと証言していた。

「教科書にもあった。ISは世界に467機しかない。その467機に使われていないコアが使用されているなんて」

コアを製造できるのはIS開発者である篠ノ之 束博士のみであるが、ある時期を最後に彼女はコアの製造をやめたため、ISの数が467機しかない。ということは、使われているコアも467個しかないということになる。新型機体を造る場合は、既存の機体を解体しコアを初期化しなくてはいけない。光武のコアも467個の内、一つを解体し初期化されたコアで造られた。

「ダメだ、頭がこんがらがってきた。・・・・・散歩でもするか」「一樹は起き上ると、靴を履いて部屋を出た。

休校とはいえた全寮制の学校だから、学内には何百人の女子生徒がいる。散歩をしている一樹を見て「こそそ話をしている。

「あ、見て、大神くんよ。この間の暴走ISを止めた一人

「ホント、今日は織斑くんと一緒にじゃないみたい」

一樹は一夏、鈴、セシリアの4人は暴走IS鎮圧の当事者として学園中に広まっていた。この事件を機に一人の株価は高騰し、好意を示すものが増えた。

「大神くん、こんにちはつ」

一樹に元気なあいさつをした女子生徒は新聞部副部長の黛薰子。

「黛さん、こんにちは。今日はどうしたんですか？」

「事件後にインタビューした記事ができあがつたので、その1部を大神くんに」

黛は事件翌日、4人にインタビューをしていた。彼女はその時の記事をつくり、印刷用サンプルの1部を一樹に手渡した。

「ありがとうございます。……捏造はしていませんよね（焦）

「し、失礼ですね。ちゃんと真実を書いてますっ」

初めて出会ったときの取材の際、平氣で「捏造しておくから」って言っていたので、『男性IS操縦者』一人、代表候補生一人と愛のコンビネーションで撃退なんてスキヤンダルな記事にされたらまたもんじやない。

「なにに、『男性操縦者&代表候補生 暴走IS鎮圧 対抗戦に突如現れた謎のISは破壊活動を開始、同時にセキュリティにハッキングし事態は最悪。しかし現場にいた大神一樹（1年）、織斑一夏（1年）、セシリ亞・オルコット（英国候補生 1年）、凰鈴音（中国候補生 1年）の活躍により、被害は最小限に抑えられた』

か

「ねつ、ちゃんと書いているでしょ。」
このとき一樹に選択肢が出た。

- ・捏造したほうが売れるんじゃ
- ・ちゃんと書いているね
- ・未確認HISについての情報は？

HISは真ん中の選択肢で。

「ちゃんと書けてます。さすがは新聞部副部長、いい仕事しますね」

「～パンピロリン？」（好感度が上がる音）

「そりでしょ、そりでしょ。この記事であなたたちの株はさりに上がるわ」

好感度の上がる選択肢を選んだ結果、黛はとても喜んだ。そういう黛はこんなこ情報も。

「それともう一つ。あのHISのことなんだけど、実験中に暴走したことしかわからないの。大神くん、何か知らない？」

千冬・山田先生の約束は絶対、口が裂けても言えない。

「いや、知らないですが。」

「ふ〜ん、わかった。じゃあ私、HISの記事刷つてくるからまたねつ」
黛は疑いもなしに、校舎に走つて行つた。あぶない、あぶない。一

樹は新聞を折りたたみ、ポケットにいれて再びブラブラ歩き始めた。

「ブラブラすること一時間、そこは学園の沿岸部の臨海公園。

「もうここまで来たか。だいぶ歩いたし、少し休むか」

一樹はベンチに寝転び、海風にあたりながら空を眺め、天に手をかげした。

「どこまで行つても、俺はここから逃げられない。・・・なんてなつ

また映画のセリフをつぶやく一樹。今の状況と、映画のシーンが似たんだねつ。

「別にこの世界から逃げ出すなんて考えない。今の世界があるのは・

・あれ・・なんだか・・・眠くなつて・・・」

ウトウトしていつの間にか眠ってしまった。眠ってしまった一樹は、

昔の夢を見た。

第?話 学園の休日（後書き）

サクラ大戦名物、リップス選択。ちなみに選択肢の上段は好感度ダウン、下段は好感度変化ナシ。

タイトル由来は映画「ローマの休日」

一樹のつぶやいたセリフは、アニメ映画「鋼の錬金術師 シャンバラを征く者」より引用

次回はいよいよあの人登場！

第10話 ドリームのキャスト（前書き）

サクラ大戦からのキャラが登場！・・・回想ですが

第10話 ドリームのキャスト

2007年春、仙台、真宮寺道場。

「さくらおばあちゃん！ 来たよ！」

「あら、一樹くん。ずいぶん早かつたのね」

大神一樹（当時7歳）が訪れた道場。そこに髪をボニー・テールに結つた、和服姿の老婆がいた。彼女こそ元帝国華撃団・花組隊員、真富寺さくら（当時102歳）その人である。100歳は越えているのに髪は灰色で、シワも少なく、背筋がまっすぐに伸びている。まるで6、70歳の人間のようだつた。実は隊員全員は少女時代、常人以上の運動の継続と靈力により老化をわずかに遅らせ、身体は杖も車椅子も使わず、猫背にもなつていない。靈力とは色々な用途がある未知のエネルギーである。

「一郎じいちゃん、ちょっと寄つていく所があるつていいってさ。あ、来たよ！」

後ろから逆上がつた白髪の老人が現れた。この人が一樹の曾祖父であり元帝国・巴里華撃団隊長、大神一郎である。彼もまた、杖も車椅子使わず、猫背にもなつていない。

「やあ、さくらくん。ご無沙汰」

「お久しぶりです、大神さん。あどっそ、上がつてください」

さくらが師範を勤める真宮寺道場は北辰一刀流の流派で、剣道全国大会で9年連続優勝するほどの強豪。その休館日の真宮寺道場で一樹少年は一人、素振りを行つていた。

「一樹はどこへ行つたんだい」

「道場で素振りをしています。一樹くん、また大きくなりましたね」真宮寺家は代々の日本家屋で敷地も結構広い。その屋敷の床の間で、大神とさくらはある新聞記事を見ていた。

「それはそうと大神さん、この記事見ました？」

「ああ、見たよ。今後世界はどう動くのか、全くわからない」
その記事とは篠ノ之束がISを量産、世界に配備したという記事だつた。一人は浮かない顔をした。

「去年、束博士がISを開発した時、私たちは驚きました。あの技術は確かに・」

「待ってくれ、まだその技術が使われている確証がない。ここは様子を見よう」

二人はISについて何かを話あつていた。ISについて何か知っているのか、今はまだ明かすときではない。その時一樹がふすまを開けて入ってきた。

「さくらおばあちゃん、そろそろ剣道教えて」

「ええ、今行くわ。じゃあ大神さん、ゆっくりしていつてください」
さくらは剣道場の方へ歩いていき、大神は縁側に座り込み、けわしい表情で空を眺めた。

一樹は道場でさくらに、剣道を教わっていた。

「じゃあ、見せてもらおうかしら」

「うん！・・・・・・はあっ！」

一樹少年は腰にあてていた竹刀を抜き、4回振つたあと刀を收める
ように再び腰に竹刀をあてた。

「前よりもだいぶ太刀筋がよくなつてきたわね。ちゃんと精進して
いる証拠ね。」

「えへへ。ちゃんと家で練習してたんだ」

一樹は去年の小1に剣道を始め、二天一流は大神、北辰一刀流はさ
くらに師範してもらう形で剣の腕を磨きあげた。

「一樹くんは将来、何になりたい？」

「一郎じいちゃんのようなでつかい人間になる！」

大神一郎は、人望も厚く、正義感・信頼感がある人間。そういう人
間になりたいんだろう。

「やつ、あなたならやつとなれるわ。だつて大神さんのひ孫でもの」

かくは一樹の頭を撫でた。

「あひ・・・、起きる・・・大神、起きる」

目を開けるとそこにはポニー・テールの女性が立っていた。まさかっ！

「さくらばあちゃん！？なんで若返・・・」

「馬鹿者！何を寝ぼけている！私だ、篠だ！」

ポニー・テールの女性はさくらではなく篠だった。そこは学園沿岸部の臨海公園のベンチで、周りを見るともう夕方だった。

「あれつ、篠くん！？・・・なんだ夢か」

それもそのはず。華撃団隊員は今年の3月、全員老衰で逝去したのだ。

「こんな所で寝てたら風邪を引くぞ」

「ああ、すまない。ついつい寝てしまった。あ～よく寝た～」

一樹はベンチから立ち上がり、背伸びをした。満足そうな顔をする一樹に篠は質問した。

「なんか、イイ夢でもみてたのか」

「ああ、なんて言つかな、その、やわらかい夢だつた」

「な、なんだつそのやわらかい夢とこつのは。ふらちな夢を見ていたのか！」

一樹は懐かしい夢をみたと言つたいたつもりが、篠にはイヤラシイ意味で伝わつてしまっていた。

「ち、違つよ、なんていふかそのいい匂いの夢で」

「やつぱり、ふらちな夢ではないかつ。ええい、成敗してくれる」

篠はどこからか竹刀を取り出し、一樹めがけて振り下ろす。

「待つてくれ篠くん！そつちの勘違いだつてば、ブンッ、つわ、あぶない」

「問答無用！覚悟！」

かわして逃げる一樹に篠は竹刀を持って振り回し追いかけた。

夜。篠のしぶきからなんとか逃れた一樹は、甚平に着替えベットでぐつたりしていた。

「はあ～ひどい目にあつた。音楽でも聞くか」

一樹はイヤホンを耳に入れ、iPodを聴き始めた。曲はもちろん超高音質変換した、太正時代の音楽。

「～散るも 散らぬも そりや花に聞けよ～」

「～アラビアンカフェ 苦くて甘い 異国の味～」

iPodを聞いたまま一樹は寝てしまった。するとドアが開き、3人の女子が入つて來た。

「大神さん、いらつしゃいますかあ～。このセシリ亞・オルコットが遊びについて、あら。寝ていますわね」

「そのようね、お話ししようと思つたのに」

「やめる、お前たち。勝手に上がりこんでこんなこと

その3人は私服姿の篠・セシリ亞・鈴である。3人は部屋に腰掛けた。

「それはあなたも同じこととしてよ、篠ノ之さん」

「一夏はまだ帰つてこないし、ヒマなんだもん」

「だからといって、殿方の部屋に入るなんて」

休校中、この3人もかなりヒマだつたんだろう。鈴はニヤケ顔で篠に話しかけた。

「篠、みたわよ。竹刀を持って、カズキを追いかけ回すところ」

「なつ。あつ、あれはだな・・その」

鈴以外にもこの光景は、他の生徒にも知られていた。『竹刀を持つた女子生徒が大神一樹を追いかけていた』ということが。

「まあ、怖いですわね。あなたが竹刀を持ったら、金棒持つた鬼ですわ」

「なんだとつ貴様！猫を被つた化猫にいわれたくないわ」

「なんですつてえ！」

篇とセシリアはいがみ合い、後ろに虎と龍の幻影が表れた。ニヤニヤ顔の鈴は2人をほつたらかしで一樹の方を見た。

「よく寝ているわね。そういうえばいつも音楽聞いているけど、何聴いてんのかな？ 見ちゃえ」

鈴は気づかれないように一樹のiPodを動かし、アーティスト一覧をみた。そこには3つのアーティストしかなかつた。

「ティコク（帝国）・カゲキダン（華撃団）？ 聞かないわね、どこの劇団かな。こつちは巴里華撃団パリと大神華撃団。この華撃団つて、歌劇団の間違いじゃ」

その時入口で男の声がした。

「お前ら、俺の部屋で何やつているんだ」

もう一人の住人、織斑一夏が帰つて來た。その後ろに大勢の女子生徒がいた。

「あ～つ、大神くんの寝込みを襲つていいる～」

「ズルイよ、大神くん独り占めなんて」

「ズルイ、ズルイ」

他生徒の責めに3人は焦りはじめた。

「いや、これはですね。その・・・」

「違うぞつ、決してふらちな事はしていないぞつ」

「そうそう、遊びに来たらカズキが寝ていて・・・」

3人が必死に弁解する。この騒ぎにさすがの一樹も目を開けた。

「うん・・・うわっ、なんだこの状況はつ。なんで部屋にこんなにいるんだ」

寝ている間に何が起きたのかさっぱりわからない。まるで起きたら横にジャンボジエットが墜落しているような感じだつた。女子の群れの後ろから怒鳴り声がした。

「お前ら、何をしている！ もうすぐ消灯時間だ！ さつさと部屋にもどれ！」

寮長・千冬先生が仁王立ちしていた。それに反応し、女子達はクモの子を散らすかのように自分の部屋に帰つていった。千冬先生も男

一人に早く寝ろと言い、出て行つた。

「一夏、何があつた？」

「さあ。俺は今帰つて來たとこだし、お前が一番知つてゐるんじやないのか？」

一夏はカバンを置き、浴室へ行つた。一樹は再び眠りに入るため、流れっていた音楽を止めようと iPodを持つた。

「あれ、アーティスト一覧になつてゐる。なんでだ。・・・いいや、寝よ」

あまり気にかけずに再生を止め、一樹は再び眠りについた。

第10話 ドリームのキャスト（後書き）

タイトル由来はゲーム機「ドリームキャスト」より

第11話 ポーイ・ミーツ・ワールド（前書き）

シャルルの登場。

第11話 ポーイ・ミーツ・ワールド

「コンコン

「はい ガチャ あれ、篠くん」

一樹がドアを開けると篠が腕を組んで立っていた。

「・・・一夏はいるか？・・・話がある」

なにかもじもじしている篠の指名に一夏がドアの前に来た。

「来月の学年別個人トーナメントで・・・私が優勝したら・・・付き合つてもらひつ！」

「はい？ 一樹・一夏」

あまりにもどうとつた告白（要求）。廊下の影から3人の女子が盗み聞きしていた。

「聞いた？」

「聞いた」

「これは、大ニユースだ――――――（小声）」

数日後

「ねえ、あの噂聞いた？」

「今月のトーナメントで勝つと、」

「大神くんと、織斑くんのどちらかと付き合えるんだって」

「え、ウッソオ」

「マジ〜」

それは対抗戦が未確認IS乱入で中止になり、新しく開催する個人トーナメントのことである。それに優勝した生徒は一樹、一夏と付き合える権利が与えられるという噂が出始めた。

「何の話で盛り上がりがつてますの？」

「いや、私にもさっぱり」

この二人が知つたら大変なことになる。盗み聞きした3人組が広め

たが、歪んで広まつてしまつたようだ。

「おはよー」

「何盛り上がつているんだい？」

一樹と一夏がそろつて登校して來た。

「なんでもない（一同）」

噂をすればつてヤツだ。女子たちはかなり同様した。優勝すれば、二人の貴公子のどちらかと付き合えることを考えると興奮する。

「席に付け、ホームルームを始める」

千冬・山田先生が来て、生徒たちはすぐに自分の席に座つた。全員座つたところで、山田先生が教壇に立つた。

「今日はなんと、転校生を紹介します！」

ドアが開き、一人の生徒が入つてきた。金髪で綺麗な容姿に小柄な体格で、ズボンの制服を着ていた。その姿にクラス中は衝撃を受けた。

「シャルル・デュノアです。フランスから來ました。皆さん、よろしくお願ひします」

「・・・お、男？」

「はい、こちらにボクと同じ境遇の方がいると聞いて、本国から・・

」
キヤ――――――――――――――――――

「男子、3人目の男子！」

「しかもウチのクラス」

「美形、しかも守つてあげたい型の」

完璧な男だった。一樹、一夏に続く3人目の男性操縦者が入つてきただことに、クラス中が興奮し歓喜の声をあげた。千冬先生の一言で、教室は静けさを取り戻す。

「騒ぐなつ、静かにしろ！今日は2組と合同でIIS実習を行う。各人員は着替えて、第2グラウンドに集合。それから大神、織斑」

「はい 二人」

「デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ。解散！」

これで学園の男は3人になつた。異例中の異例だ。ISのメカニズムはさらに謎が深まつてきた。シャルルは一樹と一夏に寄つてきた。

「君たちが、大神くんと織斑くん？はじめまして、ボクは・」

「ああ～いいから、いいから。とにかく移動が先だ」

「男性更衣室がないから、アリーナのロッカーで着替えるんだ。俺らが案内するよ」

二人は席を立ち上がり、一樹はバックを持ち、一夏はシャルルの手を掴んで教室を出て行つた。

「実習のたびに移動しなきゃいけないからな、早く慣れてくれ」

「あ・・うん」

「どうしたんだい、そわそわして」

「いや・・その」

男同士なのに、シャルルはなぜか顔を赤らめて落ち着かない素振りをみせていた。その時、通路の四方から女子の声がした。

「あーーー！ 噂の転校生発見！」

「者ども。出あえ、出あえ！」

すると、瞬く間に女子が通路を覆い尽くした。

「あ～二人手を繋いでいる～」

「大神くんと、織斑くんの黒髪もいいけど、金髪もいいわね～」
「ヤバイ、ここで捕まると実習に遅れる。ここは逃げるべきだ。3人は女子たちをかいぐぐり、アリーナへの通路を走りだした。
「一夏、シャルル行くぞ！ こっちだ！」

「あ、逃げた～」

「せめて、写真を・・」

もう遅い。3人はあつという間に通路の奥へ消えていった。

授業開始まであと10分、3人は息を切らしてアリーナの更衣室に到着。一樹は入口で追跡がないか確認を終え、ロッカーの前に来た。

「なんとか、振り切つたみたいだ」

「ゴメンね、いきなり迷惑かけちゃって」

「いって。それより良かっよ。学園に男一人だけも辛かつたからな」

男一人とはい、女子99、8%の中でも0・2%しか男はない。1%にも満たない環境ではさすがにしんどかった。

「これからよろしくな。俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ」

「ボンジュール、ムツシユ。俺は大神一樹」

「よろしく、一夏、一樹。ボクのこともシャルルって呼んでいいよ」男三人組が誕生した瞬間。一人のサムライに一人の貴公子で、しかもイケメン。ここで一樹がシャルルの名前に関心を持つ。

「シャルル・デュノアか、いい名前だ。シャルルとデュノアは百年戦争時代、ジャンヌ・ダルク共に戦った戦友の名前だ」

一樹の言っていることは、シャルル7世とジャン・ド・デュノア。この二人はジャンヌ・ダルクと共にフランスを救つた英雄として語り継がれる名前である。

「ありがとう、一樹」

名前を褒められ、顔が笑顔になるシャルル。人は名前を褒められると、無意識のうちに幸福感に包まれるものである。

「うわっ、時間ヤバイな。すぐに着替えちまおうぜ」

一樹と一夏は制服を脱ぎ捨て、パンツ一丁になつた。それにシャルルは顔を激しく顔を赤らめ、顔に手を当て後ろをむいた。

「早く着替えないと遅れるよ。担任の千冬先生、時間にうるさいんだ」

「うん、着替えるから。・・あのや、一人ともあっち向いててね」なぜ、男同士なのに恥ずかしがるのかわからなかつた。一樹と一夏は後ろを振り向いた。

「いやまあ、着替えをジロジロ見る気はないが。なんでもいいけど急げよ」

一夏が振り向くと、シャルルはもう着替え終わつていた。

「着替えるの超早いな、何かコツもあるのか?」

「いや、別に。アハハハ」

シャルルのISスーツは通常のアンダーウェア状のスーツだった。
「これ、着るとき裸つていうのがなんか着づらいんだよな。俺も大
神のようなやつがよかつたなあ。」

一樹のISスーツは第5世代に合わせたもので、ズボンに上着とい
つた普通の服と変わりのない物のため、パンツとシャツを着たま
で着れるだけでなく、傷・衝撃・暑さ・寒さを防ぐスグレ物。そう
言つてはいる間に一樹も着替え終わつた。

「待たせたね。ん、シャルルのそのスーツ着やすそうだな」
「デュノア社製のオリジナルだよ。父が社長している会社の品で、
一応フランスで一番大きいIS関係の企業なんだ」
「へえ、社長の息子なのか。どうりで貴賓というか、イイ所の育ち
つていう感じがしたじやん。納得したわ」

一夏の感想にシャルルは少し暗くなつた。なにか地雷を感じた。

「二人とも、授業が始まるぞっ！早く行こう！」
時計を見ると授業開始3分前だった。一夏は急いで着替え、3人は
更衣室を飛び出し、グラウンドへ走り出した。

第11話 ボーイ・ミーツ・ワールド（後書き）

タイトル由来は海外TVドラマ「ボーイ・ミーツ・ワールド」より

第1・2話 男たちの雑談／ZATHUDAN（前書き）

登場人物が多くなってきたので、「」のセリフを誰が言っているのかわかりやすくなりました。

第12話 男たちの雑談/ZATHUDAN

授業開始1分前。男3人はギリギリ間に合った。女子生徒はもう既に全員整列していて、一樹達もすぐに列に並んだ。列に並んだ一樹に女子達が注目した。

一樹「なあ、前から思っていたんだけどさ。みんな水着みたいなスースなのに、俺だけ普通の服って浮いてないか」

一夏「しょうがないだろ。お前のスースは機体に合わせた新型なんだから」

みんなスクール水着みたいなスースなのに、一人だけ普通の服というのは非常に目立つ。水泳の授業の欠席者みたいだ。

「キンコンカンコン」

チャイムがなり、千冬先生が来た。

千冬「本日から実習を開始する。まずは戦闘を実演してもらおう。大神、オルコット！専用機持ちならすぐ始められるだろ？ 前へ出ろ！」

一樹「いきなりだな、行つてくるか」

セシ「はあ、なんだかこういうのは見せ物みたいで気が進まないですわね」

二人は前に出てきた。渋々なセシリ亞に千冬先生が近づいた。

千冬「お前は少しばら氣を出せ。あいつらに良い所見せられるぞ」

それを聞いたとたん、セシリ亞はやる気ゲージがMAXになつた。

セシ「やはりここは、イギリス代表候補生わたくしセシリ亞オルコットの出番ですね」

一樹「（なんだ!? セシリ亞くん）」

急なモチベーションUPに驚いた一樹。とその時、空から何か聞こえてきた。

山田「キヤー—————び、どいてください—————」

それはISに乗った山田先生だった。山田先生は一樹めがけて落ちてきた。

一樹「危ない！」

ズド――――――――――――

一樹は間一髪にかわし、先生はそのまま地面に激突した。砂ぼこりが晴れ、先生のIS姿を表した。

山田「あいたたたた、失敗しちゃいました～～」

千冬「山田先生は元代表候補だ。お前ら一人で山田先生と模擬戦を行つてもうづ」

今回のIS実習は山田先生と二人がかりの模擬戦だつた。一樹、セシリアはISを展開、山田と上昇していった。マイクを通じて一樹は千冬先生に質問した。

一樹「千冬先生、いいんですか？ 2対1なんてフェアじゃないですよ」

千冬「どうかな、お前はともかく、オルコットは瞬殺だな。では・・・・始め！」

セシ「では、行きますわっ！」

先攻にでたのはセシリア。ブルー・ティアーズを山田先生めがけて撃ちだした。山田先生はスイスイかわしセシリアから距離を置いた。一樹は先回りして銀狼・白狼を抜き、山田先生に斬りかかる。これも先生はかわしと盾を使って回避した。下で一夏と、シャルルが模擬戦を見ていた。

シャ「スゴイね、一樹。刀2本で先生と渡り合つていいよ

一夏「ああ。でもあいつ、他の武器積んでいるのに使わないのか？」

山田先生は武器をライフルからグレネードランチャーに切り替え、無防備のセシリアに向けて発射した。

セシ「（ま、まざいですわっ…）」

バチバチッ！ドォーン！

電気と発射の音がした瞬間、山田先生の撃つたグレネードが撃ち落とされた。セシリ亞と山田先生が横を見ると、一樹の装備している武器が変わっていた。

一樹「感無量の精度だ。悪くないが、やっぱりチャージに時間がかかるな」

セシ「大神さんっ？なんですのそのライフルは」

一樹は、右肩に装備されたレールガンを構えていた。一樹の光武の武器は、二刀だけではなく遠距離用の武器も装備していたのである。セシリ亞は一樹の装備に見とれてスキをつくってしまい、山田先生の2発目のグレネードランチャーを直に受けた。

セシ「キヤー——————」

空中に煙が立ちこめ、セシリ亞は地面に落ちていった。

セシ「わ、わたくしとしたことが、不意打ちを受けるなんて屈辱ですか」

一人残つた一樹は山田先生に向けてレールガンを連射した。銃撃も先生はスイスイかわし、一樹との間合いを詰めグレネードランチャーから近接ブレードに切り替えた。一樹もレールガンを收め、二刀を抜いた。

ガツ！ギイインッ！

先生の一撃を後ろへ受け流し、先生の体制は崩された。

一樹「もらいましたっ！」

一樹はすぐさま斬りかかるが、山田先生は右手に対工S用ピストルを持って一樹に反撃した。

山田「まだまだよつ、大神くん！」

ドンッ！

当たった！かと思ひきや、一樹はマトリックス避けをして弾をかわした。先生はすぐさま一樹の後ろに回り込み銃を構え、よけた一樹も身体を縦に1回転して体制を立て直し。二刀を振った。

カチャ！ ブォン！

一樹の身体には山田先生のピストルが構えられ、山田先生の身体には一樹の二刀が寸止めされている。互いの抑止力状態にあった。

山田「やりますね、大神くん」

一樹「先生もいい動きしますね」

そこまでっ！

千冬先生の終了の合図とともに両者は武器を收め、下に降りていった。

千冬「教員の実力は理解できたであらう。以後は敬意を持つて接するようだ。大神、なかなかイイ動きだったぞ。山田先生、もっと大神とオルコットにスバルタ指導を」

一樹にとって±0、セシリ亞にとってマイナスな指導。本当に厳しい千冬先生であった。

夜。シャルルの寮の部屋は一樹・一夏の部屋に決まり、1025室は男三人部屋になつた。一樹・一夏・シャルルは椅子に座り、雑談をしていた。

シャルル「ほんとにいいの？一樹のベット、ボクが使っちゃつて」

一樹「いいんだ、俺は布団で寝るよ。日本人は昔から床で寝るのに親しんでいるんだ」

シャルル「ありがとう。さすが、神秘の国と言われているだけあるんね」

寮の部屋は一人用なのでベットは一つしかない。そこで急遽学園に布団を支給してもらつた。しかし欧米では床に寝る習慣がないため、シャルルを布団に寝かせるのはどうかと思った。そこで一樹のベットをシャルルに渡し、支給された布団を一樹が使うということにしたのである。

一夏「しかし、男が三人になるといいもんだ。一人だけではまだ心細いかつたんだ」

一樹「まったくだ。どうだいシャルル、緑茶の味は？」

シャルルと一夏は、一樹に煎れてもらつた日本茶を飲んでいた。

シャルル「うん、紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でも美味しいよ」

一樹「それはよかつた。知り合いのプロに教わったんだ」

一夏も緑茶を喉に通す。彼も一樹の入れる緑茶は好きみたいだ。一夏は今日の山田先生との模擬戦について話だした。

一夏「大神。今日の模擬戦、お前新しい武器使っていたな。あの、どデカイライフル」

一樹「ああ、あれはフランスのIS企業・シャトーブリアン社製のレールガン『エクレール』だ。調整に出していたのが休校中に戻ってきたんだ。あと今日は見せていいが、同社製の高性能レドームも装備している」

シャルル「他の武器は装備されていないの？」

シャルルが熱心に一樹に聞いていた。

一樹「まだ調整中のがいくつかある。気長に待つさ」

一夏「まさか、それを俺との訓練のときに使うのか？」

一樹「当たり前じゃないか。セシリアルくんがいなとき、射撃型との訓練ができないからな」

一樹の訓練もまたハードな訓練である。しかし指導法が姉の千冬先生に似ているため、なかなかタメになると実感しているようだ。

シャルル「一夏と一樹はいつも放課後、ISの特訓をしてるって聞いたけどそうなの？」

一夏「ああ、俺は他のみんなから遅れているからな。で、ルームメイトで男仲間の大神に、指導してもらっているんだ。」

一樹「一夏はまだ素人同然だからな。操縦を見てあげるのが、友達である俺の役割だからな」

放課後、セシリ亞はテニス部、鈴はラクロス部、筈は剣道部で指導者がいないとき、一樹にコーチングしてもらつ。一樹も剣道部なのだが、公式戦には出れない。IS学園は女子しかいないため、全ての部活は競技連盟の女子の部に加盟しており、公式戦に出れるのは女子のみ。さらに女尊男卑の時代により、剣道に女子の部ができたのだ。一樹は己自身の修行のために在籍しているのである。

シヤ「ねえ、ボクも加わっていいかな？専用機もあるから役に立てると思うんだ」

一夏「ああ、是非頼む」

一樹「練習は人数が多いほど、成果は伸びるからね。シャルル、よろしく頼むよ」

シヤ「うん、任せて」

そんな感じで男たちの夜はふけていく。

第12話 男たちの雑談/ZATHUDAN（後書き）

タイトル由来は映画「男たちの大和/YAMATO」より

第1-3話 テクニカルサポート（前書き）

今回はTTS操作と会話が多いです。

第13話 トランスウェポン

次の日、1年1組のクラスが騒然とする。

山田「ええと、今日も嬉しいお知らせがあります。転校生のラウラ・ボーデヴィッヒさんです。」

山田先生の横には右目に眼帯をつけ、ナチス・ドイツの軍服を彷彿させるデザインの制服を着た銀髪の女子がいた。一日続けて転校生は流石におかしいことに、クラスが騒ぎだす。

千冬「あいさつをしる、ラウラ」

ラウ「ラウラ・ボーデヴィッヒー以上だ」

名前を名乗つただけの自己紹介、短すぎる。彼女の祖先はナチの軍人だったのか、厳格なオーラがビシビシ伝わって来る。彼女は一夏に目を向け、席まで歩いて来た。

バシッ！

裏拳で殴られた一夏、クラスがざわつく。

ラウ「私は認めない。貴様があの人の弟であることを私は認めるものか」

一夏は会つて殴られるほど悪いことをしたのか。でもこれはあまりにも酷すぎる非情さ。一樹が割つて入つた。

一樹「何するんだ！いきなり殴ることはないだろ！」

ラウ「フン、貴様には関係ない」

一樹「友達が殴られたのを黙つて見てはいられない」

ラウラは後ろを振り向き、一樹から目をそらした。教室内に不穏な空気が立ち込める。

ラウ「この男に友情をかけるとは、呆れる。こいつは友と呼べるにふさわしくない人間だ。近いうち縁を切ることだな」
彼女はそう言い残すと席についた。

放課後、一樹はアリーナで一夏のTIS操縦の訓練に付き合つていた。

ハズが、今回は第・セシリ亞・鈴が、一夏を指導する形になつたので一樹は一人、光武を展開して「刀の素振りをしていた。

一樹「セイツ！ ブンツ！ フンツ！ ヒュン！ とうつ！ ビュン！ はあつ！ フォン！ でやあ！ ヴオオン！ ふう、こんな感じか」

シャ「いい動きだね、一樹。完全に乗りこなしているし、白兵戦では活躍しそうだね」

横を見るとシャルルがいた。よく見ると彼は、オレンジ色の自分IS『ラファール・リヴィア・カスタムII』を展開した姿でいた。一樹「ありがとう。・・・・・ シャルルのIS、第2世代か」

シャ「うん、第2世代を大きくカスタムして第3世代にも負けない仕様にしたんだ」

シャルルのIS『ラファール・リヴィア・カスタムII』はデュノア社製の機体を改造し複数の武器積載を可能にした機体である。最も一樹から3世代、一夏から2世代も離れており兵器の名残がみられる機体だ。

シャ「ねえ一樹、その片方のブレード、ボクに見せてもらえないかな？」

一樹「いいよ、はい。気を付けて扱ってくれ」

『白狼』を鞘に收め、シャルルに渡す。シャルルは一樹から『白狼』を手に取り、隅々まで見渡した。外国人は日本刀をみて興味を抱くことがよくあると聞くが、どうやらそれは本当のようだ。

シャ「これが神崎グループが開発した第5世代の装備かあ。ヒュン！」

一樹「それが、日本刀をベースに设计したんだ。日本刀本来の性能

を忠実に再現した武器だ」

刀身・鍔・柄そして鞘まで日本刀を再現したデザインで見た目もすごいカッコイイ。この武器を裝備していることから機体カラーが紺色の光武は『青い剣豪』と呼ばれている。シャルルは刀を鞘に戻し、一樹に返した。

シャ「ねえ一樹、一夏も誘つてちょっと相手してくれる?光武と白式と戦つてみたいんだ」

一樹「いいよ、じゃあ一夏を連れて来る」

一樹は一夏の方へいきこちに連れてきた。3人の目が怖かつた。

観客「見て見て、大神くんとデュノアくんがやるみたいよ」

「デュノアくんの専用機、ラファール・リヴィアイヴよね。フランスの第2世代型IS」

「あ、大神くん刀を抜いたよ。やっぱりサムライみたいでかっこいいー」

最初は一樹とシャルルの組手。それに女子生徒は一斉に注目した。

シャ「じゃあ、行くよ一樹」

一樹「よし。大神一樹、いざ参るつ!」

一樹はシャルル目がけて突っ込んでいった。二刀をシャルルに打ち込んで、シャルルは盾で的確に防いだ。一樹の大きなひと振りをかわしたシャルルは空へ飛んだ。一樹もそれを追つて飛んだ。

シャ「来たね、一樹 カチヤ

ダダダダダダダダダッ!

シャルルは一樹の方へ身体を向け、右手にサブマシンガンを展開・発泡した。一樹は難なくかわし、シャルルに近づき一撃を入れた。

一樹「今のは一本だ、どんどんいくぞっ!」

シャ「やるね。でもまだまだっ!」

シャルルは一樹の攻撃をかわし距離をとった。距離をとったところでサブマシンガンをしまい、今度はスナイパーライフルを取り出した。

シャ「これは、よけられる?」

ドオン! チツ!

弾は一樹をかすめ、エネルギーをわずかに減らした。ここでシャルルは追い込むかのようにたて続けに打ちまくった。一樹はかわしながらもシャルルから距離をどんどんとる。

鈴 「カズキの奴、あんなに距離とつて何するつもりなの？」

セシ 「ライフルの有効射程距離から離れるためですわ。そこで昨日の装備を使うという作戦ですわね」

鈴 「でもカズキはシャルルから100mも離れているのよ！仮に長距離撃てる装備があつても、当てられるの？」

一樹とシャルルの距離は200m以上になつていた

シヤ 「こんなに離れていて、エクレールで当てられるのかな、一樹？」

ISの望遠カメラで200m以上先の一樹を見る。一樹は刀を收め予想通り、レールガン『エクレール』を取り出した。エクレールを構え、チャージする一樹。シャルルは飛び回り、狙いを付けにくくした。徐々に電気が溜まつていき、引金に指があてられた。そして飛び回るシャルルめがけて撃ちだした。

バチバチバチバチ！ドオオオン

シヤ 「来たつ。これならかわせ・バカアアン」

一樹のワンショットはシャルルの右足に被弾した。一樹はシャルルにむかつて一発一発、当てていった。

シヤ 「そんな！200mも離れているのにこんなに的確にあてるなんていいつたい。！？、あれは・・」

シャルルが見たもの。それは光武の左肩に盾のようなものが装備されていた。シャルルがそれを解析しようとすると、時既に遅し。シャルルのシールドエネルギーがゼロになり、一樹に軍配があがつた。

一夏もシャルルと手合させするが、あつという間にやられてしまつたので省略します。

一樹 「これが昨日話していた『高性能レードーム』だ。これには望遠、暗視、赤外線、相手の情報表示ほか、あらゆるレーダーが組み込まれているんだ。それをエクレールとリンクさせて、絶対的な長距離攻撃を可能にしているんだ。もちろん補助的な装備で狙撃は俺自身

の腕だけど

一夏「スマン、どういう意味だ？」

シャ「つまりこれは、迎撃ミサイルと同じようなレーダーなんだ。標的を探し、狙いをつけるといった感じにね」

一樹「これがあれば、俺は5km先にあるBB弾を撃ち抜く事ができるんだ。アリーナの範囲の狙撃なんてめじやないよ」

一夏「俺は的にはなりたくないな」

3人が手合せを終え、光武の新装備について語りあっていた。光武の新型装備『高性能レドーム』はアメリカ国防省が使うような高性能レーダー。これもシャトー・ブリアン社の装備である。

シャ「それにも、一樹は強いね。完璧に乗りこなしているつえに剣術・射撃もできるなんて」

一夏「ホントだよ。しかし俺も、射撃武器を使いたいな

シャ「あ、じゃあ練習してみよう」

一夏の一言で射撃訓練が始まり、アリーナのグランドに射撃用の的が出現した。まず一夏がシャルルのライフルを借りて、初めての射撃訓練することに。

ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！

トータル43p
t

シャ「どう？」

一夏「なんていうか、その・・・早いつていう感想だ」

一樹「初めてにしてはなかなかだな。よし次は俺・・ん？」

一樹がやる気満々でエクレールを取り出し構えに入ったとき、アリーナ上段のカタパルトに専用機を開いた眼帯をつけた銀髪の女子、ラウラ・ボーデヴィッヒがいた。

シャ「あれって、ドイツの第3世代だよね。まだ本国のトライアウト段階だって聞いてたけど」

鈴「なに！？あいつなの！一夏をひっぱたいたドイツの代表候補生って」

篝たちにも緊張が走る。ラウラは一樹たちの方へ向き、一夏に問い合わせた。

ラウ「織斑一夏、貴様も専用機持ちか。ならば話が早い、私と戦え」
一夏「いやだ、理由がねえよ」

いきなりの宣戦布告。好戦的な性格ではない一夏は不要な戦闘は避け、もうすぐ始まるクラスリーグマッチで決着をつけるようラウラに説得するが彼女は聞き入れようとしなかった。

ウイーン ガチャヤ！ ドオオン！

ラウラは急に右肩に装備した大型キヤノンを一夏めがけて発砲した。その前を刀を抜いた一樹が入り込み、銀狼でラウラの攻撃を弾き飛ばした。地面に彼女の撃つたキヤノンの薬きょうが大きな音を立てて落ちた。

一夏・（シャ）「大神・（一樹）！」

一樹「どうしても戦いたいなら、俺と戦うといふのはどうだ…ちょっとはウサ晴らしにはなるだろ？！」

ラウ「貴様、まだそいつを友呼ばわりするつもりか。最新世代の専用機を持っているからといって調子に乗るな…だけ、どかなれば撃つぞ！」

一樹「言つとくけど仮に勝負しても俺は負ける気が全然しない。未だに量産めどが立たないドイツの第3世代の機体で俺に勝てないことがわからないのかい？」

ラウ「貴様っ！」

二人のケンカはヒートアップし、火蓋が切つて落とされようとしていた。その時、アリーナのアナウンスが聞こえた。

『そここの生徒！ 何をやっている！』

この声にラウラは臨戦態勢を解除し、機体展開も解除して待機状態にした。

ラウ「ふんつ、今日のところは引いてやるわ。おいサムライ、これが最終警告だ。今度私の邪魔をしようとしているのであれば、本気で潰す！」

彼女はそう言つと去つていつた。あの目は本氣だった。しかし彼女の一夏に対する激しい憎悪はなんなのか。一夏に問い合わせても彼は黙り込んだままだつた。

第1-3話　トランスウェーポン（後書き）

タイトル由来は映画「トランスクォーマー」より

第14話 誘拐大捜査線（前書き）

タイトル無理やりですが、一夏が昔誘拐されたことを語るお話です。

第14話 誘拐大捜査線

アリーナ更衣室のベンチ、一夏が腰をかけて浮かない顔をしていた。
そこへ一樹とシャルルがやつて来た。

一樹「一夏、大丈夫か」

一夏「ああ、さっきは助かったよ。サンキュー大神」

一樹と一夏はスーツを脱ぎ始め、シャルルは上着を着て帰り支度をした。

シャルル「じゃあボクは先に部屋に戻つているね」

一夏「えつ！ここでシャワー浴びていかないのか？お前いつもそうだよな」

シャルルは転校してからT.S実習が終了たびに着替えず自室に帰るのである。男同士で着替えるのを拒むのはなにかおかしい。

一樹「どうして、俺らと着替えるのを嫌がるんだい」

シャルル「いや、べ、別にそんなことはないと思うけど……」

一夏「そんなことあるだろ。たまには一緒に着替えようぜ」

一夏は上半身でシャルルの肩を組んだ。

シャルル「うつ、うわああああああああああ！」

シャルルは悲鳴をあげ、更衣室から逃げ出した。あまりにも不自然な言動、何がある。一樹は怪しげだが一夏は「なんだ？」と不思議そうにシャルルを眺めていた。

夕方、二人は寮への道を歩いていた。一人とも特訓のあとラウラのことのが頭から離れない。ふと池のほうから声がした。

ラウ「答えてください、教官！なぜこんな所でっ」

千冬「なんども言わせるな、私には私の役目がある」

二人は木の影から覗いた。そこにはラウラと千冬先生がいた。何やらもめているみたいだ。

ラウ「教官、お願ひします。どうかもう一度、我がドイツでご指導

を！ISをファッシュョンが何かと勘違いしているこんな国の連中に指導をする必要はありません！」

千冬「そこまでにしとけよ、小娘。しばりく見ないうちに偉くなつたもんだな。もう寮に戻れ、私は忙しい」

ラウラは学園生徒を見下した意見をしゃあしゃあと述べたが、すべて千冬先生の権力の前にひれ伏された。彼女は怒りを押さえ歯を食いしばり、寮へ走つていった。

千冬「その男子一名！盗み聞きとは関心しないな」さすがは千冬先生、しつかりバレていた。二人は無駄な抵抗は止めて出てきた。

一樹「なあ、さつきのラウラって奴が言つていたこと、千冬姉えの弟とは認めないつて。あれつてやっぱり、俺のせいで千冬姉えが2度目の優勝を逃したこと？」

千冬「終わつたことだ、お前が気に病む必要はない。では千冬先生は去つていつた。一樹がおずおずと一夏に聞いた。

一樹「一夏、先生の2度目の優勝を逃したこと気持ちに差支えがなければ教えてくれないか」

一夏「・・・第2回モンド・グロッソISの世界大会決勝戦の当日。俺は何者かに誘拐された。どうゆう目的があつたのかはわからないが、俺は拘束された。それを助けてくれたのが決勝戦を放り投げ駆けつけた千冬姉えだ。決勝戦は千冬姉えの不戦敗、誰もが2度目の優勝を確信してたのに決勝戦棄権は大きな騒ぎを生んだ」

一樹「俺も知つている。かなり騒がれたよ、あの時は。でもまさか裏でそんなことがあつたとはな」

見かけによらずヘビーな過去を持つている一夏。

一夏「で、俺の監禁場所に関する情報を提供してくれたドイツ軍に借りを返すため、1年ちょっととの間ドイツ軍IS部隊の教官をやつていたんだ。」

これで納得した。ラウラは千冬先生の教導を受けた教え子であること、千冬先生にあそこまで崇拜する理由がわかつた。

一夏「・・・全て俺の不甲斐なさのせい。情けない弟だよな
自分を責める一夏。そんな一夏に一樹が喝をいた。

一樹「そんなことはないっ！千冬先生は名誉よりも家族を心配して
お前を助けたんだ。本当に不甲斐ない弟だつたら今のお前はここに
はいなー！誘拐されたのは誰のせいでもない。お前の姉さんは家族
のために命をかけて守る人だということを誇りに思うんだ！」

一樹の喝。自分のせいで千冬先生は優勝できなかつた、でも優勝よ
りも家族の命を助けたこと。そんな姉がいるということは誇りに思
つていい。

一夏「大神・・・ありがとう、俺強くなる。強くなつて千冬姉え、
そして千冬姉えが大事にしている人達を守る！ 大神、早く部屋に
帰えろうぜ！」

一夏は寮へ走りだし、一樹もあとを追いかけて走り出した。木の影
で千冬先生が聞いていた事に気づかずに。
千冬「（やはりあの方の子供だ）」

第14話 誘拐大捜査線（後書き）

タイトル由来は映画「踊る大捜査線」より

第15話 シャルル1／1（いちぶとのいち）（前書き）

シャルルの秘密が明らかになる話。ここでサクラ大戦のキャラの名前が登場します。

第15話 シャルル1／1（いすぶとのいじ）

一夏「ただいま、シャルル戻っているか

部屋に帰ると浴室からシャワーの音が。どうやらシャルルが入ってい。一夏はベットに腰掛けた。

一樹「あ、そうだ。ビオレ・切れたんだ」

一樹は棚から新しいボディソープ（ビオレ・オレンジの香り）を取り出し、浴室にいるシャルルへ持つて行った。

一樹「シャルル、ビオレ・切れてるだろ、替えの・・・

浴室で見たもの、それは胸の膨らんだシャルルの姿だった。シャルルは慌てて隠れチワワのような目でこっちを見ていた。

一樹「これ・・・ボディソープ・・・

シャ「・・・うん・・・ありがと・・・

一樹「・・・じゅ」

一樹は一步一歩ギクシャクしながら歩いていった。出て行ったあと壁に頭をつけ何かブツブツ言い始めた。

一樹「（お、落ち着くんだ大神一樹。）これはアレだ、シャルルはお湯をかぶると女になつて、水をかぶると男になるんだ。きっとそうだ、水をかければ男にもどるんだ。いやマンガでは水をかぶると女

になつて、お湯をかぶると男になるんだ。あれ、どっちをかけばいいんだ～」

一樹が何か悩んでいるのを見た一夏は気に留めず洗面所の方へ歩いていった。

一夏「何やつてんだ、大神？俺顔洗うぜ ガチャ ん？・・・」

洗面所で顔を洗おうとした一夏。見たものはタオルで膨らんだ胸を拭くシャルルの姿だった。一夏は回れ右して洗面所を出て、ベットに腰掛け何かブツブツ言い始めた。

一夏「（お、落ち着くんだ織斑一夏。）これはアレだ、昔、再放送のアニメで見たことがあるぞ、水をかぶった男が女になるつていうアニメ。あれと同じよに、アレ。水とお湯どっちだっけ～」

数十分後、二人はなんとか自分で折合いつけ、シャルルが浴室から出てきてベットに腰掛けた。

シ
ン

長い沈黙が続いた。ここで一樹が乗り出した。

一樹「あーその、なんだ。・・・お茶でも飲むか

シャ「う、うん。もらおひ・・かな」

お茶を入れる一樹。今回は冷茶を入れ、彼、いや彼女に渡した。聞くことは山ほどあるがとりあえず飲んで落ち着いてもらうことにした。

一夏「で、なんで男のフリなんかしてたんだ？」

シャ「実家からやつしゆつて言われて。社長である父からの直接の命令でね」

一樹「シャルルの実家ってデュノア社かい」

社長直々の命令、どうこうことなのか。この後シャルルの口から衝撃の事実が。

シャ「ボクはね父の本妻の子供じゃないんだ。もともと父とは別々に暮らしてたんだ。2年前にお母さんが死んで、デュノアの人引き取られた。それで色々検査する過程でIS適正が高いことがわかつて、非公式だけどテストパイロットに選ばれたんだ。父とは2回しか合つたことがなく、話した時間は1時間にも満たない」

なんといつことだ。シャルルも一夏と同じくベビーな過去を持つていた。次にシャルルは会社のことについて話だした。

シャ「そのあと経営危機になつたんだ。デュノア社はISシェアが世界第3位とはいえ、第2世代型しか生産していない。世界中では第3世代型の研究が主流なんだ。研究はしているんだけど形にならなくてね。このままだと開発許可が剥奪されてしまうんだ」

一夏「それがお前の男のフリをしているのどうこう関係なんだ？」

一夏はどう聞いても接点はないと考えた。一樹は予測した核心を口にした。

一樹「シャルルは注目を浴びるための広告塔。それに男装すればなら日本に出現した特異形質とも接触しやすいし、その使用機体と本

人のデータがとれる。つまり俺たちのデータを盗んで」こと指示されたんだ。違うかい」

シャルルは会社の利益のために引き取られ、自分の意志と関係なくIS開発のための道具として扱わってきたのである。

シャ「ほほ正解。会社の欲しいデータは光武なんだ。だから会社は君の機体データを欲しがっているんだ。・・・本当のこと話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとう。それと今までウソついていて「ermen」

・・・・・これがシャルルの正体だった。光武データを盗む産業スパイまがいであった。一樹が拳を握り締めシャルルに今後の事を聞いた。

シャ「女であることがバレたから、本国に呼び戻されるだろうね。あとのことわからぬ、良くて牢屋行きかな」

シャルルの行く末は絶望的だ。何か考えなければシャルルの自由は闇やれてしまつ。

一樹「いや、本国へ行く必要はない。俺たちが黙つていればそれで済む。そうだろ一夏」

一夏「ああ。それに仮にバレてもお前の親父は手出し出来ない。IS学園特記事項・本学の生徒は在学中あらゆる国家・組織・団体に帰属しない。ここにいれば3年は安全だ」

一樹達はシャルルをかばつた。自由を掲げた国で自由を束縛されていこうに使われてきた子。そんな子を助けない訳にはいかない。

一樹「（かわいそうな過去。コクリコおばあちゃんも家族に縁がない辛い過去があつたって言つてた。一郎じいちゃんが「コクリコばあちゃんを助けたように、俺もシャルルを助けるんだ！」）

シャ「ありがと、一樹、一夏。かばつてくれて」

彼女はお礼を言つたとき、服のファスナーが少し開いて谷間が少し見えていた。男二人は顔が赤くなり目をそらした。

一夏「お、おい、胸見えてるつて」

シャ「ええっ、もう、二人のえっち・・・」

ファスナーをあげ、やらしい顔で一人を見るシャルル、ずるい奴だ。

一夏「不可抗力じゃないか、今のは・・・じゃあ飯でも食いに行くか。今日の日替わり飯はちらし寿司だ」

日本食はシャルルにとつてもまだ未知の味。寿司は日本を代表する食事。フランス人のシャルルでもきっと気にいるだろう。するとここで食堂に向かう前に一樹が呼び止めた。

一樹「待つてくれ、シャルルにプレゼントがある。今、俺の両手の上に何もないのがわかるかい？」

一樹の両手のひらの上には何もない。その両手をポンッ！っとおにぎりを握るように手を合わせた。開けると手のひらにボールがついた髪留めゴムがあった。

シャ「スゴーイ、一樹つて手品も出来るんだね

一樹「『手品は辛い』ことがあってもそれを笑顔に変えてくれる」。
昔、ばあちゃんに教えてもらつたんだ。今はもういなけど、この
髪留めゴムはそのばあちゃんがつけていたものだ。シャルルにあげ
るよ」

シャ「ええ、いいの？それおばあちゃんの形見でしょ？」

一樹「いいんだ、俺たちの友情の証として受け取ってくれ。ばあ
ちゃんもきつと喜ぶよ。」

シャ「……ありがと。大事にするよ

シャルルは、もらつた髪留めゴムを受け取つて、今つけていた髪留
めリボンを解きゴクリゴクリが使つていた髪留めゴムをつけた。一樹の
特技の手品はゴクリゴクリから教わつたもの。ゴクリゴクリは世界で古株で
有名なサークัส団、シルク・ド・コーゴの団長。101歳の亡くな
るまで団長を務めていた。若い頃は、カリ華撃団・花組隊員として
カリを攻めた魔の怪人達を退けた功績を持つ。

シャ「ビーブ似合つかな？」

一樹「ああ、良く似合つているよ……シャルル、今は笑おう。
大丈夫、俺たちがいる」

シャ「……うんつ

シャルルに満面の笑顔が戻り、3人は食堂へご飯を食べに行つた。
部屋を出て行くとき、一樹は思い出し笑いをしてしまつた。

一樹「（ふふつ。 そういうばいおばあちやんも昔よく男の子に間違わられたな）」

アリーナ。カタパルトの上、月夜を眺めている女子がいた。眺めていたのはラウラだった。月を見て何かをつぶやいた。

ラウ「教育、春にミルヒシュトラーセ大将が亡くなり私の生きる糧はあなただけです。あなたの強さこそ目標であり、存在理由。織斑一夏、教官に汚点を与えた張本人。排除する、どんな手を使っても。そして大神一樹、私に逆らうのであるば一度と一矢に乘れなくするまでだ」

レー・ミルヒシュトラーセ。ドイツ軍の最高指揮官で106歳の亡くなるまで大将の座に就いた女性軍人。若い頃は、帝国華撃団・花組隊員という経歴の持ち主である。レーとラウラがどのような関係があるのか、今の彼女の口から教えてもらえたことはなかった。

第15話 シャルル1／1（いちぶとのいぢ）（後書き）

タイトル由来はアニメ「らんま1／2」より

第1-6話 曲を流す男（前書き）

サクラ大戦の音楽、オンパレードです。

第1-6話 曲を流す男

昼休み。一樹は早めに食事を終え授業が始まるまでの間、屋上でiPodを聴きながら日向ぼっこをしていた。と、セレベ弁当を持った一夏・幕・セシリア・鈴・シャルルが来た。

セシ「あら、大神さん。こんな所でお昼寝ですか?」

鈴「のんきなものね、コイツも。あれつ、また音楽聴いてる。またティゴク カゲキダンという歌手の歌でも聴いているのかじり」

鈴は以前、一樹の部屋にお忍びで入った際 iPodの中身を勝手に見たことがある。彼女が iPodに手を取ろうとしたとき一樹の皿が開いた。

一樹「アレ、鈴、何してるの?」

鈴「うわあ! あんた起きていたの? 腰かすんじやないわよ!」

鈴は驚き、仕返しに一樹の頭を軽く ペシン! と呪いた。一夏達も一樹によつて行き、そこで昼食をとることにした。

一樹「痛いな~ヒドイよ鈴。君たち、お前たちこれから昼食か

一夏「ああ、いいで食わして貰つか」

一同が芝に腰をかけた。いいで一夏が一樹の iPodに気がついた。

一夏「お前ついこつも音楽聴いてるみな。前から気になっていた

けどどんな歌聴いていんだ？」

一樹「見てみるかい、はい iPod」

一樹は iPod を一夏達に渡した。一夏たちはアーティスト欄を凝視しながら見ると、帝国華撃団、巴里華撃団、大神華撃団の3組しかなかつた。

篠 「・・・帝国華撃団、巴里華撃団、大神華撃団？ 聞かない名だな、どこかの劇団か？」

シャ「ボクもフランスにいた頃、この巴里華撃団っていう名の劇団は聞いたことがないよ。」

一樹「みんなが知らないのは当たり前だよ。だつてこの3組の歌劇団つていうのは今から90前、1920年代に存在していた劇団なんだ。入っている曲はその当時の曲なんだ」

一樹の iPod に入っている曲、それは全て1920年代の太正時代の音楽だつた。ありえない、近代国家になつて間もなく、レコードだつて出たばかりの時代の音楽なんて存在するはずがない。

鈴 「1920年代い！？ あんた、ウソしてるんじゃないの。そんな大昔の音楽が綺麗に聴けるわけないでしょ」

一樹「出来るよつにしたんだよ。保管されていた音源を俺のパソコンに入つていい自作した変換プログラムを使えばどんなに古い曲でもデジタル音質に変えることができるんだ」

曲は全て1920年代に出た曲。もし現存するのであり当然そのま

まで聞いたら雑音がまじり、途切れ・途切れで聞こえるような代物だ。しかし一樹はそれら曲をパソコンで超高音質変換し現代の音楽技術で作られたかのよつに綺麗に聞こえるよつにしたのである。

セシ「ねえ、大神さん。よろしかつたら」ひらに入っている音楽を聞かせて欲しいのですが

セシリ亞は興味津々で曲を聴きたいとウズウズしていた。

一樹「ああ、いいよ。じゃあイヤホンを外すね。帝国・巴里の曲ずつ流すからみんなも聞いてくれ」

iPodのイヤホンを外し、屋上の一樹達付近に高らかな歌声が響く

「～恋もケンカも人生も　スチャラカチャンチャン　チャンバラブギだぜ～」

第「なかなか愉快な曲だな。それにしても男のよつな声だな、これは」

「～めんなさい　わたくしは　ああ　そりよ女神なのですもの～」

セシ「これはわたくしにピッタリですわね。わたくしとこう女神への示しを表しますわ」

鈴「トゲトゲのサボテン女が何言つてんのよ

セシ「な、なんですか？」

「～走れ 高速の 帝国華撃団 唸れ 衝撃の 帝国華撃団～」

一夏「この歌、カツコイイな。耳に残つちまつよつような歌だ」

一樹「これは帝国華撃団の主題歌だ。他にも様々なバージョンがある。帝都組はここまで次は巴里組だ」

「～あいしい 料理の決めではスパイス スキップしちゃう キツチンミゴージカル～」

鈴「料理の歌かとおもつたら愛情のスパイスみたいな感じの歌ね。明るい元気な歌だったわ。これ聞いたら一夏のために料理をしたくなってきたわ」

「～ああ素晴らし 巴里華撃団 夢と 希望と 明日と 正義を
讀える～」

一樹「これが巴里華撃団の主題歌だ。入っている曲で一番好きな歌だ。どうだい、結構いい歌だろ」

シャ「いい歌だね。聴いてるだけで本国を思い出すよ

曲が終わり。一回の耳にはかなり印象に残るような歌が響いていた。

篠「しかしながらお前が太正時代の音楽を聞いているんだ。何か関係があるのか?」

一樹「俺の曾じいちゃん、一つの歌劇団の支配人だったんだ。で、歌っている人が当時の歌劇団の団員だ。この音楽は曾じいちゃんの部屋で見つけたレコードを使って変換したんだ」

一樹はパソコンも使えるといった特技も持つており、自作した変換プログラムは古い音楽を高音質に変換できる以外にも、BD、DV-D、VHS、LD、8ミリ、CD、カセット、レコードなどの媒体をあらゆる機器に対応出来るように変換するプログラムである。

鈴 「へえ～～曾じいさんの。そういうえばカズキって自分の事あんまり話さないけど生まれは何処なの？」

シャ 「一樹つていつからISを動かせるよになつたの？」

急に一樹の昔話に切り替わり、それに一樹は気軽に応じた。

一樹「生まれは栃木の田舎だ。ISとの出会いは中学1年の時、知り合いのIS開発研究所へ行つたときそこでのISが俺に反応したことがきっかけだった。その後中学まで普通の学校に通いながら非公式のIS訓練をしていたんだ」

一夏「お前、俺よりも先にデビューしていたならなんで公に発表しなかつたんだ？」

一樹「ISは女性にしか動かせない」ということが絶対的。大騒ぎにならないよう発表を中止まで延期したんだ。やうしたら先にお前が世界初ISを動かせる男つてデビューしてしまつたんだんだよ」

一夏「なんだよそれ！俺はお前の下見役になつていたつてのか」

一夏は高校受験のとき会場を間違え、IS学園の入試を受けそこにISを勝手に起動させてしまつた事が始まりでそれがきっかけで公に広まつた。一樹もそれから約3ヶ月後に一人目のISを動かせる

男としてデビューした。現在、国際IAS委員会の議題は一夏と一樹をどの国の所属にするかである。

纂 「大神、お前、剣道は誰に教わったんだ。以前手合させしたときあの腕は相当強い者から教え込まれたと見たが」

一樹「ああ、あれは・・」

キーングーリンカーンゴーン

彼の剣術。その師匠を聞こうとした直後、チャイムが鳴つた。

一樹「ああ鳴っちゃったか。またの機会に話すよ。じゃあ教室戻るか」

立ち上がり教室に帰ろうとする一樹。屋上からの階段の踊り場でセシリアが一樹を呼び止めた

セシ「お待ちください、大神さん！ちょっとお話をあります。放課後またここへきていただけないでしょうか」

セシリアの顔はいつもと違った顔つきだった。あまりにも真剣な顔だったので一樹は放課後にあう約束をした。もちろんこの事は一夏たちは知らない。

第1-6話 曲を流す男（後書き）

タイトル由来は映画「嵐を呼ぶ男」より

第17話 振り返れば彼女と彼がいる（前書き）

iPodを聴いて何かに気づいたセシリ亞。そしてオリジナルキャラ一人目が登場します。

第17話 振り返れば彼女と彼がいる

時は放課後、外は夕方。一樹は屋上で夕日を眺めていた。そこへ帰り支度を済ませたセシリ亞が来た。彼女の顔は真剣な表情だった。

一樹「セシリ亞くん。なんだい、話つて？」

セシリ亞「あの iPod に気になる声がありましたの。大神さん、グリシーヌ・ブルーメールという人をご存知ですか？」

一樹「今年の春亡くなつた、フランスの大貴族・ブルーメール家の当主のことかい？」

セシリ亞「そうですわ。わたくしが子供のころ、その人と親交がありました。顔も声も今でも覚えており、あんな高貴な人は他にいませんでしたわ。・・・大神さん、お答えください。その iPod に入っている曲を歌っている一人はグリシーヌ様なのですね？」

『御旗のもとに』を流したとき2番目に差し掛かつた所はグリシーヌのパート。彼女はそこを聞き、この声がグリシーヌであると気づいたようだ。セシリ亞の問いかけに否定もせず一樹は語つた。

一樹「そうだ、確かに歌っている一人はグリシーヌおばあちゃんんだ。若い頃、モンマルトルにあつた劇場で『ブルーアイ』というステージネームで活動していた舞台役者だつたんだ」

昔、巴里のモンマルトルにテアトル・シャノワールという劇場があつた。レビューを観劇しながらとする食事というのは当時としては斬新で、一般客以外にも財界人が訪れるなどの超有名な店だつた。グ

リシー・ヌ以外にも一樹に手品を教えた「クリ」もこの劇場の踊り子だった。

セシ「グリシーヌおばあちゃん！？」あなた、グリシーヌ様に会つた事がありますの！？あの人と会えるのはごく少數の選ばれた貴族・政府の人間だけですわ！庶民のあなたが何故！？」

セシリ亞は血相かえたスゴイ形相を一樹の顔に近づけた。バイキンの時代から続くフランスで最も伝統のあるブルーメール家。政府にも影響をあたえほど權威のある貴族とどういう関係なのか。

一樹「お、落ち着くんだセシリ亞くん！・・・昼夜み、俺の曾じいちゃんが二つの歌劇団の支配人だったということは話したよね。その一つがグリシーヌおばあちゃんの所属していた劇団なんだ。俺が子供のころ曾じいちゃんと一緒にパーティに招待された時に初めてあつたんだ。それ以来、学校の長期休暇の時にフランスへ遊びに行つたとき、ばあちゃんの屋敷で世話になつたことがあるんだ」

それを聞くとセシリ亞は納得し、平常心を取り戻した。

セシ「そうでしたの・・・あなたの曾おじいさん、一体何者なんですか？」

一樹「劇場の支配人であり、旧日本海軍の軍人であった。退役後は日本の防衛庁に入つて、晩年はI.Sについて何か調べていたみたい」

大神一郎は死ぬまでI.Sを個人的に研究し、そして靈力の枯渇により亡くなつた。一樹の記憶は探求者として、剣の師匠としての記憶がある。

一樹「セシリアくんはグリシースおばあちゃんと仲が良かつたんだね」

セシ「わたくしも色々教えて貰いました。若い頃に日本のサムライに出会つて真の誇りというのを教えてくれたとおっしゃつていましたわ。そのサムライがもしかしたらあなたの曾おじにさんなのかもしませんわ」

一樹「きっとそうだね。・・・ 篦くん、グリシースばあちゃんと一緒に似ている所があるんだ。不用意な言動を取ると、即座に愛用の竹刀を振りかざして「成敗！」って言つところなんて激似だし」

セシ「グリシース様もそのようなことありましたね。鉄面皮に見える篠ノえさん、隠れてもふもふしたりすることもありますわ。いわゆるクーデレといつやつですわね」

一樹「だらうね、篠くんクールって言われてるけど恋話になるとしつきりデレデレするしね」

二人がゲラゲラ笑っていたら、後ろから恐ろしく低い声で一人を呼びかける声がした。

笄 「だれがクーデレだ」

振り向くとそこには腕を組んで鋭い目付きで一人を睨んでいた笄の姿があった。

セシ「ほ、篠ノえさん…い、いえこれはあの・・その・・・」

「オルコット！お前という奴はことん抜けがけが好きなようだな！そして、大神！・・・贊同したお前は今、ここで成敗いたす！」

あまりにも理不尽だ。筈はどこからか竹刀を取り出し、ブンブンと一樹に切りかかった。一樹は交わしながらも屋上から逃げた。

夜、一樹の部屋。筈の竹刀から命からがら逃げた一樹はベッドでぐつたりしていた。

テテテーン　テテテーン　テテテーン　テテテテーテーン

部屋に響く携帯の着信音の「太陽にほえる」。一樹の携帯だ。一樹はぐつたりした身体を起こして電話をとった。

一樹「はい、もしもし。大神ですけど。」

？？「いよーう、大神い。元気でやつているかーい」

電話の向こうはなにか陽気な声がする。

一樹「お前、加山か、加山雄四か！？」どうしたんだ急に電話なんて」

電話の声は加山雄四^{かやまおうじ}。一樹の小学校のころからの幼馴染である。彼は和歌山生まれ栃木育ちで、現在は地元の普通高校に通っている。

加山「いやあ、お前が女子まみれの生活にムラムラしてきて、何かやらかすのを防ぐために電話をしてきたーというわけなんだ」

一樹「なつ、そんなことあるわけないだろ。用がないなら切るぞ」

実際シャルルのシャワーを見たことで、身体が勝手に動くこともままあつた。

加山「冷たいぞ、大神い。冗談だつて、小学校から『カズとユージ』って言われた仲だろう」

一樹「そうだが・・・で、どうしたんだ。急に電話なんて？」

加山「お前が栃木を旅立つてから全然連絡してこないから。学園で上手くいってないのかと思つてな」

一樹が親友と呼べる加山は細かい気配りができ、人に分け隔てなく接していることから一樹と小・中学時代かなり人望が厚かつた。

一樹「心配するな。友達も何人かできたし、例のISを動かせる男とも仲良くなつたし」

加山「ああ、織斑一夏か。彼はどんな人だ？女性にしか動かせないISをどう動かす？」

一樹「機体性能を生かしていいし、まだまだ素人同然だ。いざといつ時もぶつつけ本番だな」

一夏は白式の性能を生かしきれておらず、零落白夜も使うもエネルギー切れを何回も起こしてしまう。IS乱入事件も彼は崖っぷちで機転を生かして場をしのいだに過ぎなかつた。ここで加山は女性99%の学校に編入した一樹に嫉妬をした。

加山「お前だけ羨ましいぞ、大神い！一人天国でウハウハしゃがつて」

一樹「それでもないぞ、今でも『IISを動かせる男』つてことで興味津々の眼差しで見られているんだ。結構シンドいよ」

一樹・一夏の株価はまだまだ高騰している。なにせ学年別トーナメントで優勝すれば二人のどちらかと付き合えるといつのだ。学園以外でも世界中のメディアは大体的に取り上げ、國家・企業・研究者はこの二人を如何^{いか}にして自分の組織に引き込むか策を練っている。

加山「しかし驚いたな。高校受かったのに『IIS学園に行く』って言いだして、受かつた高校蹴つてIIS学園に編入するなんてな。どういうことなんだ？」

一樹「前にも話しただろ。やることができたんだ。そのためにIIS学園へ来たんだ」

一樹がIIS学園に来た正確な目的は不明だが、曾祖父・一郎の遺書をもらつてから学園に来た。

加山「まあ、ヒマができるついで帰つてこい。いつでも付き合うぞ」

一樹「ああ、ありがとう。もうすぐ学年別トーナメントが開催される。また時間空いたら電話するよ」

加山「おひ。・・・・大神、学園に見学みたいなのはないか？」

一樹「いや、男性にはないと思つが。・・お前、忍び」もつなんて
考えるなよ」

加山「はつはつは、そんな事はしないぞ。・・・タブン」

一樹「おこひ、今、タブンつて・・・」

加山「今、窓にいるんだ」

！――！――！一樹は慌ててカーテンを開いてして窓を見た。そこには月が学園を照らしていた幻想的な景色が広がつていた。

一樹「お前、脅かすなよ――。本当にいるかと思つたぞ」

加山「はつはつはつは。じゃあな大神い、アティオ――――――
ス」

加山はそつ言い残すと電話を切つた。加山家は代々忍びの家系であった。加山雄四の曾祖父「加山雄一」は一樹の曾祖父「大神一郎」と旧日本軍の士官学校のころからの親友であり、同時に帝国華撃団・隠密部隊月組隊長という経歴の持主である。雄四もその家系をしつかり受け継ぎ、小・中学時代はもう色々と・・・。一樹はいつか天井からぶら下がつていての事を考えながら月夜を眺めた。

第17話 振り返れば彼女と彼がいる（後書き）

タイトル由来はTVドラマ「振り返れば奴がいる」み

第1-8話 大神一樹の憂鬱（前書き）

前回の話から翌朝の出来事。黛薰子またまた登場です。

第1-8話 大神一樹の憂鬱

一樹「誰もいない学校って何か不思議な感じだな。王様になつた気分だ」

朝、一樹は剣術の朝練が終え教室への廊下を歩いていた。すると後ろから声がした。

？？ 「おはよう、大神くん」

一樹「あつ、黛さん、おはようござります」

あこやつの声は新聞部・副部長の黛薰子だった。

一樹「黛さん、こんなに朝早く何やつているんですか？」

黛 「もうすぐ学年別トーナメントでしょ。その取材の準備をしご朝早く来たのよ」

一樹「新聞部も大変ですね。朝からお疲れ様です」

業務熱心な人だ。この間のHS乱入事件のようなデキの良い記事が発行されることを期待しよう。

黛 「ねえ大神くん、新聞部の部室に来てみない？色々面白いものもあるし」

黛からの誘い。ホームルームまでだいぶ時間があるので一樹はこの誘いに乗り、彼女に新聞部部室へ連れていくつてもうつた。

黛に連れられ新聞部・部室に来た一樹。新聞部の部室は校舎の一番上の階にあり、窓の外を見ると一番眺めがいい場所にある。さらにはテラスもありとても優雅な部室だ。部室内は綺麗に整頓され、棚には資料と過去に発行した新聞のサンプルが丁寧に保管されている。

一樹「綺麗な所ですね。」
「こつも作業しているんですか？」

黛「まあね~、ウチの部長しつかり者だから整理整頓第一にしているの。あと生真面目だから私が捏造しますって言つと怒るのよね」

一樹「それはどிも当たり前じやないですか。捏造は犯罪ですよ」

そりゃそりである。新聞は常に真実を報道するもの。捏造記事なんてもつての他である。

黛「それは置いといて、ホームルーム始まるまで時間があるしこじでコーヒーでも飲んでく？」

一樹「じゃあいただきます。黛さん、この棚の中見てもいいですか？」

黛「いいわよ。読んだら元の場所に戻しておいてね

黛がコーヒーを入れに出ていき、一樹は一人部室に残つて過去の記事を見始めた。まず見るのはやはり第1号。ファイルを見つけて取

り出した。日付は2007年4月。今から9年前、IS学園が創立されたばかりの時代だ。

一樹「なになに、『新時代で活躍する人材を育成する学校』新しく創立したIS学園はISパイロットの育成、ISの研究を目的とする国家機関である。かん、写真もある。コレが第1世代型か、ガンダムっぽいな」

読んだ過去記事を元の場所にしまい、次にみたのはまとめられた資料の中から白騎士事件についての記事を見つけて読み始めた

一樹「『白騎士事件』IS発表から1ヶ月後の2006年3月某日に起きた事件。日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一斉にハッキングされ、約2500発以上のミサイルが発射されるも、その約半数をIS「白騎士」が迎撃した上、それを見て「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件。この事件以降、ISの関心が高まることとなる。俺も知っているぞ、白騎士事件。結構ワイルドショーンで騒がれたな。第1世代型は完全な兵器型だからな」

黛「第1世代型は現在、全て退役しているからね。今最も配備されているのは第2世代型と研究段階の第3世代が今的一般的な段階ね」

一樹が第一世代型の感想を述べているときコーヒーを煎れた黛が来た。彼女は一樹に「コーヒーを添え、自身も腰をかけてた。

一樹「ゴクッ あー、朝のコーヒーはおいしいです」

黒 「大神くん、あなたこの間の放課後のIS訓練の時、ドイツの代表候補生の乱闘を抑えたんだって」

「コーヒーを飲んで和む一樹に黒はこの間のを聞いた。あの時、アリーナのスタンドには黒が一樹とシャルルの訓練を見学していたので、ラウラが一夏に向けてレールカノンを発射したのもしつかり見ていたのである。

一樹「はい、彼女が一夏に激しい憎悪を抱いているみたいで。戦意の無い彼にいきなり発砲したんです」

黒 「あの子、気を付けたほうがいいわよ。ドイツ本国では特殊部隊の出でかなり好戦的だから。動けなくなつてもとことん叩き潰す性格だから」

黒はラウラの情報を一樹に教えた。しかし何故彼女がラウラの経歴を知っているのか、おそるおそる聞いてみたら返事はこうだ。

黒 「禁則事項です」

どこかの未来人のセリフだった。黒のようなメディア系の人は我々の知らない様々な情報入手手段がある。それを教える訳にはいかんのだろう。ここで一樹は話題を変え、黒のことを聞いた。

一樹「黒さんはISの成績は良い方ですか？」

黒 「私は成績は中の上で整備科に所属しているの。専用機は持っていないけど適正ランクAで、武器は銃をメインに使うのよ。この間見ていたけど大神くんは一刀流以外にもライフルを使うよね」

一樹「はい、二刀だけでは対応出来ない局面もあるので。でも基本は近接戦闘ですのであくまで二刀がメインウェポンです」

レールガン『エクレール』は装弾数は40発。弾倉のスペースが大きすぎるため現在の光武では予備弾を積めない。そのため一回の戦闘が終わるたびに再装填しなければならない。

黒 「大神くん。あなたの専用機、従来のISとはまるで違う代物で世界中が研究している事を無駄にさせてしまっている。急な登場で帰属を巡る火種になりかねない存在で世論は大騒ぎよ」

一樹「ええ知っています。今はまだわかりませんが、光武は今までのISとは何かが違うんです。これは俺の推測なのですが光武は何かに対抗するための兵器だと思うんです。それにISは女性にしか動かせないのは鉄則。開発されてから10年経った今、俺や一夏のように男性操縦者が出でたことは時代が変わる前兆なのかと考えています」

ISは現代の女尊男卑を象徴するモノユメント。それを崩す存在が現れたということは何か時代の変化を意味するのではないか。その一方、第5世代型は計画、発表、試験なども一切公表されず、今年の3月にメディアを通じて全世界に報道された。国際IS委員会は開発した神崎グループに「第5世代型の資料を提出せよ」と指示し、それに対し神崎グループは素直に応答。委員会は資料を解析していくが一向に進展しないと聞いている。

黒 「なんのかね、未だに明らかにされていないISをさうに複雑にさせるような出来事ね」

・・・・・・・・・・・・・・

長い沈黙が続いたあと黛の一言に衝撃が走った。

黛 「話は変わるけど…大神くんは今好きな人はいるの？」

黛は質問を変え一樹に動搖をあたえるような質問をした。イエスと答えれば熱愛、ノーと答えればフリーとなる。学年別トーナメントに優勝すると一夏か一樹のどちらかと付き合えるという噂は黛の耳にも入っていた。

一樹「どうしたんですか急に？」

黛 「いやー、大神くんも男の子だから学園で好きな人もできたのかな」と思つて」

「こ」でイエスと答えれば何か嫌な予感がする。一樹に好きな人がいるってバレたら争奪戦が激化する可能性がある。一樹はなんかややこしいことになると考え出した答えはこれだ。

一樹「禁則事項です」

黛と同じ答えを話した。すると彼女は引き、答えを求めるのを諦めた様子。「禁則事項です」これは何か質問を迫られたら使える万能な解答だと一樹は感じた。時計を見るとホームルームまで残り10分だった。一樹は「一ヒー」を飲み干しカバンを持って席を立つた。

一樹「じゃあ黛さん、もうそろそろホームルーム始まるの失礼します。」「一ヒーおいしかったです、」ちそうさまでした」

黛 「うん。あ、大神くん、またいつでもここに来ていいから。今

度は織斑くんも連れて来てね

新しい行きつけの場所が増えた。保管されていた新聞記事サンプルは見てて面白いし、黛さんのコーヒーはおいしかったし、また来たい。そう思いながら一樹は階段を降りて教室へ走つて行った。教室までの廊下に差し掛かった時、一樹は黛の「今好きな人はいるの？」について思い出した。前にも初めて会った時「学園に入つた理由は？」と聞かれたときと同じだった。どうも彼女の質問は一樹の核心に近づくような質問だ。

一樹「（好きな人か・・・・アンナくん、元気かな？葬儀の時ずっと泣いていたけど）」

アンナとは一体誰なのか、一樹は空を眺めて謎のアンナという人物を想い憂鬱な気持ちで廊下を歩いた。一樹はまだ知らなかつた。学年別トーナメントで優勝者には、一夏・一樹のどちらかと付き合えるという事を。何か厄介にならなければいいが。

第18話 大神一樹の憂鬱（後書き）

タイトル由来はTVアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」より

第19話 模擬戦線異状あり（前書き）

ついにメインキャラに学年別トーナメントの優勝者に『えられる権利が告げられる。

後半はラウラの非道さが目立つシーンです。

第19話 模擬戦線異状あり

一樹が新聞部部室から出てきたと同時に、1年1組の教室にはほとんど生徒が来ていた。セシリアと複数人の女子と隣のクラスの鈴も来ていて何か話をしていて、幕は一人席について外を眺めていた。

セシ「そ、それは本当ですの！？」

鈴「ウソついてんじゃないでしょうね」

女子A「本當だつてば。この噂、学園中でもちきりなのよ。今月の学年別トーナメントで優勝したら、織斑くんか大神くんと付き合えることになつているらしいの」

とうとう幕、セシリア、鈴の耳に入ってしまった。

セシ「それは、一夏さんと大神さんは承知していますの？」

女子B「それがね、織斑くんはよくわかつていみたい。大神くんはなんかわかつているっぽいのよ」

女子達はそう思つてゐるのだが、一樹本人は一夏同様全然わかつてない。そもそも盗み聞きしたのが歪んで広がつてしまつたため女子だけの取り決めらしい。

鈴「じゃあ優勝者は一夏かカズキのどちらかを選べて、準優勝者は残りのどちらかを選べること？」

女子A「必然的にそつなるね。一番の選択権は優勝者にあるみたい」

女子C「じゃあわたし、大神くんがいい！サムライのような所が力
ツ」「イイ」

女子D「私は織斑くんを選ぶ！付き合つたらなんか面白そう」

女子B「あ～～ん、あたしはどつちにしようか迷う～～」

優勝者と準優勝者は花ある賞をもらえる。ばかり秤ばかりではかつてもやや釣り合つ賞だが若干、一樹の方が人気だ。

一夏「おはよー！」

シャ「何の話をしているの？」

一夏とシャルルが教室に入つてセシリ亞達に近づくと屯たむねつていた女子は蜘蛛の子を散らすかのように悲鳴をあげて去つていった。

鈴「じゃあ、あたし自分のクラスに戻るから」

セシ「そ、そうですわね。わたくしも席につきませんと」

二人も場を去つて行き、残された一夏とシャルルはキョトンとしていた。チャイムが鳴ると同時に一樹が教室に息を切らして駆け込んできた。

一樹「ゼン・ゼン（新聞部から教室まで結構距離あるな）」

一夏「大神、お前始業ギリギリまでどこ行つていたんだ？」

一樹「おう、一夏。黛さんに連れられて新聞部の部室に行っていたんだ。ああ、黛さんがいつでも来ていいからお前も来てくれってさ」

一樹は汗を拭き、席についたとき山田・千冬先生が来てホームルームが始まった。

休み時間、簞は渡り廊下から空を眺めていた。浮いている者はやられたと空を眺めるクセがあると見た。

簞「（なぜだ、トーナメントで優勝したら一夏と付き合つのは私だけのはずだ。それがなぜ大神とセツトであるなことに）」

もともと簞が優勝したら一夏と個人的に付き合つことじつだったが、女子3人組が盗み聞きして歪んだ噂が広まったのだ。今更「私が始めてトーナメントで優勝したら付き合つてもらうと一夏に言つた」なんて言えるわけがない。

簞「（と、とにかくだ。私が優勝すれば問題ない。・・・しかし大神も捨てがたいほど男前だ。・・イヤイヤ待て待て待て、私は一夏一筋で、それを背けるなど武士道に反する。武士たるもの一度決めたことは貫き通すものだ）」

簞はあくまで一夏一筋でいくこと。なんとか折合いをつけだいやう決心したみたいだ。

放課後、アリーナに鈴の姿があった。と、そこへセシリ亞もやって

来た。

セシ「あら、てっきりわたくしが一番乗りだと思つていましたのに」

鈴「あたしはこれから学年別トーナメント優勝に向けて特訓するんだから」

セシ「わたくしも全く同じですわ」

嫌悪なムードが漂う。ただでさえこの二人は一夏が本命だが、一樹にも興味を示しどちらかを取るのはまだわからない。

鈴「この際、どっちが上かこの場ではつきりさせとおくのも悪くないわね！」

セシ「よろしくってよ。この場で決着をつけて差し上げますわ」

鈴「もちろん、あたしの方が上だから、あんたのようなトゲトゲのサボテン女に負けるわけないわ」

セシ「フン、弱い犬ほどよく吠えるところのは本当ですね」

鈴「その言葉、そのままあんたに返すわ！」

ヤバイ、ヤバイ。とうとうケンカになってしまった。二人は瞬時に専用機を開拓させ、一気に互いが接近しあった。

ドオオオオ———ン

突如、二人の前を一発の砲撃がかすめた。一人は飛んできた方向を

見るとそこには専用機を展開したドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒの姿があった。

鈴 「ドイツ第3世代型・シュヴァルツェア・レーゲン。どうこうつもり！？いきなりぶつぱなすなんてイイ度胸してるじゃない！」

ラウラは専用機を通して甲龍とブルー・ティアーズを分析し始めた。

ラウ 「中国の甲龍に、イギリスのブルー・ティアーズか。データで見た時のほうがまだ強そうであつたな。数くらいしか能がない国と、古いだけが取り柄の国はよほどの人材不足とみえる」

鈴 「この人、スクラップがお望みのようよー」

セシ 「そのようですね」

二人は機体の最終安全装置を解除し、臨戦態勢に入った。

ラウ 「ふん、二人ががりで来たらどうだ？ぐだらん種馬を取り合つようなメスに私が負けるものか」

ラウラは相当な自信だ。一人は彼女めがけて突っ込んでいった。

シャ 「一夏、一樹。今日も特訓するよね？」

一夏 「おひ、トーナメントまで口がないからな」

一樹 「口がない分、当田までは実戦重視の特訓をしよう。白式に実

戦データを記録させて強化するんだ」

男一人と女一人はアリーナの入口いた。すると周りが何か騒いでいた。話を聞くと代表候補生3人が模擬戦をやっているらしいという情報を得た。3人は急いでアリーナへ向かつた。観客席に行くとそこから見るのは荒んだ光景だった。

シャ「ファンさんとオルコットさんだ！」

一樹「あの二人がやれている！？相手は一体誰だ！？・・・・つ！ラウラ・ボーデヴィッヒ」

彼女を見た一夏の顔が険しくなった。

鈴「こんのお！ ドオオン、ドオオン！」

フィールドで鈴がラウラに向かつて龍砲を放つた。するとラウラは右手を前に開き半透明の虹色のバリアのようなものを出した。そのバリアに龍砲はラウラに届かず防がれた。

シャ「A I Cだ」

一夏「ニー・アイ・シー？」

シャルル、篠、一樹は理解していたが一夏にはさっぱりだった。

一樹「アクティブ・イナー・シャル・キャンセラーの略だ。慣性停止結界とも呼ばれるもので、停止対象を任意に停止させることができるんだ。こいつは厄介だな」

よくわかる説明をしたのに一夏はふんの一言で済ませたが、今見ただけでわかつたと述べた。ラウラは機体からワイヤーブレードを飛んでいる鈴の機体の足に絡ませ、彼女をフレイルのように振り回し空中で停止していたセシリアにぶつけた。

キヤアアアアアア――――――――――ズドオオオオオン

二人は地面に叩きつけられ、動かなくなつた。ラウラは手を休めることなく一人に接近してレールカノンで甲龍の右の龍砲を破壊した。

セシ「くつ ドオオン」

セシリ亞はそのスキをついてラウラに向けてミサイルを発射。ミサイルはラウラに被弾し爆発した。煙が立ちこめ、一人は煙から距離をとつた。

鈴 「この至近距離でミサイルだなんて。無茶するわねあんた」

セシ「苦情はあとで。でもこれなら確實にダメージが・・・」

セシ・鈴「――――」

煙が晴れ姿が見えてきた。そこには腕を組んで機体に傷一つついていないラウラの姿だった。

ラウ「終わりか?ならば」ちらの番だ ジャキイイン」

ラウラはワイヤーブレードを一人の首に締め、動けない一人を殴る蹴るなどの暴行を加えた。一人の機体に「生命維持警告域超過」の表示が出た。簡単にいえば命に関わるほど危険な状態にある状態。

シャ「ヒドイ、あれじゃあシールドエネルギーがもたないよ」

篇「もしダメージが蓄積してISが強制解除されたら一人の命に関わるぞ」

一樹は黛の警告を思い出した。「（特殊部隊の出でかなり好戦的だから、動けなくなつてもことん叩き潰す性格）」まさにその通りだつた。しかし時すでに遅くセシリアと鈴はラウラの憂心晴らしの生け贋となつてしまつた。

「アーティストの才能を發揮するには、必ずしもアーティストとしての才能をもつておかなければなりません。」

一夏は観客席に貼られたシールドを叩き、ラウラに暴力をやめるよう呼びかけた。しかし彼女はその呼び掛けに応じず無視した。そして暴行を加える彼女の顔から笑みがこぼれた。

一樹「あいつ、楽しんでやがる……一夏、一人を助けに行こう」

「...」の「...」

一樹はポケットに入れていた札を取り出し光武を展開し、一夏は腕を上げ白式を展開した。

一樹・一夏「いぐれおおおおおおつ---」
バリー---

一樹は二刀をコ一ティングし、一夏は零落白夜を発動させ二人は観客席のシールドを大胆に叩き割り、フィールドに入り込んだ。

第19話 模擬戦線異状あり（後書き）

タイトル由来は映画「西部戦線異状なし」より

第20話 アリーナの戦い（前書き）

「カウラの暴行を阻止しようと一樹・一夏を防ぐ」と立ち上がるおばあ。

第20話 アリーナの戦い

バリーン

一樹と一夏は観客席のバリアを豪快に叩き割り、フィールドに降り立つた。

一夏 その手を語也ええ――――――

一樹 待て 一夏！突っ込みはA.I.Cで…

セシリ亞と鈴を助るだけで頭が一杯だつた一夏は一人ラウラに突っ込んで行つた。ラウラは近づいている一夏に気づき、右手をかざしてAIC発動させた。

一夏「な、なんだ！？」くつ、か・体が・・うご・・かな・・い

言わんこっちゃない。まんまとAICOにハマリ一夏は動けなくなつた。セシリアと鈴は機体が解除され、地面に倒れた。

ラウ「感情的で直線的、絵に書いたような愚か者だな。やはり私の敵ではなかつた。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では有象無象の一つでしかない！」

ラウラはレールカノンを一夏に向け、ゼロ距離発射するつもりだ。
一夏の顔に焦りの表情が。

ゴオオオオオオ
ガアアアアアアン

一樹が疾風改で左側から突撃し、レールカノン諸共ラウラを蹴り飛ばした。数メートル飛ばされた彼女は体制を立て直し、一樹を睨んだ。

ラウ「おのれえ、サムライめ ガアン つ、なんだ！？」

観客席の割れたバリアからシャルルがラファール・リヴィアイヴ・カスタムIIを展開し、狙撃体制に入っていた。

ラウ「ちつ、次から次へとザコが」

セシリ亞と鈴は体をゆっくりと起こした。一樹は二刀を抜き、通信回線を通じて一夏とシャルルに指示を出した。

一樹「一夏つ！」一人を連れて早くアリーナの外へ行くんだ！俺はラウラの注意を引く！シャルルは俺の援護・一夏の護衛を頼む！」

一夏・シャ「わかった！」

一樹の的確な指示に同意する一夏とシャルル。ラウラは逃がさんと言おうばかりに、セシリ亞と鈴を抱えて逃げる一夏に向けてレールカノンで追撃しようとする。

バーン！バーン！バーン！

シャルルの射撃にひるむラウラ。そのスキを見て切り込みを入れる一樹。ラウラは距離をおいた。

ラウ「貴様、今度私の邪魔をするなら本気で潰すと言っていたはずだ」

一樹「動けない人間をいたぶるなんて、心はないのか！」

ラウラの顔はまるでユダヤ人を殺すナチスのような顔だった。

ラウ「あの一人が勝手に勝負を挑んで勝手に負けたのだ。だから一度と歯向かわないように教えてやつただけだ」

一樹「許さん！今度は俺が君に一夏と彼女に歯向かわないようにするまでだ！」

一樹は銀狼・白狼に大量のエネルギーを込めて「一テイングし、ラウラはレールカノンを構え一人は戦闘体制に入った。

ラウ「ふん、面白い。第5世代型と戦つて勝利すれば、我がドイツ世界で最も優れたEIS国と名があがる。・・・勝負だつ！・・・！」

鈴「う・・一夏」

セシ「無様な姿をお見せいたしましたわね」

二人を観客席に移した一夏。どうやら一人は意識もあり無事のようだ。筈は専用機もなく、ただ見てている自分の無力を痛感していた。

一樹「でやああああ ブオオン！」

一樹は疾風改をフル回転させラウラと接近戦を繰り広げていた。彼女の真正面に入ってしまうとAICで動けなくなるので、四方八方から散らして攻め込む戦法で戦う。

「ラウ、「なめるなあ！　ドオン！」

レールカノンを撃つも高速移動する光武には止まつて見えるもので、ヒヨイヒヨイかわされる。ラウラは舌打ちをして地上に降り、今度はワイヤーブレードを出し一樹に向け伸ばした。

一樹「あれは捕まつたら終わりだ！　キン！キン！」

ワイヤーブレードに付いている振り子を弾き、捕縛を回避した。一樹は右手の銀狼にエネルギーを込め、刀身が桜色に変色した。

一樹「桜花天昇！！！」

刀から桜色の飛び斬撃が放出されラウラめがけて飛んで言った。ラウラは右手を出しAICを発動し桜花天昇を防いだ。煙に包まれ視界を遮られた彼女はセンサーを使って一樹を探知した。後ろに光武の反応があり振り向くと一刀を構えた一樹がすぐそこまで来ていた。

一樹「もうつたあ！　ピタツ！」

動きが止まつた。周りを見ると光武の周りは虹色のバリアに包まれていた。ラウラのAICに捕まつたのだ。

一樹「なぜだ！？今のはハイパー・センサーでも反応出来る速度じゃなかつた」

ラウ「ずいぶんあつさりな最後だな。さらばだ ガチャン」

ラウラは一樹の眼前にレールカノンを構え、発射体制に入った。一樹は焦るどころか澄まし顔で何やら語り出した。

一樹「武士たるもの、相手の性格を逆手にことりことで好機を手ににするものだ。そうですよね、千冬先生 チラッ」

ラウ「何！教官つ！ バツ！」

一樹がラウラの後ろに視点をやり、ラウラもそれにつれられ後ろを勢いよく後ろを振り向いた。しかしそこには千冬先生の姿はなく、むしろ誰もいなかつた。

ズバアアアア——ン

ラウラが後ろに氣を取られてせいでA I Cが解け一樹が動けるようになり、光武の一撃をくらつてしまつた。

ラウ「ぐはっ！貴様、そのような卑怯な手に教官の名前を…」

一樹「時にココ 指を頭にトントン は力よりも勝るものだ。君のよつな単純な者には尚更有効だ」

ラウ「おのれええええええええ！ ドオオオン」

ついにラウラがブチギレた。彼女はレールカノンを一樹の手前の地面に撃ち、砂煙を発生させた。一樹がひるんでいる間にラウラは一夏に接近しワイヤーブレードで彼とシャルルを捕縛した。どうやら一夏を先に潰す戦法にでたようだ。

一 夏 「ぐああー！お前・・・何を？」

シャ 「うぐう、しまった！」

ラウ 「（フウ、私としたことがあるのよつた挑発に乗つてしまつとは、しかし）コイツをやれば私の目的は達成され、サムライも守れなかつたと悲観するだらう） 織斑 一夏、教官の汚点であるお前は生かしておくわけにはいかない。行くぞおー！」

プラズマ手刀を出し一夏に切りかかる。一樹もそれに気づきエクレールを使おうとするが、ラウラの性格からしてシャルルを盾にして防ぐに違ひない。慌てて疾風改を起動させて向かうが間に合わない。ラウラは手刀を大きく振りかかりつた。

一樹 「だめだ、間に合わない！」

第20話 アリーナの戦い（後書き）

タイトル由来は映画「タイタンの戦い」より

第21話 SSS（鈴・セシ）本命救命室（前書き）

一 夏・シャルルに襲いかかるワウワ。またまた絶体絶命の一夏に、
一樹は間に合ひつか。

第21話 SSS(鈴・セシ)本命救命室

捕縛した一夏に切りかかるラウラ。一樹も止めに行くが間に合わない。

一樹「待てえ、やめるんだあー！」

ガキン！

黒いスーツにスレンダーな体つきの女性教師が一撃を止める。

ラウ「き、教官！？」

千冬「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

一夏「千冬姉！？」

今度は本当に千冬先生が現れた。しかもISを起動せずIS用近接ブレードでラウラの一撃を止めていた。

一樹「千冬先生・・・」

千冬「模擬戦をやるのは構わん。が、アリーナのバリアまで破壊する事態にならっては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

ラウ「教官がそいつしゃるのない。サムライ、織斑一夏！トーナメントで私はお前たちを確実に潰す！覚悟しておけ！」

ラウラは素直に応じ、機体展開を解除した。そして一樹達に向かって指をさし、宣戦布告して出口へ歩いて行つた。

千冬「お前たちもそれでいいな？」

一夏「あ、ああ

千冬「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

一夏「は、はーーー！」

一樹もシャルルも納得した。

一樹「異議はあつません

シャ「僕もそれで構いません」

千冬「では、学年別トーナメントまで私闘を一切を禁止する。解散！」

時刻は夕方、ところ変わつて保健室。アリーナの騒動から一時間が経過していた。ベットの上では鈴とセシリアが包帯を巻き横たわっていた。

鈴「別に助けてくれなくともよかつたのに

セシ「あのまま続けていれば勝つっていましたわ」

下手したら命に関わる状態だったのに一人はケロリとしていた。

一夏「お前らなあ・・・。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

鈴 「こんなのがのうちに入らな ビキッ いたたつ！」

セシ「そもそもこうやって横になつていふこと自体無意味 ズキッ
つうひつ！」

体の至るところに包帯を巻いているのだ。 安静にしていなきやパツクリ傷が開いてしまう。

一樹「大丈夫かい? じつとしてなきや 治る傷も治らないぞ」

一夏「本当にお前らはバカだな」

鈴 「バカってなによバカつてーバカ！」

セシ「一夏さんこそ大バカですわ！」

一夏の唐突な発言に二人は激怒した。 そこへシャルルが飲み物を買って戻ってきた。

シャ「二人とも好きな人達に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

一夏「ん？」

一樹「それつて・・・」

一夏は聞き取れなかつたみたいだが、それ以外は聞き取れたようだ。

「な、な、な、何を言つてゐるのか、全つ然つわからんないわね！
こ、こ、こ、これだから歐州人つて困るのよねえ！」

セシ「べ、べ、別にわたくしはつーそ、そういうつ邪推をされるとい
ささか気分を害しますわねつー！」

この動揺っぷり。明らか男一人に気がある」とをバラしてしまつて
いる。こんな反応したら誰でもわかるだが、一夏はわかつてないだ
らうが。

「？」
シャ「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね

「ふんつ！」

セシ「不本意ですがいただきましょうっ！」

ひつたくるよつて受け取つて、ジーベーと飲み干した。

「ま、まあ先生も落ち着いたら帰つてもいいって言つてるし、
しばらく休んだら・・・」

卷之三

一樹「な、なんだ？何の音だ？」

急に地響きがして保健室の薬品ビンがカタカタ音を立てた。廊下から聞こえてくる。

ドカー————ン！

と保健室の扉が開いた。開いたと同時にびっくり飛んだ。

女一同「織斑くん！大神くん！『ユノア君！』」

女子の大群が保健室に雪崩れ込んできた。俺たちを見つけるなり手を伸ばしてきた。

一夏「な、な、なんなんだ！？」

一樹「ど、ど、どうしたんだい？」

シャ「ど、どうしたの、みんな……ちよ、ちよっと落ち着いて」

女子の大群が出してきたのは出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

一夏「な、なになに……？」

一樹「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは・・・』」

女子D「ああ、そこまでいいからーとにかくっ！」

そしてまた手を伸ばしていく。

女子A「私と組もう、織斑くん！」

女子B「私と組みましょう、大神くん！」

女子C「私と組んで、デュノア君！」

一年の女子が男子と組もうと来たのか。しかし今の一樹と一夏にはやらねばならない事があった。

一樹「すまない、みんな。俺は一夏と組んで、シャルルは俺の友人と組むんだ。諦めてもらえないかい？」

シ――――――ン

女子B「まあ、そういうことなら・・・」

女子A「他の女子と組まれるよりかはいいか・・・」

女子D「男同士って絵になるし・・・」ほんほん

女子C「大神くんの友人って誰だるう？」

女子たちは少しづつ保健室を出て行つた。

鈴「カズキ！」

セシ「大神さん！」

ああ、鈴とセシリアが喰い付いて来たよ・・・

鈴 「カズキ！何勝手に一夏と組んでんのよー。一夏ーあ、あたしと組みなさいよ！幼馴染でしょうが！ バキッ あうつ！」

セシ 「いえ、大神さん！クラスメイトとしてここはわたくしと！ベキッ ひう！」

その体では無理だなんとか出場を諦めてもらおうと説得したとき、ぶつ飛んだドアから声がした。。

? ? 「ダメですよ」

山田先生が甲龍とブルー・ティアーズの損害報告の結果を持つてきたのである。

山田「お二人のHSの状態をさつき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えてます。当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。HSを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

一樹「すまない、二人とも。でも俺と一夏は決着をつけなきゃいけない事があるんだ」

シャ「ラウラ・ボーデヴィッヒだね」

一樹「彼女の目的は俺たち一人の殲滅だ。せんめつ他の子とパートナーと組めばその子が危険な目にあう。標的が一つにまとまれば周りに危害が及ぶ」とはないだろう」「

セシ「まさか！決着をけるために一夏さんと組んだんですのー？」

鈴「あんたバカあ？！なんでわざわざ的が固まつて行く必要があるのよ！」

一夏は一樹に怒りの矛先を向けた。一向に暴言のアラレを投げつけられる一樹に一夏も一人の説得を試みる。

一夏「セシリ亞、鈴。ここは大神の言つとおりして貰えないか。ラウラがああなのは俺が原因かもしないんだ。だからトーナメントで大神と白黒はつきりつけたいんだ」

鈴とセシリ亞は歯を食いしばり、ため息をついた。

鈴「わかつたわ。あんたたちがどうしてもと言つなら、もうなんにも言わないわ」

セシ「わたくしも殿方の真剣勝負を見守る義務があります。言つことはなにもありませんわ」

セシ・鈴「そのかわり、優勝しなかつたら絶対に承知しませんわー！（許さないからねーー）」

一樹「あ、ああ。粉骨碎身でがんばるよ」

一夏「お、おう。任せとけ」

納得してくれたが、最後の一言だけはただならぬ執念が込められていた。

山田「美しい友情ですね」

いや、違うと思つ。

帰り道、橋の近くの街灯のまえで三人組は一人の女子生徒といた。

一樹「この子が新聞部の一年で、黒さんに紹介してもらつた武田沙苗さんだ」

武田「初めてまして、武田沙苗です。あなたの事はよく知っています」

シャ「初めまして、トーナメントよろしくお願ひします」

オレンジ髪の少女、武田沙苗。以前取材中の黒と会い、その時彼女の助手をしていると紹介された。クラスも鈴と同じく組だそうだ。

一夏「小声なあ、大丈夫なのか。普通の女子とシャルルを組ませちまつて。女だつてバレたらそこで終わりだぞ」

一樹「小声 大丈夫だ。黒さんが言つに武田さんは天然で、普通の人なら気づく事が数ヶ月後になつて気づく人だと言つていた。シャルルが男である事を思い込ませれば1年は大丈夫だろう。それにISOもそこそこ出来るし」

そんな子と組ませて大丈夫なのか。しかしシャルルが女であることをごまかすのには、気づきにくい人と組ませるのがベストな作戦だ。

第21話 SS（鈴・セシ）本命救命室（後書き）

タイトル由来は海外TVドラマ「ER緊急救命室」より
感想待つてます。

第22話 武士の三分（前書き）

学年別トーナメント。アーノーが更衣室での出来事です。

第22話 武士の三分

6月第4週に入り、月曜から学年別トーナメントが開催された。初日一回戦、開始まで35分。一樹、一夏、シャルルはアリーナ更衣室でISスーツに着替え待機していた。更衣室のモニターから観客席の様子を見るとそこには一般学生以外にも、各國のお役人、研究者、IS企業重役、その他VIPの顔ぶれが貴賓席に揃っていた。

一樹「すげー観客だな。プロ野球オールスター戦みたいな感じだ」

シャ「三年にはスカウト、一年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

一夏「まあ、俺や大神は確実にチェックが入ってるだろうな・・・」

お偉いさんは一樹のISはわかつてるので、この大会は第5世代型のデモンストレーションを兼ねた見物に来ているに違いない。もちろん一夏も男性操縦者ということで注目されている。

一樹「遠路はるばる苦労様つてところだな。でも俺たちはやらなければいけない事がある」

一樹と一夏に課せられた事。それはドイツ代表候補生 ラウラ・ボーデヴィッヒと戦い、勝利し彼女の一夏への憎悪をなくす事。武人であるラウラは勝負に負ければこちらの要求を呑むだろ?。・・・

・タブン

シャ「一樹はボーデヴィッヒさんとの対決だけが気になるみたいだ

ね

一樹「ああ、でもこれは一夏自身の問題なんだ。俺は友達を侮辱されたことが許せないし、それに彼女も俺との戦いを望んでいる。相手からの果たし状を受け取つたら必ず白黒をつける。それが俺の武士道だ」

現代のサムライとはこういう精神を持つ者なのだろう。篇もサムライの心を持つ、サムライガールだ

一夏「お前、本物のサムライみたいだな。時代劇で見たことがあるけど負けた武士は死ぬっていう奴もいたつけな」

シャ「サムライって命懸けなんだね。一樹、もし負けたらハラキリつていうことするの？」

一樹「いや・・・切腹はしないよ。あれは昔の責任をとる自決方法なんだ」

切腹は今の言葉で言うと自殺。武士社会に浸透した罰で武士にとって潔い死に方だが、現代社会に合わないもので現代人には責任逃れという解釈がつけられている。ここでシャルルは話の筋を戻した。

シャ「でも二人とも、感情的にならないでね。ボーデヴィッシュさんは一樹と同じくらい強いし、一樹の第5世代型にも引けを取らないし・・・」

一樹「心配ない、作戦は考へてある」

一夏「作戦？ いつたいどんなんなんだ、大神？」

一樹の考えた作戦はなんなのか。それを言おうとした瞬間、モニターにトーナメント表が映し出された。

シャ「あ、対戦相手が決まつたみたい」

一樹・一夏・シャ「・・・えつー?」

出てきた表に一樹達は驚いた。第1試合で一樹と一夏の一回戦の相手はラウラと篠のペアだった。ペアが決まらなかつた場合は抽選で決まるつあつたが、よりによつてこの組み合わせとは。恐ろしい偶然だ。ちなみにシャルルと武田さんペアは一樹達の真隣だつた。

一樹「おいおい、しょっぱなからか! ? てつきり準決か決勝で戦うと思つたが、こんなに早い決戦とは」

一夏「初戦から決勝モードかよー。しかもラウラのペアが篠なんて、余計にやりづらいぜ~」

シャ「これはじょっがないよ。組み合わせも向こうが抽選して決めたんだし・・・」

一夏「だからって、これはいきなりすぎるだろ! しかも相手の組み合わせも最悪だしそー」

一樹「やるしかないだろ? ラウラと決着をつけることが早まつただけだ。ペアに篠くんがついただけで状況に変わりはない」

あまりにも早すぎる戦い。高校野球地方大会で弱小校が、甲子園常連校と一回戦から戦うよつたムードになつた。シャルルは言いかけ

た一樹の対ラウラ用作戦を聞いた。

シャ「一樹、一夏に一樹の考えた作戦を教えなきや。あと30分しかないよ」

一樹「ああ、そうだな。一夏！ブリーフィング（作戦説明）するからこっち来てくれ」

一樹は更衣室のホワイトボードに戦闘作戦、対ラウラ作戦を一夏にわかりやすく教えた。その戦闘作戦とは、かの戦国武将の考えた戦術を現代に蘇らせた作戦であった。対ラウラ作戦は、何か昔の映画のタイトルを引用した作戦名であり、確実性は五分五分だ。

・・・・・20分後

一通りの作戦を伝えた一樹。一夏の顔にはやる気と不安の一いつの表情があり、シャルルは日本人の考えに深く関心を持っていた。

一夏「…………だいたいはわかつたがラウラへの作戦、あれで通じるのか？」

一樹「確証はないが俺を信じろ。少なくとも、最初に話した戦闘作戦はラウラや今後の戦いでも有利になるだろ。あと俺の言つたこと忘れるなよ」

一夏「ああ、わかってるって。でもなんか、お前と一緒にだと何か負

ける気がしねえしな」

シャ「サムライって本当に変わっているね。戦闘作戦は確かに合理的で実用性が良いかもしない」

一樹「さあ時間だ。行くぞ」

一夏「おうつ」

一樹と一夏は準備万端とした雰囲気で更衣室を出てアリーナのカタパルトへ歩いて行った。

・・・・・ 7分後

試合開始まで3分。一樹と一夏はカタパルトで光武と白式を展開し、落ち着いた表情で待機していた。その横でシャルルが一人を見て心境を聞いた。

シャ「いよいよだね。どう二人とも、今の気持ちは?」

一夏「また大勢の前で戦つとなると緊張するもんだ」

一樹「一夏、この戦いは俺たちとラウラの果し合いに白黒つけるために戦うんだ。俺とお前が集中するのは観客じゃない、ラウラと第くんだ」

一樹が喝を入れ、一夏は吹っ切れた。どうやら覚悟を決めたそうだ。

一夏「そうだつたな、大神。この勝負は負けられない。俺たちは絶対に勝つ！」

一樹「ああ！この時代、俺たち強い男がまだいる事を証明してやろう！サムライの意地つ、みせてやるぞッ！」

大神・織斑ペア。試合時間が近づきました。フィールドに出て、所定の位置に移動し待機してください

アナウンスが流れ一樹と一夏はカタパルトで勢いよく飛び出した。そこには既にラウラと篝が位置についていた。

ラウ「ふんっ、逃げずに来とはな。少しは褒めてやろう。しかし試合開始直前まで何をしていた？戦うのが怖くて隠れていたのか？」

一樹「いやなに、気合をためていただけだ」

ラウ「ほう、私に勝つ氣でいるのが、面白い。だがもう今までのようない生ぬるい戦いではないぞ。私が本当の戦いというのを教えてやる」

一樹「そうかい。ならこつちは本当のサムライというのを教えてあげるよ カチヤ 爺ちゃん仕込みの戦闘、みせてやる」

一樹は両腰から銀狼・白狼を抜き構えた。

篝「大神、一夏、いつも早く戦うことになるとは。当たった以上全力で戦うまでだ。勝負だ ブンッ」

一夏「負けないぜ。筈、ラウラ、勝負だ ブォン」

一夏と筈も雪片式型と打鉄のブレードを展開して構えた。アナウンスが入り試合開始まで秒読みが開始された。

試合開始まで5・4・3・2・1・試合開始!! パア

一樹・一夏・ラウ・筈「いくぞっ!!」

第22話 武士の三分（後書き）

タイトル由来は映画「武士の一分」より
感想待つてます。

第23話 大神一樹FIRST 今、甦る作戦（前書き）

サクラ大戦の作戦コマンドが登場！

第23話 大神一樹FIRST 今、甦る作戦

篇 「覚悟お」

ガキン！ガキン！ガキン！ガキン！

一夏「でやあああああ

籌と一夏がチャンバラを繰り広げている反対側でラウラと一樹が対峙していた。

ラウ「どうした？かかつてこい」

一樹「ふん！ ゴオ——————」

疾風改を始動させラウラに切り込み突撃していく。ラウラはすぐさまAICを起動さるが一樹はレールガンを地面に撃ち、砂けむりを発生させた。ラウラは上へ急上昇したがそこには既に一樹が待ち構えていた。

一樹「せい！ ガキ！ とう！ ガキ！ でやああ！ ガン！ ガキン！ これでどうだつ！ バカアン！」

ラウ「ガアン！ くつ・・・なめるなあ」

ラウラはとっさにAICを出すが、すぐに反応した一樹はラウラから離れ、AICを回避した。次にラウラはワイヤーブレードを出し、一樹の左刀の白狼に巻きつけた。

ラウ「ふふつ、捕まえたぞ」

一樹「どうかな ブオオオオオオン」

ラウ「なに！ 引っ張られ… ガアン ぐはつ」

一樹は疾風改の出力を上げ、ワイヤーが巻き付いた左刀を思いつき引つ張り、引き寄せられたラウラに蹴りを入れふつ飛ばした。疾風改は機動力上昇だけでなく、瞬発力上昇という機能もあるのだ。一樹はここで一夏に何か告げた。

一樹「一夏！ そろそろ行こう、火作戦だ！」

一夏「了解つ！」

今を遡ること30分前、場所はアリー・ナ更衣室。ホワイトボードの前で一夏は一樹の考案した作戦のブリーフィング（説明）を聞いていた。

一樹「一夏。『風林火山』という言葉を知っているか？」

シャ「フウ・・リンカ・・ザン？ なにそれ？」

一夏「『風林火山』って確か、『はや疾きこと風の如く、しづ徐かなること林の如く、侵略すること火の如く、動かざること山の如く』だったな。千冬姉えから教わったことがある」

一樹「そうだ。移動するときは風のように速く、静止するのは林の

ように静かに、攻撃するのは火のよつて、防御は山のよつて。武将：武田信玄の旗に書かれた言葉だ

戦国時代、甲斐の虎こと『武田信玄』がこの言葉を陣旗にしていましたから、風林火山という言葉が広まつたのである。

一樹「戦闘作戦として風林火山を使うことにする。まず風作戦は相手への進軍スピードを重視した機動作戦だ。相手に接近してじわりじわり攻撃する以外にも、敵が攻撃してきたら一時的に逃げるんだ」

シャ「攻撃は徐々に与え、相手を翻弄させるんだね」

風作戦は機動力作戦のため、攻撃、防御も低く特に目立つような作戦ではない。

一樹「林作戦はいわば普通の状態だ。」

一夏「つまり、普段通りの戦闘スタイルでいいってことか？」

一樹「そうだ。次に火作戦は攻撃に専念する作戦だ。攻撃は最大の防御なりとも言う。つまり徹底的に攻撃して相手を素早く倒すんだ。防御なしだからリスクは覚悟の上の作戦だ」

シャ「一夏にピッタリの作戦だね。白式は攻撃特化型だし、一夏の性格にも合っているし」

一夏「ありがとよ、褒め言葉として受け取るぜ」

これまで一夏は猪突突進な行動をとってきたので、この作戦はお似

合いだろ？。

一樹「山作戦は文字通り山のよつにどつしり構える、防御戦法だ。相手の攻撃に耐える、迎撃体制の作戦だ」

以上が作戦『風林火山』である。曾祖父 大神一郎から教わった作戦であり、太正時代に帝国華撃団、巴里華撃団に使われていた作戦である。

一樹「まず最初は林作戦でいく。その後の指示は俺が出す。ぶつけ本番だがお前ならできる」「

一樹の一言で二人の陣形が変わり、筈に一樹はレールガンを連射し、一夏は斬りかかった。攻撃は筈へ集中放火した。

ドオン！ドオン！ガキ！ガキン！

筈 「くつ、これでは防戦一方だ」

凄い勢いで筈のシールドエネルギーはみるみる減っていく。一樹は射撃を止め、ラウラが接近してくるのに気がついた。すぐさま一夏に指示をだし、作戦を変更した。

一樹「一夏、ラウラが来る！風作戦に変更だ！」

二人は攻撃の手を止め筈、ラウラから急加速して距離をとつた。

ラウ「ジャマだ、どけ！」

ラウラはワイヤーブレードで簫を放り投げ、彼女は地面に叩きつけられた。

簫 「くつ、何をするー。」

一夏 「なんて、奴だ。味方なのに」

一樹 「一夏、簫くんはもうエネルギーが少ない。ラウラを警戒しながら林作戦でいくぞ」

一夏 「おひー。」

モニタールームにて、二人の戦術を観る千冬先生と山田先生。

山田 「先に篠ノ之さんを倒す作戦でしょうか」

千冬 「賢明な判断だ。ボーデヴィッヒは自分側が複数での戦いを想定していない。パートナーの事は最初から頭数に入れてない」

山田 「それに比べて、大神くんと織斑くんの連携は素晴らしいですね。大神くんの言っている風、林とは何の合図でしょうか」

千冬 「一郎さんの作戦を使うとは。しかし、その作戦を使いこなせるかがカギだ。状況に応じて使い分けなければ戦局を変えられるぞ」

筈 「はあああつ！ ガキン！」

筈が一夏に突っ込んで行くのを一樹に止められた。

一樹「すまない、筈くん。先に君を倒すんでね。悪く思わないでくれ ズバアアアアアン」

一樹の二刀が筈の機体に刻まれ、訓練機『打鉄』はシールドエネルギーがゼロになり沈黙した。

筈 「く、ここまでか」

一樹はすぐに一夏のもとに駆けつけた。

一夏「筈は？」

一樹「倒した。今度はこっちに専念だ」

一夏「よし。あの作戦か」

一夏「いや、まだだ。山作戦で行く」

一夏「山あー？ ここで必要なのか

一樹「ラウラは接近するとAIICを使う。だったら向こうからいつに近づかせた方があの作戦に有利だ。 ガチン！」

一夏「・・・わかった。行く ジャキン！」

一人は互いの距離をとり刀を構え、動きを止めた。ラウラは一人の陣形を見て疑惑を抱いた。

「ラウ「（どうこうつもりだ。さつきまで攻撃的だったが今度は動かなくなつた）」

一樹「ああ、ラウラ…どうちにでもかかつてこい！」

一夏「お前を負かせる準備は出来ているんだ！」

ラウラを挑発し始めた二人。これに対しラウラは冷静に分析をはじめた。

ラウ「（サムライは遠距離攻撃の武器があるが、織斑一夏はあるの刀剣武器のみとみた。）こはサムライに対象を絞るか）行くぞ、サムライ！」

ラウラはプラズマ手刀を出し、一樹に接近した。一樹はこの機会を待っていたかのような笑みを出した。

一樹「来たぞ、一夏！プロジェクトK、発動！」

一夏「よしきた！」

対ラウラ用作戦『プロジェクトK』とは一体何なのか。

第23話 大神一樹FIRST 今、甦る作戦（後書き）

タイトル由来はTVドラマ「古畑任三郎FINAL 今、甦る死」
より

第24話 プロジェクトK（前書き）

プロジェクトK。

サクラ大戦にはそんな作戦は登場しませんが、サクラ調な戦闘です。
最後まで楽しんでください。

第24話 プロジェクトK

プロジェクトK発動！一樹はラウラと接近戦を繰り広げていた。AIICに捕まらずに回避を繰り返しながら白熱した戦闘が続いた。ここで一樹の桜色の必殺技が出た・

一樹「桜花天昇！ ザンッ！」

一樹が桜色の衝撃波を飛ばし、ラウラに当たった。シールドエネルギーが大幅に削られ、煙が立ち込める。

ラウ「バア――――ン くそオ、何処だサムライ！」

煙の切れ間から一樹が表れ、それに気づいたラウラはとうさんにAIICを発動させた。一樹の光武は動かなくなり、ラウラはレールカノンを構えた。

ラウ「こつもあっけなくとはなつ ドガアン、ドガアン ぐはつ！」

いきなり爆発をくらつたラウラ。一発受け、よろめきながら後ろを見ると、『対IS用ダネルMG-L型グレネードランチャー』を構えた一夏の姿があった。

また時は遡ること、試合開始前の更衣室。

一夏「プロジェクトK?なんだその作戦は?」

ホワイトボードに作戦の陣形を説明した。

一樹「まづはラウラ自身から俺へ接近戦に来るよう持ち込み、そこでわざとAECを発動させる。そこで一夏がここのグレネードランチャーで攻撃するんだ」

光武の右手を部分展開させそこへ『対IS用ダネルMG-L型グレネードランチャー』を出した。装備が他の機体と比べて不足している光武のために、バツクパツクが取り付けられた。容量は小さいがレールガンの予備弾薬×2、サブウェポンを1、2個を収容出来る装備だ。

シヤ「そんなの、一夏に使えるの？」

一樹「大丈夫だ、ダットサイト（光像式照準器）以外にもレーザーサイトが付いている。これなら初心者の一夏でも扱えるだろ？」

一夏「確かにこれなら俺にも使えそうだな」

一樹「ラウラは一夏が飛び道具を持つていないと思っている。その心理を利用するんだ」

そして現在、アリーナ試合中。

一夏「なんて使いやすい武器だ。簡単に狙えるぜ！ ドガーン！、ドガーン！ドカーン！ドカーン！」

たて続けにラウラに装弾数6発、全弾撃ち込んだ。ラウラは激昂し

ターゲットを一夏に変え突進していった。

ラウ「ボンッ！ボンッ！ぐあつ、く、この死に損ないがああア
アアアアア！」

ラウラは一夏へAICを発動させて動きを止め、またレールカノンを構えた。しかし一夏は笑っていた。なぜなら

一夏「忘れたのか、俺達は一人いるんだぜ」

この一言にラウラは一樹の方向へ顔をやつた。一樹は一刀を構え、刀身には青い稻妻がまとっていた。疾風改をフル稼動させ神風特攻隊のように突撃してくる一樹。プロジェクトKのKとは神風特攻隊のKであった。

一樹「いくぞ！狼虎滅却うううう！」

ラウ「させらかあ」

ラウラはAICの対象を一夏から一樹に変更した。一夏は巻き添えをくらうこと为了避免るためにイグニッシュジョン・ブーストでその場を離れ安全な距離をとつたところで、一樹から借りたグレネードランチャーを大きく振りかぶった。

一夏「これで、どうだあ！ ブンッ！」

なんと、一夏はグレネードランチャーをラウラめがけて投げつけた。ラウラはそれに気づき、手で防いだが、その行為こそが一樹たちの狙いだった。

「ガーン！」
「いやくな……しまった！！」

必殺技を与えるチャンスができる」一樹「(AICは対象への集中力が必要だ。その集中力を乱せば、

一夏の投げつけたグレネードランチャーで、一樹へAICを発動させる集中力を乱したラウラ。早く集中しようとしたがもう既に一樹は眼前にいた。

一樹「天地！！一矢！！！」

「うわあああああああ！ バリバリバリバリ」

一刀の稲妻の斬撃がラウラに刻まれ、シールドエネルギーが凄い勢いで減つていき、残りの量が100前後にまで下がった。攻撃を終えた一樹は、一夏と合流した。

一樹「作戦成功だ、一夏」

一 夏「ああ。無茶な作戦だつたが、上手くいってよかつたぜ」

控え室でシャルルがモニターで、プロジェクトKをじっくり見ていた

シャ「ボーデヴィイツヒさんがターゲットを一樹にしなきゃ発動出来ない作戦。ほとんど賭けな作戦だよ、ホント」

ラウラは膝をついて動かなくなり、機体からも煙が出始めた。もう勝負はついたも同然であった。

「ラウ「ま、まだだ！まだ終わってない！」

一夏「まだやる気みたいだな」

一樹「作戦を『風林火山』に戻そう。林作戦で行くぞ」

一夏「よしきた！」

ラウラは立ち上がり、煙と電流を放出する機体を持ち上げた。一樹と一夏は刀を構え、作戦『風林火山』に切り替えた。と、そのとき

ズドオオ

ン！

ン！ズドオオ

大きな音と共にアリーナのフィールドに黒い影が二つ。煙が晴れ、刀を持つた日本の鎧のような機体が2体現れた。場内に警報が鳴り響き、スタンンドに防御壁が展開され避難アナウンスが流れた。

緊急事態発生！緊急事態発生！鎮圧部隊は直ちにフィールドに急行してください！

一夏「この間の謎の機体と似ている！また来やがったのか！」

一樹「お前たち、一体何者だ！名を名乗れ！」

謎機体「ギ・・・・脇侍^{ワキジ}・・・」

片言だがしゃべった。ここでラウラがレールカノンを構え脇侍に向かって躊躇なく発射した。

ラウ「何者か知らんが、私の戦いのジャマをするなああああ！
ドオオン」「

脇侍はラウラの砲撃を紙一重にかわし、一機がラウラに近づき手をかざして金色の超音波らしきものをラウラに浴びさせた。

ラウ「ウイーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ガ、ガガ、ガガガ」

金色の超音波を浴びたラウラは鉄仮面な顔つきでレールカノン乱射、ワイヤーブレード、プラズマ手刀でアリーナの破壊活動を始めた。被害はみるみるうちに広がつていき、スタンド防御壁も所々破られていた。

山田「ボーデヴィッシュさん、何やつているのですか！」

千冬「駄目だ、彼女は何も聞かない。おそらく、あの超音波でボーデヴィッシュは操られているのである！」

フィールドでは一樹と一夏が脇侍と呼ばれる敵と何やり会話をしていた。

一樹「貴様、彼女に何をした！」

脇侍1「タダノ・カイハツチュウノ・シンヘイキノ・テストダ

脇侍2「ダガ・シッパイダ。ヤハリ・デキソコナイデハ・シ
ツパイモ・トウゼンカ」

この一言で一人に怒りの2文字が浮かび上がった。操られたラウラ
が破壊活動を中断し、狙いを一樹＆一夏に定めた。

一夏「敵とはいえ、ラウラは千冬姉えにとつては大事な人だ。あい
つも守ってやる！大神、手を貸してくれ！」

一樹「わかつた！行くぞ、一夏！」

ここで脇侍達は一樹の名前を聞き、こそそし始めた。

脇侍1「オオガミ？・マサカ・」

脇侍2「オイ・ソンナ・ワケ・アルハズガ・ナイダロウ・
イクゾ」

脇侍2機側は腰から刀を構え、臨戦態勢に入った。一樹は互いのエ
ネルギー残量と作戦を確認した。

一樹「一夏、残りエネルギーはどのくらいだ？」

一夏「零落白夜が1回か2回出来るくらいだ。お前は？」

一樹「天地一矢で大きくエネルギーを消費した。桜花天昇はもう出
せないから快刀乱麻2回が限界だ」

一夏「あの脇侍って言う奴を倒せばラウラは元に戻るんじゃないのか」

一樹「あの超音波の音源が脇侍だつたらそれを破壊すれば彼女は洗脳から解けるかもしないな。・・・・よし、火作戦で行こう！」
目標、脇侍2機の殲滅！」

一夏「了解！」

二人は火作戦の体制になり2機の脇侍に向かって行つた。このとき、一樹自身の戦いが今始まつた瞬間だつた。

第24話 プロジェクトK（後書き）

タイトル由来は映画「プロジェクトA」より
感想待っています。

第25話 ダイ・ハード（前書き）

戦闘場面の書き方がわからなかつたので効果音を入れてみたら、感想で台本調というのを指摘されました。

それを改善し、戦闘描写を不器用なりにがんばつて文章にしてみました。

上手くかけているかわかりませんが最後までお楽しみください。

第25話 ダイ・ハード

脇侍2機＆ラウラ対一樹＆一夏。2対3というのに一樹達は引けをとらずに、必死に戦っていた。脇侍2機の武器は刀一つだが、動きに感情がない。前回、襲撃した無人機と同じようだがこつちのは片言だがしゃべる。一樹と一夏は各脇侍に一対一で接近戦を繰り返していた。しかし脇侍側が不利になると奴らはラウラを使い、二対一で挑んで来る。モニタールームで千冬先生達はその様子を見ながら分析していく。

「大神くんたちが戦っている機体、前に乱入したISと似ていますが簡易分析した結果、通常のISとは違う反応があります」

「純製ISではない、ということか」

「そういうことになりますね。この前の襲撃犯といい、一体なぜ学園にこのような事を？」

「山田先生、鎮圧部隊を急がせてください。何か悪い予感がする」

「わかりました。大神くんたちにはそれまでがんばってもらいうよう伝えておきます」

「（あのが一郎さんの言っていた敵か。あいつが関係してなければいいが）」

この事態を千冬先生が一番知つてそうだが、先生はただ黙つて一樹たちを見ていた。一方、控え室に待機していたシャルル。そこへセシリアと鈴が来た。スタンドの防御壁はラウラの破壊行為で所々に

穴が空いており、一部の生徒はアリーナの奥へ避難した。

「シャルル！ 今どうなつてんの！」

「二人は無事ですか！？」

「鳳さん、オルコットさん。今の所は一人とも無事だけど、機体のエネルギーも少ないので長期戦はできない」

モニターを見ると敵3機に立ち向かう一樹たちの姿が。機体は傷つき、一人の息もあがっているのも見えた。そこへ一樹に破れ、フィールドから退場した篠が息を切らして走って来た。

「ハア、ハア、ハア……一夏……一夏たちはどうなつてている！？」

「篠ノ之さん、無事でしたの」

「無事だけど、なんかヤバイ雰囲気ね。カズキたちも体力が残っていないみたいだし」

モニターの向こうでは激しい戦闘が行われておりその様はまさしくチャンバラ。生徒、教師、VIPは映し出される映像を凝視していた。4人は一樹たちの無事を祈るように見守っていた。

「一夏……」

「大神さん……」

「一樹……」

場所はフイールド。接近戦を一時止め、敵から大きく距離をとつた一樹と一夏。その顔は疲労困憊の色だった。

「はあ、はあ・・・強いな、コイツら」

「くそつーラウラの機体のエネルギーも残りわずかなはずだが、なかなか停止する気配が見えてこない!」

二人のシールドエネルギーも残りわずか。零落白夜は1回、快刀乱麻は2回を使つただけで機体は止まつてしまつほどの量だった。脇侍と剣を交えて一夏があることに気づいた。

「・・・大神、あいつら俺たちと近接戦闘するだけで一回も空を飛んでないよな?」

「そういえば・・・ISならPICO（ISの浮遊・加減速を行う基本システム）があるはず。なぜ使つてないんだ?」

ISはPICOで中に浮き、機体を推進させるのだが脇侍は地面にべつたり足をつき中に浮いているのは見られない。そもそもアリーナに出現してきた時、飛んできたのではなく落ちてきたのだ。一夏が大きく息を吐き、自分の案を提案した。

「よし、チャンスだ!大神、林作戦に変えてくれ。PICOがないのならこっちが断然有利だ。まず俺の最後の零落白夜で1機を倒す。その後からお前が必殺技でもう1機を頼む」

「そつだな、飛べてないのならこっちが優勢だ。それに持久戦ができるほどエネルギーも無い。・・・・・わかつた、林作戦に変更！一気にキメるぞ！」

一樹の指示のもとに一人は陣形を変えた。先方に一夏、後方から一樹という陣形で零落白夜を発動、快刀乱麻を準備して一直線に突撃。

「行くぞおおおおおおおおお！」

脇侍2機を倒せばラウラの洗脳も解け、被害は収まる。その目標を胸に白式と光武の残りわずかなエネルギーを使い向かっていく一人。大きく雪片を振りかぶった一夏。太刀筋も悪くない。そのうしろで一樹が電気を帯びた銀狼・白狼を握り締め、一夏に続いて構えていた。脇侍2機を同時に破壊できると一夏と一樹、千冬先生やシャルルたちも確信した。

だが・・・・・

2機の脇侍は一人の太刀筋を見切り、光武と白式の機体に1本の切り込み入れた。しかもひと振りを受けた上に一人はラウラの飛び蹴りを受け、シールドエネルギーは0になつた。倒せるはずだった。それがP.I.Cも無い脇侍のひと振りで逆に二人は倒された。ラウラの蹴りをくらつた二人はフィールドの壁にふつ飛ばされた。壁に叩きつけられたショックで展開が解け、一樹と一夏は地面に倒れ、その様子はモニターを通じて見ていたモノの目に入っていた。

「一夏ああああああああん！」

「大神さあああああああん！」

「一樹…………ツ！」

「大神くん！織斑くん！大丈夫ですか！？返事をしてください！大神くん！織斑くん！」

「くつ・・・・・鎮圧部隊っ！一人の救助を最優先だ。医務室への搬送をおこたわるな！」

一同に不安が走る。モニターを見ていた者は不安のあまりざわめきだした。

「ウソ・・・・大神くんが簡単に・・・

「織斑くん、動かないよ・・・

絶望に思つた女子生徒達。その時、二人は体を起こし、吐血を拭き取つた。二人の無事に一同は一安心した。だがフィールドの二人は今起きた事にえらく焦つていた。

「ば・・・・ばかな・・・俺たちの渾身の振りを・・・・簡単には・・・

「

「・・・・・ぐッ・・・まだだ！俺は・・・

一夏は立ち上がろうとするがその場で膝を付いた。全身を壁に打ち、敵の一撃をくらつたのだ。それに今の一樹たちにもうIISを起動させるエネルギーはない。と、そこへ10機編成の鎮圧部隊が駆けつけた。うち4機が一樹と一夏の所に救助も來た。

「大丈夫ですか！？すぐに医務室に連れていきますからね。早くタ

ン力を！」

残り6機は脇侍とラウラの周りを鎮圧部隊が囲み、武器を構えた。部隊長が現場に降り立ち、指揮をとりはじめた。

「現場に到着。これより敵機撃・・あああッ！」

部隊長は指揮をとろうとした瞬間ラウラがレールカノンで部隊長を攻撃した。それと同時に脇侍たちは動搖した隊員を次々と攻撃していった。慌てて反撃したため狙いが定まらず、2機、3機と次々と倒されて行つた。

「ムダ・・ダ・・オマエ・・タチ・・ガ・・ナンニン・・・・コ
ワウト・・・ワレラ・・・二ハ・・カテン」

脇侍2機はラウラを従え、鎮圧部隊を片っ端から攻撃していき、救助員を含む10人部隊員は倒されていった。学園の治安を守る部隊は3機の敵にあつという間に全滅し、一樹と一夏を救助する人員も次々と倒された。恋の争奪戦だった学年別トーナメントのアリーナは虐殺の場と化した。その様子は千冬先生と山田先生の目にも入っていた。

「そんな、部隊があつという間に壊滅なんて」

目を疑う山田先生。千冬先生は目を閉じて数秒の沈黙のあと、山田先生にある要請を出した。

「・・・・私が行く。山田先生、訓練機の打鉄を私に手配してください」

モンド・グロッソ世界大会の優勝者である千冬先生が自ら出撃しにドアへ歩いて行つた。その時、山田先生がモニターに映る一樹を捉えた。

「織斑先生！あれを見てください！」

それは一樹が打ち身の体を起こし、脇侍達のほうへ歩いていく姿だつた。千冬先生はアナウンスマイクを取り、一樹に一夏を連れて早く逃げろと言うが一樹は聞こじともせず、散乱していた鎮圧部隊の装備の太刀を手に取り構えた。

「俺はまだ戦う！最後まであきらめない！一夏を……仲間を……守る！」

一樹がそう発言した瞬間、敵の動きが止まり、急に視界がカメラフィルムのネガのような世界になった。慌てふためく一樹。すると、向こうから能面をつけた能楽師みたいな者が現れた。謎の能楽師は一樹の元へ歩いて行き、太刀を構える一樹に超低音で問いかけた。

「男よ……まだ……戦い……たい……か？……」

「（誰だ！？）」

この場において、あまりにも不信な相手だ。能楽師は一樹の質問に応じず、戦うかどうかの質問を一樹に問い合わせた。

「戦い……た……いの……か……？」

能楽師の質問に一樹は口を噛み締め、答えた。

「（俺は戦う！）

「何・・・の・・た・・・めに・・・？」

「（平和を乱す敵から人々を守るために戦う！一郎じいちゃんのようないにー。）」

「なら・・ば・・・・我の・・力・・を・・か・・そ・・・う・・」

「・」

能楽師は扇子を開き、光る球体を出した。その光る球体は一樹の顔の左上部分にくつついて変形し、やがて顔左上半分の能面の形を成した。すると待機状態にあつた札状の光武が展開され、ステータスを見てみるとエネルギーが全回復されている状態にあつた。あまりのことに一樹は驚くしかなかつた。

「（待つてくれ！あんたはいつたい！？）」

一樹の質問に謎の能楽師は一つも答えもせず、ネガのような世界の奥へ消えていった。能楽師が消えたあと視界は元に戻り、脇侍達がこちらを振り向いていた。その横で一夏が目を丸くしてあ然とした顔で一樹を見ていた。

第25話 ダイ・ハード（後書き）

タイトル由来はそのまま映画「ダイ・ハード」よりこれまで日本調に書いたことをお詫びさせてください。感想を待っています。

第26話 落武者の默示録（前書き）

脇侍との戦闘クライマックスです。上手く書けているか不安ですが、最後までお楽しみください。

第26話 落武者の默示録

「フン・・ショセン・・ハ・ワレワ・・・レ・・ノテキ・・・デ
ハ・・・ナカツタ・・・ナ」

「イク・・ゾ・・・シレイ・・・デ・ハ・シセ・・ツノ・・ハカイ・
・ダ」

一樹と一夏、鎮圧部隊を倒しアリーナの外へ出ようとする脇侍達。スタンンドへの防御壁を壊そと振りかぶつた瞬間、アリーナに振動が走った。振り向くとそこに顔左上半分の能面を被り、光武を展開した一樹が一刀を抜いていた。近くにいた一夏は目を疑つた。

「大神？お前なのか！？」

「・・・・ああ、大丈夫だ」

一樹は光武のステータスを開きエネルギーの量を確認し、一刀を素振りした。

「よし、動く！これなら勝てるぞ！」

なぜエネルギーゼロだった光武が展開できたのかは不明だが、一番の疑問は能面である。ベージュ色で金色の目玉の能面が一樹の顔左上半分を覆つており、反対の覆われてない右目の瞳は青く輝いていた。機体と刀はこれまでかつてないほど青白く光っていた。

「一樹、一体どうしちゃったんだろう。復活したら顔にお面みたいのが顔についているし・・」

「あの面・・・能面みたいだが・・・」

和風の簾はすぐに能面のかけらとわかつたが、外国人の3人には？お面”と呼んでいた。控え室モニターにも一樹の異変は終始映つて、モニタールームでも確認済みで山田先生が再起動した光武を分析し始めた。自分が出撃しようとした千冬先生も異変に目が釘付けだつた。

「なんだ・・・あれは？」

「織斑先生！大神くんの機体のエネルギーが全回復しています！」

シールドエネルギーがなくなつたISはそのエネルギーを補給しなければ戦闘ができない。光武が補給している所なんてなかつたのでモニターを見ていたものはいつの間に補給したんだという疑問が残つた。脇侍達が一樹に気づき再び臨戦態勢に入つた。

「ナンド・・・ヤツ・・ガ・・・フツカ・・・ツ・ダ・・ト」

「オレニ・・・ヤラ・・・セ・ロ・・スグ・・・オワ・・・ラ・・・セル」

脇侍1が刀を手に再び一樹との戦いが始まつた。一樹は疾風改を起動させ、脇侍1に突撃して行つた。剣2、3回交わり、再び激しいチャンバラが始まつた。一樹の動きは、ダウンする前よりも動きが良くなつてあり、剣技の一撃一撃が重く、ひと振りで伏せられた脇侍に一人で相手していた。しかも一樹が攻勢はグイグイ押していた。

「ナンダ・・・コノ・・・ウゴキ・・・ハ」

脇侍1が思いつきり振つたが一樹はその振りを素手で掴み、バキッ！と脇侍の刀をへし折つた。その折れた刀身を脇侍1のこめかみに突き刺し、二刀でよろめく脇侍1の両腕を切り落とし最後に胸を両断した。地面に両腕が欠けた脇侍1のまっぷたつになつた残骸が転び。

「すごい、部隊でもかなわなかつた敵をあんな簡単に！」

「パワーが今までと比べ物にならないくらいアップしますわ。一体、光武の何処にそんな力があるというのでしょうか？」

残るは脇侍は1機。一樹はエネルギーを銀狼・白狼に注ぎ込んだ。しかし何かが違う。刀身にいつもの倍以上の超高電圧の電気がまとわり、疾風改の起動音も激しい。そして一樹の後ろに狼の幻影が出了。それに脇侍は急に怯えはじめた。

「マサ……カ！ オマ……エハ！」

脇侍が一步一歩さがりはじめ、一樹は逃がさんとばかりに超高電圧を帯びた刀と疾風改で脇侍に特攻を開始した。

「狼虎滅却ウウウ……刀光剣影！」

脇侍2の機体に4本の電気を帶びた切り傷が刻まれ脇侍2はその場に膝をつき仰向けに倒れた。脇侍2が倒れた後に一樹の光武のエネルギーが何もしていなければに急に減つてゼロになり展開が解け、待機状態に戻り復活する前の状態に戻ってしまった。同時に一樹の体に打撲の痛みが走つた。一樹は面を外し、痛む体を引きずりながら、倒れた脇侍の方へ歩いていった。脇侍は機体から放電し動く気配は

なかつた。すると、頭部が動きだし何かを喋りだした。

「ナゼ・・ダ・・・オオガ・・・ミ・・・イチ・・ロウ・ハ・・・
モウ・・イナ・・・イハ・・・ズダ」

脇侍の口から衝撃の言葉が。「オオガミイチロウ」、一樹の曾祖父の名前で2016年春に死んだ、元帝国・巴里華撃団の隊長をなぜ脇侍が知っているのか。一樹は脇侍の言葉に耳を傾けた。

「おい！俺の曾祖父・大神一郎の何を知っている！」

「ハハハハ・・・オマエ・・ハ・オオ・・ガ・・・ミ・・イチ・・・
ロウ・・ノ・・・ヒマ・・・ゴカ」

脇侍は笑いながら死に際・・・いや破壊間際に一言を放つた。

「オモシ・・・ロイ・コトヲ・・・ツ・・・オシエ・テ・・ヤル。
コノ・・ジダ・・・イ・ハ・ヤツ・・ガツク・・・ツタ・・モ・・
・・オ・・ナ・・・ジ・・・ダ・・・」

「どういうことだ！この時代とは女尊男卑でエラの時代のことか！」

一樹が解い続けるが、脇侍は完全に動かなくなつた。

「（一郎じいちゃんが女尊男卑、ISの時代をつくつただと。どう
いうことだ）・・・そうだ、ラウラは！」

脇侍2機を倒せばラウラの洗脳も解けるハズ。後ろを見るとプラズマ手刀を構えたラウラが立っていた。するとレーゲンの機体から金

色の煙が出て待機状態に戻った。一樹はそのまま地面へ倒れこんできたラウラを抱きかかえた。

「ラウラ、大丈夫か！？ラウラ！」

一樹の応答に答えたのか、ラウラはゆっくりと目を開けた。

「お・・前は・・」

「よかつた無事で何よりだ」

そのまま気絶してしまったラウラ。スタンドの防御壁がさがりアリーナの警戒体制が解除された。一樹はラウラを抱え、一夏の方へ歩いていき無事に帰還したことを告げた。

「一夏、大丈夫か？」

「あ、ああ。俺は大丈夫だ」

この事件、一体誰が企てたのか。脇侍が破壊間際に言つた曾祖父の名前と、曾祖父がつくつたとされるEISの時代。この戦闘で考えることは山ほど積もつた。

「・・・・お前一体何をした？」

急に復活したことを一樹に聞いた一夏。一樹はネガの世界に現れた能楽師の事と脇侍の破壊間際の言葉を話そつとした。

「いや、能楽師が・・・・・・・・・・・・」

これから話そうとしたとき、一樹はそのまま倒れ込んで氣絶してしまった。現場に援軍が駆けつけ一樹、ラウラ、一夏は医務室へ運ばれた。

脇侍を破壊してから30分後、アリーナから続々と人が出始めた。山田先生がモニタールームからオペレータを勤め避難誘導を開始。

「学生の皆さんには退去後速やかに寮にお戻りください。なお明日は今回の事件の調査を行うので休校にします。アリーナには近づかないでください」

フィールドでは千冬先生は現場検証をはじめた。現場に散乱した脇侍の残骸に近づき先端から端まで見渡した。

「これは・・・一郎さんに見せてもらつたものとは違う。」

千冬先生は脇侍の残骸を見て考察していた。そのとき足元になんかのカケラが落ちているのを発見した。手袋をはめ、面を手に取りビニールの袋に入れた。それは能面のカケラだった。面のカケラをじつと見つめ怪しいものがないか360°見渡した。

「これは・・・大神の顔に付いていた面か」

「織斑先生、収容トレーラーが到着しました。これから積み込み作業を開始します」

「あ、ああ、頼む。くれぐれも慎重にな。私は少し場を離れる。なにがあつたら連絡をくれ」

千冬先生は慌てて面のカケラをポケットにしまい、作業員に業務を任せアリーナを出て行つた。千冬先生はアリーナの人気もないところで何やら電話を取り出し何処かへかけ始めた。

「おかげに鳴つた電話は電波の届かない所にあるか、電源が入つていない・・」

急ぎな時、この返答はなんか腹立つ。それは千冬先生も同じで彼女は舌打ちをした。電話を切り今度は別の所へ歩き出した。

「くそつ、こんな肝心な時にアイツは・・仕方がない、かけ直すのを待つしかないか」

第26話 落武者の默示録（後書き）

タイトル由来は映画「地獄の默示録」より

第27話 レー102歳 別れの手紙（前書き）

アリーナの騒ぎから数時間後、保健室での出来事です。
またまたサクラキャラ登場です。

第27話 レー102歳 別れの手紙

「おば上〜〜〜〜〜〜

一人の少女が夕日の原っぱ広がる平野にポツンと建つ一軒家へ走つて行つた。そのウッドデッキでレコードを流して、椅子に座る人の老婆がいた。老婆は新聞を広げ記事に目を通していて少女が帰つて来た事に気がついた。

「おかえり。どうしたの？ そんなに慌てて」

「訓練校の模擬戦で教官5人を退け、優秀軍人賞を授与しました。これが勲章です」

彼女はドイツ軍訓練校の制服の左胸から輝く勲章を見せた。

「それはよかつたね。ボクも鼻が高いよ」

老婆は彼女の頭をなで褒めた。少女は顔を赤らめ恥ずがしがつた。老婆は少女を褒めた後新聞をたたみ、夕食の準備を始めた。

夜。食事の後、彼女の今後の事について聞き始めた。少女は訓練校を卒業後、スカウトされていたドイツ軍のエリート部隊に配属されることである。それを聞いたあと老婆は少女に別れとも言葉を述べた。

「2週間後、ボクはある事情で軍を離れることにした。もしかしたら寿命が尽きて本国へは帰つてこれないかもしない。これからも

辛いことがあるかもしれないがイイ仲間と出会える事を願つているよ」

少女は別れの言葉を聞いて愕然がくぜんとした。しかし彼女は軍人、そこにいる人は親であり自分の上官でもある人だった。少女は動搖した声で老婆に退役理由を聞いた。

「おば上、なぜですか？あなたが軍を離れる理由とは何ですか？第二次大戦にドイツを守り、老いてもなお軍で崇められ、生ける伝説とされているあなたが辞める理由とは？」

少女の質問に老婆はこいつ答えた。

「次の世代へ時代を渡す。って言つのは変かな？でもこれからは君たち若い人が時代を築いて行くんだ。ボクたち老兵はいつまでも椅子に座つている訳にはいかないからね」

老婆は青く輝く目で少女を見つめた。彼女はフォークを強く握り締めたあと、ゆっくりと食器の横に置き立ち上がって気を付けをした。

「わかりました。あなたが軍を辞める事については何も聞くことはありません。満を持して退役してください、ミルヒシュトラーセ大将」

少女は敬礼をしたが、レニは訂正を求めた。

「ラウラ、おばあちゃんって呼んでよ。最後は君の親でありたいから……」

「こつてらつしゃい……おばあ……ちや……ん……」

夢・・・・。ラウラが目を覚ますとそこは保健室だつた。外は夕方でベットの横には大神一樹がいた。

「よかつた。ラウラ、目が覚めたんだね」

一樹はラウラが目覚めたことを校医に報告した。彼の顔はよく見るとばんそうじうが3ヶ所貼られていた。一樹に呼ばれて、金髪でバンダナを巻き赤渕メガネをかけた白衣の校医の人があった。

「意識が戻つてよかつたです。薬が効いたのでしょうか？」

この校医の先生は松本かすみ。I.S学園の名医?だそうだ。彼女は微笑みを絶やさない菩薩のような人で菜食主義者の一面もある。生徒、教員問わず真剣に交際を望む女性からのラブレターが松本宛てに数多く送られているが紹介はここまでで。ラウラは勢い良く起き上がり

「敵は！私たちの戦いのジャマをした敵は！」

と叫び、一樹はラウラを止めた。

「落ち着くんだ、敵はもう倒した。安全だ」

「安全の問題ではない！私とお前たちの決着はまだ・・・つづけ」

ラウラは体を起こした瞬間、痛みが走りつづくまつた。松本先生が

オロオロしながら彼女に寄つた。それでも彼女は一樹と決着をつけようとがいた。

「ああ～ダメですう～～。傷口がひらいてしまいます～」

「はなせ！私はコイツと決着をつけなければいけない！」

松本先生がラウラを必死で押さえようとする。見ていた一樹は止めに入るがラウラの蹴りが顎にクリーンヒット。床に倒れた。その拍子にポケットから♪Podが落ち、保健室に音楽が流れ始めた。その歌を聞いたラウラは急におとなしくなり、昔の記憶に惚けていた。

「（一樹の歌、ミルヒシュトラーセ大将がいつも聞いていた歌・・しかもこの声・・大将の！）貴様！この歌を何処で！」

ラウラが血相をかいて一樹の胸ぐらを掴んだ。落ち着こうと一樹は彼女の手を解^{ほど}き、お互いの事を全て話し合^ううことを要求した。彼女はすんなりと聞き入れ、一樹は松本先生に席を外すよう頼んだ。松本先生が出て行つたあと保健室には一樹とラウラの二人きりになつた。ラウラが落ち着いたところで話を始めた。

「落ち着いたかい？・・・じゃあまず、君はレニおばあちゃんの事を知つているんだね？」

「の方、レニ・ミルヒシュトラーセは私の上官でもあり、血つながりはないが親でもあった。試験管ベビー（体外受精児）で身寄りのいなかつた私を12歳まで育てくれたのだ」

レーはラウラの上官で仮親、つまり養母であった。戦闘のためとして生まれたラウラを見てレーはかつての自分と照らし合せ、不幸に

しないよう彼女を引き取り自分の子供のように育てた。しかしほうラの遺伝子は戦闘に特化した強化試験体で人間の感性はほとんど消えて表情の変化にも乏しかった。でもレーニの前では親子のような振る舞いを見せようと、軍では上官と部下、家では親と子の生活をしていた。

「今度は俺が話す番だ。俺の曾祖父は昔、東京にあった劇場の支配人だったんだ。その劇場で女優をやっていたのがレーニおばあちゃんだ。長寿だったから子供の頃よく会っていたんだ。その時子供を引き取つたと聞いたけど、それが君だったとは」

ラウラは一樹の*Top of the World*の歌について聞いた。それは太正時代の音楽を、パソコンに入っている変換プログラムでデジタルリマスターした音楽という事を説明した。レーニとラウラの聴いていた華撃団の歌はレーニが大事に保存していたドイツ製レコードの歌を聞いていた。今は無いがラウラは華撃団の歌をしっかりと覚えていた。

「これで互いの事は全て話したね。じゃあ俺はもう行くから、早く元気になるんだぞ」「！」

レーニの事を全て話終えた一樹は腰を上げ振り返つて保健室から出ようとした。帰ろうとしたときラウラが呼び止めた。

「なぜだ！私は・・・お前の敵だ。なぜ恨まないで平気な顔が出来る！」

震えた顔で一樹に問いかけるラウラ。一樹はため息を吐き、ラウラの両肩を掴んだ。

「きみは敵なんかじゃない。レーニおばあちゃんが育てたのなら、心

から笑顔ができる人間だ」

「笑・・顔・・だと」

「きみはレニおばあちゃんにとつて、千冬先生にとつても大事な人だ。だから俺は自分の愛する人、仲間の愛する人を守るために戦う。きみもその一人だ」

「それは、まるで大将の・・・・」

やはりひ孫。一樹は知らないがその言葉はかつて大神一郎が洗脳されたレニを元に戻した言葉だった。その言葉を聞き、ラウラは顔を少し赤くし一樹から目をそらした。

「いい雰囲気の所を邪魔して悪い」

後ろからクールな声がした。千冬先生だった。彼女はアリーナの現場検証から一時離れ、保健室に来たのである。

「大神、外に出てくれ。お前に話がある」

一樹を呼び出した千冬先生。一樹は素直に保健室の外へ出た。一樹が出て行つたあと千冬先生はラウラに語つた。

「お前は大将にも、私にもなれんぞ。ラウラ・ボーデヴィッヒといふ人間になれ」

保健室の入口で一樹は千冬先生に呼び出されていた。このシチュエーション、クラス対抗戦以来か。千冬先生は腕を組んで、一樹に2、3質問した。

「お前、あの敵と何を話していた」

「あの敵は脇侍と名乗っていました。奴が壊れる間際に自分の曾祖父『大神一郎』の事を知つてゐるようでした」

「お前の曾祖父とは一体何者だ?」

「元日本海軍の軍人でもあり、昔東京にあつた劇場の支配人でもありました。終戦後は警察予備隊、保安庁を経て防衛庁に勤務していました。退職後、晩年はISについて何か調べていました。」

終戦後、日本の軍隊は解体され、軍人は人に還った。大神一郎は復員後、警察予備隊に入り頭角を表し順調に出世していった。当時は今の防衛省はまだ存在せず警察予備隊　保安庁　防衛庁　防衛省といつ順序で変わつていった。大神一郎は防衛庁を退庁後、栃木の実家に隠居し、亡くなるまでISについて何かを調べていたのである。

「もう一つ聞きたい事がある。なぜエネルギーが無くなつてからすぐには復活できた?」

モニターを見ていた者の一番の疑問点を聞かれた。本来ならごまかす所だが、相手は千冬先生。ここは正直に話した方がよさそうだ。

「千冬先生、フィールドに能楽師を見ませんでしたか?」

「何を話している。私はなぜ復活できたのかと聞いているんだ」

無意識の「ひじごまかしている」と思われてしまつた。しかし「ひじが洗いざらり起きた事を話続けた。

「いえ、その能楽師から面を『えてもうつたら、光武のエネルギーが全回復したんですね」

「その面とはコレのことか」

千冬先生は懐からビニールに入った能面のカケラを取り出して一樹に見せた。能面のカケラは（前から見て）右上半分の状態で金色の眼が彫られていた。一樹はそれを指指し、千冬先生に返してもらいつゝ頼んだ。しかし、千冬先生は・・

「駄目だ。これは事件の証拠品としてもうつておく。分析が終われば返してやる」

しかし一樹は反発し、なんとか返してもうれるよう粘つた。

「それではいけません！今すぐ自分に返してください。その面はこの先必要になるかもしません！今回のような敵にはその面が必要なんです！」

大きく見開いた目で千冬先生の目を見つめた一樹。目力に負けたのか、千冬先生はため息を吐きビニールから能面のカケラを取り出して、一樹に返した。

「それが危険なシロモノだつた場合、お前は厳しい罰を受ける事になる。場合によつては退学処分になつても弁護はしないから覚悟しておけ」

そう言い残すと千冬先生はアリーナへの道を歩いて行つた。千冬先生の歩く後ろ姿から、一樹感謝の言葉を投げた。でも何故、そこまでしてくれるのか一樹は不思議に思つた。クラス対抗戦で倒した『何者か』の残骸を見せてほしいと頼んだ時、山田先生は断固反対したが人一倍厳しいはずだった千冬先生はあつさり許可してくれた。それは俺だからなのか、自分のためなのかこのときはまだわからなかつた。

ラウラは保健室で夕日を眺めていた。松本先生が持つてきてくれたラウラの私物の入ったバックから、一枚の封筒を取り出し中に入っていた手紙を読み始めた。差出人はレニだつた。

『ラウラへ。君を引き取つてから12年の月日が流れた。君の成長を見てきたけれど、まだ表情の変化ができないようだ。でもこれからその機械のような表情を壊し、力強い腕で君を抱きしめてくれる仲間ときつと出会うだろう。その仲間と一緒に未来を歩むんだ。君と過ごした日々をボクは決して忘れない。』

最後に君を引き取つた理由。それは昔のボクと同じ戦闘機械ではなく普通の女の子として育つてほしい。ただそれだけを望んで君を育てた。生まれ方が普通の人と違うとか、望まれない子供だったとか、そんなことはどうでもよかつた。血の繋がりは無いけど、君はボク、レニ・ミルヒシュトラーセの子であることをこれからも忘れないでほしい。

イッヒ リーベ ティッヒ(ドイツ語で愛してます) レニ・ミルヒ
シュトラーセ 2012年9月1日』

読み終えたラウラは静かに、掛け布団の上から大粒の涙を流した。

第27話 レー102歳 別れの手紙（後書き）

タイトル由来は映画「チエ39歳 別れの手紙」より
感想待つてます。

第28話 幼馴染は突然に（前書き）

サクラキャラで、ついにあの人のひ孫と思われるキャラが登場！

第28話 幼馴染は突然に

千冬先生から能面のカケラを返してもらつたあと、一樹は一夏・シャルルと合流し食堂で晩ご飯を食べていた。一樹はトンカツ定食、一夏は海鮮ラーメン、シャルルはミートドリアを心身疲れた胃に入れた。

「結局、トーナメントは事故により中止。ただ、今後の個人データ指標と関係するためすべての一回戦は行い、所と日時の変更は各自の端末で確認してだつて」

「そりやあ、あんな事が起きたんだからな」

「お偉いさんは頭を抱えて帰つていったよ。せっかくのデータ収集ができないことがよほど悔しいんだろう」

一夏のケガは軽いすり傷で済み、シャルルとのんびりと食事をしているが、一樹は脇侍の死に際の言葉が頭から離れない。食事が終えたら話そうと思っていた。味噌汁を飲み干し、箸を置いてござ。のハズが一夏も同時に食べ終わり満足そうな笑みで食事の感想を述べた。

「ふー、じつそつさま。この学園は本当に料理が上手いな。毎日美味しいメシで幸せだ……ん？」

一夏がこちらをじっと見てている女子に気がつき、一樹とシャルルも視線を移した。よく見てみると女子達はなぜかすこく落胆している。

「優勝……チャンス……消え……」

「交際無効」

「・・う・・う・・」わああああんっ！

「ひええ～～～～～ん」

女子たちが泣きながら走り去っていった。

「どうしたんだミネ？」

一九四〇年五月

一夏とシャル川にはわけかわかななか二た。

「・・・（一夏はどう思つてゐるか知らないが、俺はどのみち交際は断るつもりだつたからな）」

一樹は今回のアーナメントの優勝者ペアは一樹と一夏のどちらかと
付き合えることを數十分前に薰さんから聞いた。それを聞いて彼は
「もうちょっと早く訂正をすればよかつたな」と呟いた。交際を断
るということは好きな人があるということであるが、それを知る者
は誰一人いない。

女子が立ち去った後に、一人呆然と簾がこちらを見ながら腕を組んで仁王立ちしていた。一夏は簾のそばへと移動する。

「そういえば筈。
先月の約束だが・・・」

筈はピクッと反応した。

「付を合つてもここのぞ」

「…………なこ？」

「だから、付を合つてもここのつて……つかつて……」

ウワァオ！爆弾発言！そもそも『優勝者付を合つて』とこつのは篝が優勝したら個人的に一夏と付を合つところのが真相だった。いきなりの告白の返事を聞いて篝は、一夏の胸ぐらを締め上げる。

「ほ、ほ、本当、か？　本当、本当に、本当に、本当なのだな！？」

「あ、あ！」

何回本当を繰り返すのか。彼女は手を離し腕組みをする。

「な、なぜだ？　リ、理由を聞こひでないか…………」

「そりや幼馴染の頼みだからな。付を合つて」

「そ、そりか！」

篝の顔が今までになくくらい輝始めた。これはひょっとすると……。

「買ひ物へりこ」

「…………パキッ」

何かがイヤな音がした。輝いていた篝の顔はみんな見事に

い顔に変化していった。そしてついでに……

「そんなことだらうと思つたわつー。」

「べほあつー。」

腰のひねりを加えた正拳。一夏はその場に膝をつき、簫は彼の腹にトウキックを入れた。悶える一夏、これは痛い。

「ぐ、ぐおおおお。な・・・なぜ?」

怒りの簫はそのまま去つて行き、一樹とシャルルははずくまる一夏へ詰め寄る。

「一夏つて、わざとしちゃんじやないかって思つときがあるよね
「な、なに・・・じうじう意味だ・・・それは
「さあね」

腹に蹴りをくらつた一夏の顔色が悪い。一夏は口を押されて必死にこひえた。

「ヤバイ・・・せき食つた・・・ラーメンが出てきそうだ・・・
ウプッ・・・

「待て、待て、待て!吐くな!そのまま押し込め!」

なんとか嘔吐だけはまぬがれた。そこへ山田先生が来た。

「あ、大神くん、織斑くん、デュノアくん。ここにいましたか。
今日は本当にお疲れ様でした。」

「はい、そちらこそ搜査お疲れ様でした。」

関係者は今回の事件で夜も捜査を行つていた。対抗戦の時の件もまだ片付いていないので今回の事件との関連性がないかを調べる方針で先生側は大変だ。でも山田先生はそんな疲れを感じさせない顔で、大きな胸を揺らしながら一樹達にイイ情報を持つてきた。

「それよりも、朗報です！なんと！ついに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

日本人の心ともいえる、温泉。それが今日から三人・・ではなく二人の男子への使用許可が降りたのだ。これは嬉しい。

「そうなんですか！？ てっきりもう卒業まで入れないものかと思いましたよ」

「そ、それはちょっと大きさですね・・。では気を取り直して。時間は休日の8時から9時までの一時間。平日の中日は特別です。その間女子の立ち入りはできないようにしておきますので、混浴はありません」

「わかりました。ありがとうございます、山田先生。（まあ混浴はなくとも、これからぞきができるな・・・）」

「大神くん。女の子の・・・入浴を・・・のぞこつなんて・・・
考えてはいませんね？」

男の口マンを女のカンで察したのか、山田先生は恐怖感のある一ツ
「コリ顔をズンズン一樹に近づけた。

「い、いえ・・・考えていません」

「そうですか。大神くんがそんなことするわけありませんね」

のぞきはやめよう。冒険野郎になるのはいいが、バレたらえらいことになりそう。その横では一夏がまだお腹を押さえて悶えてそれを見ているシャルルの光景があった。

1日の中休校を終え、朝のHR、山田先生が入つて来た。

「み、みなさん、おはよついざれこます……」

山田先生はなぜかフラフラしながら教壇に立つた。いつたいどうしたのだろうか。

「今日は、ですね・・・・みなさんに転校生を一人紹介します。じやあ、入つてきてください」

またまた転校生。山田先生の紹介で一人目の女子が入つてきた。栗色で内側にクルツとした長い髪。両肩には十字架の刺繡しじゅうが入つて、まるでシスターをイメージさせる制服を着て、その首にはロザリオが下がっていた。

「一人目の転校、アンナ・フォンティーヌさんです」

「はいはーーい。アンナ・フォンティーヌでーす。フランスから來ましたあ」

一樹は目を丸くして彼女をみた。それは子供のころ、一緒に遊び、学びあつた幼馴染の姿だった。

「ア、アンナくん！？ど、どうして学園に…？」

「ああーーっ！大神さん。お久しぶりです。アンナ、来ちゃいました」

アンナは一樹に走つていき恋愛ドラマのよひに一樹に抱きついた。

「大神さん、会いたかったです～～」

「マズイよ、アンナくん。みんな見てるよ・・・」

一樹は顔を赤らめた。クラスの女子は一樹とアンナの恋愛劇に釘付けで、セシリ亞はワナワナとした表情で二人に指をさした。

「お、お、大神さんっ！その方と知り合いでしの！？」

「え、あ・・・うん。幼馴染なんだけど・・・」

後ろから山田先生の声がした。

「あの〜〜お次は転校生といいますか、すでに紹介は済んでいますか、ええと・・・」

「失礼します」

廊下から一人目の転校生が入ってきた。その人物に一同はさらに衝撃が走った。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

スボンではなく、美脚でミニスカート姿のシャルロットが礼をする。

「ええと、デュノア君はデュノアさん……でした」

シャルル……ではなく、シャルロット・デュノアが女性であることが公表されたのだ。

山田先生がふらふらだったのはそれが理由か。

「え？ デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！『美少年』じゃなくて『美少女』だったわ
けね」

「つて、大神くんと織斑くんは同室だから知らないことは……

「ちょっと待つて！一昨日つて確かに男子が大浴場使ったわよね！
？」

教室が一気に喧騒^{けんそう}に包まれる。とその時、教室のドアがすごい勢いで開く。甲龍を展開した鈴が入ってきた。

「一夏あつ……」

うわあ、すげえ怒っている。アンナは話を聞いてもちろんぶんかんぶんで、一樹から離れ近くの女子に聞いた。

「あの……どうじことですか」

「そこの大神くん、女子と混浴したのよ！」

「ええ！大神さん、私以外の女人人と一緒にお風呂入ったんですか！大神さんがそんなことを……」

アンナは両腕を上に上げ自分の専用機の両腕を部分展開して同時に装備のガトリングを出し、銃口を一樹に向けた。その横から鈴、さらには篝とセシリ亞も一樹達にアンナに便乗してきた。

「もう、懺悔したって許しませんからね！」

「一夏あああああああつ！」

「大神さん！どうゆうことですのー！」

「一夏あー貴様ああつー！」

やべえ！ぶつ殺される！

鈴は闘牛のように鼻息を荒くし、アンナは専用機の両腕を部分展開したガトリングを構え、篝とセシリ亞も鬼のような形相で4人の少女達は一步一步、男一人に近づいた。

「神様…………俺はまだ死にたくない…………！」

「一夏逃げよう！飛び降りるぞ！」

一樹と一夏は4階にあるこの教室の窓から飛び出し、二人は落下しながら光武と白式を展開。一樹は無事に着地を決め、一夏は着地に失敗して尻もちついた後、何処かへ走つて逃げていった。

「逃がすかあああああつ！」

鈴は一樹達が飛び降りた窓から龍砲を発射した。その時、逃げる一樹達を庇う機体が現れ、龍砲を止めた。その正体はシユヴァルツェア・レーゲンを開いたラウラだった。

「ここには通さん！大神は……大神は私の嫁だ。私の嫁は私が守る！」

「ええええええええええええええっ！」

爆弾発言をしたラウラ。アンナ、筈、セシリ亞、鈴、1組全員、山田先生も驚いていて数秒硬直していた。ハツと我に返りつた山田先生は窓から乗り出し、一樹と一夏に教室にもどるよう叫んだ。

「大神くくくくん、織斑くくくくん。まだ授業中ですよ～～～～～～」

二人はもう声が聞こえないほど遠くへ逃げていった。一人が戻ってきたのは3時間目が終わる時だった。

第28話 幼馴染は突然に（後書き）

タイトル由来は小田和正の曲「ラブ・ストーリーは突然に」より
感想待つてます。

第29話 東京のフランス人（前書き）

一樹と一夏が脱走して数時間後のお話。アンナの人物像もまたサクラのあの娘を思わせます。

ちなみに本作ではI.S学園の所在地は東京都で、東京湾海上に作られた人工島にある設定です。

第29話 東京のフランス人

「『めんなさい』といいといいといい！」

「決していやらしい事を考えていたじゃないんだ！」

昼休み、場所は芝生屋上。アンナ、篠、セシリア、鈴、ラウラのまえで土下座する一夏と一樹。女子5人は土下座する二人を見下し、ガミガミと怒つた。彼女達5人以外にも昼休み前に山田先生、千冬先生に教室を脱走し授業すっぽかしたことを、こっぴどく叱られた。

「待つて！一人をそんなに怒らないで。一樹達は、ボクを守るために黙つてくれたんだ」

シャルル・・じやなかつた。シャルロットが男一人を庇い、自身が男装をしていた理由を話した。自分の出生、実家の会社の経営難、社長である父の命令で第4、第5世代のデータを盗むための男装、一樹達の庇い、実家との決別のことなど全て話した。それを聞いた4人は納得しシャルロットに同情、シャルロットの父親に憤慨した。

「そうだったのか、随分辛い思いをしていたのだな。まあ混浴は許されないが、デュノアを守るためには致し方あるまい」

「そんなの父親じゃない！サイテーね、アンタの父親！」

シャルロットの親の酷い扱いを聞き、混浴をしたことへの怒りは鎮火の方向へ向いた彼女たち。アンナも話を聞いて救いの手を差しのべた。

「実の息子を商売道具にする父親、縁を切つてしまつのが当然です。大神さん。混浴は許し難いですが、事情があつてやつたことなら仕方がありません。神様も許してくれるでしょう」

「（な、なんだ、「イツは？つかみどりが全く読めん……）」

アンナの言つてることは筋が通つてゐるが、どこかがズレている。まあ、彼女はいわゆる天然キャラというヤツだ。超真面目なラウラはアンナの天然の思考を読み取ることは多分ムリだろう。

「大神さん、もう一つ教えてください。そこのアンナという人はあなたとどうゆう関係ですか？」

セシリ亞は一樹に近づき、転校生、アンナ・フォンティーヌの紹介を求めた。

「わかつた、わかつた……じゃあ改めて紹介するよ。俺の幼馴染、アンナ・フォンティーヌくんだ。フランスの巴里にある修道院でシスター見習いをしていて、子供のころフランスへ行つたときによく遊んだんだ。家族ぐるみの仲でね」

「アンナ・フォンティーヌです。皆さん、よろしくお願ひします」

「ソーリ」とスカートを広げ丁寧にあこがれをするアンナ。箒たちも自己紹介をした。

「「じゅうじょよろしく。私は篠ノ之箒だ」

「わたくしはイギリス貴族にして代表候補生のセシリ亞・オルコットですわ。」

「あたし中国の代表候補生の鳳鈴音。クラスはとなりの2組だけどね。ちなみさつきの女はサボテン女っていうあだ名があるわよ」

「ちよっと、鳳さん！それはわたくしのことですのー…？」

「他に誰がいるの？アンタみたいなトゲトゲした言い方の女」

「なんですかええええ！」

始まつた、二人のケンカ。鈴はニヤけ顔でセシリアをからかった。まあこの二人のケンカは置いといて、シャルロットももう一度自己紹介をした。

「ボクも改めて。シャルロット・デュノアです。君と同じフランス出身です。よろしくね」

シャルロットまで紹介が終わり、次はラウラの番……のはずが彼女は腕を組み、横を向いてツーンとしていた。一樹はラウラの肩をポンッと叩き、自己紹介を勧めた。

「ほら、ラウラ。頼む」

「ラ、ラウラ・ボーデヴィッヒだ…・ドイツの…・候補生だ…・よ、よろしく頼む」

自己紹介を終えたラウラはアンナから目をそらした。あのラウラがタジタジなんて、アンナはラウラの天敵なのかも知れない。最後の紹介は一夏。

「俺は織斑一夏。見ての通り男性操縦者だ。大神とはルームメイトで仲良くやつてるよ」

一夏はアンナの顔をじっと見てやや顔を赤くした。

「（カワイイな、この娘。まるで天使のようだ）・・・・イイツ！」

両足に激痛が走った。よく見ると一夏の右足に箸、左足に鈴の足が踏みつけられていた。二人は一夏を上田使いに睨んだ。

「あんた、あの娘にホレたんぢゃないでしじょうね？」

「私以外の女性を好きになるなんぞ許さんぞ」

おつかね～～～～～。一夏の恋路は前途多難だ。

「一夏さんって結構モテるんですね～～」

「いやアンナくん、あれは違うと思ひよ」

深々（しんしん）に話す一人を見て、セシリアはアンナと一樹との間に割り込むかのように興味津々な顔を装い、H.Rでアンナが両腕を部分展開できることを彼女に聞いた。

「お話の途中失礼しますわ。アンナさん、さつき機体を部分展開しましたけど、専用機持ちなのですの？」

「ええ、私の専用機『エヴァンジル』です。たしかにシャトーブリアン社から貰ったとき、開発主任つて人が第5世代型つて言ってましたね」

今、なんと言つた…？シャトーブリアン社から貰つた！？第5世代型！？現時点で世界中にある第5世代は、神崎グループが造つた一樹の『光武F式』一機のみ。それを何故、アンナが持つているのか聞いてみた。

「『Hヴァンジル』は曾祖母の遺産…と言つべきでしょうか。実は今年の春に、私の曾祖母が亡くなりました。その1週間後に曾祖母から手紙をもらいました。それがこの手紙です」

一樹はアンナから曾祖母の手紙を受け取り読み上げた。

「『アンナへ、この手紙を受け取つたらシャンパニュにあるシャトーブリアン社に行つてください。その社長にこの手紙を見せたあとは彼女の指示に従つてください。その指示が終わつたら、私の遺産をあなたに差し上げます。私の遺産を貰つたらそれを持って、ニッポンのトウキョウにあるIS学園に編入し3年間すごしてください。その学園には大神一樹くんがいるので心配ありません。これはあなたの方の未来に関わることです。旅立つあなたに光あれ、アーメン。　Hリカ・フォンティース』か。なるほどね」

「で、シャトーブリアン社に行つて2ヶ月間のIS操縦の訓練を受けたあと、遺産という『Hヴァンジル』を貰い、IS学園に来たつていう感じなんですね」

エリカ・フォンティース。彼女もまた巴里華撃団の隊員だ。そしてそこにいるアンナ・フォンティースはエリカ・フォンティースのひ孫なのだ。『Hヴァンジル』はエリカのひ孫への贈物らしい。ここに編入することを勧め先はなんと言つていいのか。

「アンナくん、日本に行くことを教会や『ボヌール』の人はなんて言つてたんだい？」

「はい、『神に仕える者の命もまた主の命もあります。エリカ様の『ご遺言に従い、こちらの事は任せて行きなさい』って言つてました』

アンナは巴里のモンマルトルにある教会でシスター見習いをしている。『ボヌール』とは、エリカと同じ、巴里華撃団の仲間であるロベリア・カルリーーと共に開いた孤児院の名前である。現在はロベリアの孫が院長を勤めており、アンナはシスター見習いをしながら孤児院の子供達の世話をしているのだ。

ちなみにボヌールとはフランス語で「幸福」という意味だ。アンナの専用機『エヴァンジル』もフランス語で『福音』といふ意味である。

「アンナくんも俺と一緒に。本当の事を言つと俺もじこちゃんの遺書に『IS学園に行くんだ。これはお前たちの未来に関わることだ』って書いてあつたからこの学園へ編入したんだ」

もうこの際、本当の事を話そう。以前クラス対抗戦に特別参加が決まった時、黛の『学園に来た理由』のインタビューの際に『IS操縦を極めたい』と言つたのだが、本当は大神一郎の遺言で受かつていた高校を蹴りIS学園に編入したことを話した。

「お前、自分を磨く為でなく本当は遺言で学園へ来たのか」

笄は以前、黛のインタビューと違つ言葉に驚き、その場にいたセシリ亞は一樹の発言に異議をたてた。その後ろでは鈴が一夏にコブラツイストと^{まんじ}巩固めをキメていた。

「すると何ですかー? 大神さんはわたくしたちとの学校生活は、本当は不満はだつたといふのですか」

「イヤ、全然不満じやないよ。『』（学園）はどいつもイイ所だ。……いろんな人、そして……君たちと出会えてとても樂しい日々を送つていいし」

その爽やかな一樹の顔でセシリ亞はおだてれた。彼女の顔は赤く染まり一樹から田をそらした。アンナもこの出会いに感謝の言葉を述べ、その横から痛々しい体を引きずる人の声がした。

「まあ、まあ。大神さんも、国籍の違つ皆さんがここで出会うのも何かの神様のおかげです。仲良くしていきましょ」

「や、そうだな。お、おんなり釜の飯を食つ仲間だからな……イテテテ、こ、腰が・・」

鈴の「ブラツイストと^{まんじ}固めから解放された一夏。姿勢はカッコ悪いが、いい台詞^{セリフ}に一同は賛同した。

「まあ、みんなと居ても退屈しないしね」

「同感ですか。それに・・・なんでもありますん!」

「私もだ。幼馴染と再開できたり、いい剣道仲間と会えたしな

「ボクも。自分を必要としてくれるみんなと会えたことを、とても嬉しい思つよ。ねつ、ラウラ」

「・・・」「クツ・・・ぽつ」

ラウラとセシリアは一樹に木の字だろ。ともあれ、これから七人で共にスクールライフをおくると同時に、平和を守る仲間ができる瞬間だった。これから起きる出来事に向けて・・・・・

第1章 热き記憶に 終

第29話 東京のフランス人（後書き）

タイトル由来は映画「巴里のアメリカ人」より
感想待つてます。

第2章の登場人物紹介（前書き）

ネタバレ注意ーこのページはウィキペディアのように更新しています。

第2章の登場人物紹介

【本作オリジナルキャラ】

米田トオル（よねだ とおる）

「性別」男

「年齢」14歳

「身長」160cm

「出身」日本・静岡

「誕生日」2002年9月2日

「紹介」大神一樹と加山雄四の後輩（ビジュアルは大河新次郎と同じ）。中2。勤勉精神でまじめな性格。己を磨くために栃木の父親の実家で生活している。出身は静岡の熱海で実家は旅館『超新星』を営んでいる。両親との仲は凄いイイ（母からは異常なまで愛を受けている）。自身の更なる向上を目指し、将来は『紐育^{ニューエduc}』（ニューヨーク）に行つて、でっかい男になる！』という目標を掲げている。

米田ナナ（よねだ なな）

「性別」女

「年齢」11歳

「身長」120cm

「出身」日本・静岡

「誕生日」2005年7月4日

「紹介」トオルの妹（ビジュアルはリカリツタ・アリエスと同じ）。小5で東京の劇団に所属している。明るい性格で、学習能力が高く東京の学校はトップの成績。相棒の「もしものごはん（非常食）」のフレットの二コと一緒にいる。ハチヤメチャぶりに兄のトオルは手をやいている。

米田カオル（よねだ かおる）

「性別」女

「年齢」ひでぶつ！

「身長」173cm

「出身」日本・静岡

「誕生日」????年10月11日

「紹介」トオルとナナの母で、旅館『超新星』の女将。肝つ玉母ち
やんで息子と娘を心から愛している。

第30話 追跡者（前書き）

始まりました。第2章『君、忘れたもうことなかれ』戦いと恋路はさらに加速していきます。

第30話 追跡者

今日は日曜日。シャルロットが女であることが発覚したあと、彼女は別の部屋へ引き取られた。シャルロットの使っていたベットは一樹の元に戻り、部屋は男一人部屋に戻った。一樹はシャルロットの匂いが残るベッドでゴロ寝していた。すると扉が開きシステム風の制服来た女子が入ってきた。

「大神ちゃん。朝ですよ～～～～」

朝から元気な声の主はアンナだった。アンナはフォンティーヌ家に伝わる伝統芸『おはようボンジユール』で一樹に爽やかな朝（？）を贈った。彼女の『おはようボンジユール』で目を開けた一樹はのつそりと体を起こした。

「アンナくんの朝は早いな～。ン・・・・・・・・？」

一樹は体起こした時、いつもと違うベットの反発感を感じた。よく見ると毛布の中に何か塊のような物がモゾモゾ動いている。おそれおそる毛布をめくった一樹。

「うあおおおおおお～！」

一樹は驚いて床に転げ落ちた。そこにはランジヒリー姿のラウラが添い寝していた。

「ん～～～、もう朝か～～～」

「な、なんで君が俺のベットで寝てるんだ」

「日本の言葉では氣に入ったものを『俺の嫁』だとか『自分の嫁』と言つそつだが」

「そうです！だからわたしもこいつして大神さんを起こしに来たんです」

「君たちに聞違つた日本の知識を教えたのは一体誰なんだ！」

「これはヤバイ！海外で日本の知識や価値觀がこんなふうに取られるとは、いろんな意味でヤバイ。サムライ、ワの國と神聖に呼ばれた時代はどこへ行つたのか。

「なんだよ～朝からつむさいな～～・・・・つて、なんだこりゃ～！」

「」の騒ぎで一夏もさすがに田を覚まし、セクシーなラウラのランジェリー姿を見て仰天した。一夏はラウラに近づき部屋に帰らと言いい、彼女に指を指した。その時、ラウラは一夏の手を掴み十字固めを決めた。

「痛ででででで～ギブ、ギブ、ギブ！腕折れる、腕折れるつて～！」

「お前はもう少し寝技の訓練をすべきだな」

「やめるんだ、ラウラ！一夏もタップしてるぞ。アンナくん、離すの手伝ってくれ」

一樹とアンナは一夏から引き離そつとラウラの肩を掴み、引っ張つた。しかしエリート軍人であるラウラは一人を一瞬で放り投げ、二人は壁にぶち当たつた。一夏は一瞬解放されたが、すぐに三角縛

めで捕まつた。その時入口の方にまた女子の声がした。

「私だ一夏、大神入るぞ。朝練に付き合え！」

ドアが開き竹刀を持つた剣道着姿の篝が入ってきた。その姿を見てアンナは目を光らせ篝に寄ってきた。

「わあ～、篝さんはサムライ娘なんですね！うわあ～カッコイイですう～～～～～～」

「そ、そ、うか。あ、ありがと、」

アンナのキラキラ光る目で見られた篝はとりあえず礼を言った。ここでアンナはあることに気がついた。

「あれえ～篝さんはチヨンマゲの免許は持つてないんですねかあ～？」

チヨンマゲの免許。曾祖母エリカから教わった日本の事。元々大神一郎がエリカ・フォンティースに初めて出会つた時、日本の事を聞かれてとっさに言つてしまつた言葉だ。それがひ孫にまで伝わってしまうとは恐ろしい。

「い、いやそんなものは。それより一夏は・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ベットを見るとそこに一夏がランジェリー姿のラウラ三角縫めを決められていた光景だった。篝は竹刀を落とし、青ざめた顔で口を鯉のよう^二にパクパクさせた。一夏も篝の顔を見て顔から一気に血の気が引いた。一樹は一夏が痛い目に合つと感じ彼を弁護した。

「ち、違うんだ篝くん！」これには事情があつて・・・

「や、そうだ！ 篦、これは誤・・・」

篚は落した竹刀を再び手に取り、ジャンپして大きく一夏に向け振りかぶった。

「天誅ううううううつー。」

「つぎやああああああああああああ」

一樹の弁護も虚むなしく、寮全体に男の悲鳴が響き渡つた。

朝食を食べ終え、一樹とアンナは学園のある島と本土を繋ぐモノレールに乗つた。ガタンゴトンと揺れる車内から見えるのは青いと空と海の見える風景だ。

「大神さん、どこへ行くんですか？」

「もうすぐ臨海学校なんだ。アンナくん、巴里じゃ水着着ることないから持つていらないだろう。だから俺の分も合わせて一緒に水着買に行こうと思つてね」

「なんだ、お前らも水着買いに行くのか

隣りの座席を見ると一夏とシャルロットがいた。一夏の顔には今朝の篚の竹刀の後があり、顔のど真ん中が額から顎にかけ縦に綺麗

に赤くなっていた。

「おお、一夏。お前も水着買いに行くのか？」

「ああ、シャルロットが女子用の水着持つてないって言つててな。俺も水着を買おうと思つてたからついでにと思つて」

一夏達も臨海学校に向けて新しい水着を買ひに行くらしい。シャルロットを見てみると何か顔がおかしい。一夏の「ついでに」という発言にシャルロットはつららめしそうな顔で、一夏に冷たい態度をとつた。

電車を降りた男女ペア2組。一夏はシャルロットの手を握り、それにつられアンナも一樹の腕に抱きつき、いい雰囲気ムード満天の2組は改札口へ歩いて行つた。するとホームの自販機の後ろから病んだ目で見ているセシリ亞と鈴の姿があつた。鈴は甲龍の右腕を部分展開して負のオーラ全開で

「あの幸せ、ぶつ壊す！」

と言い、自販機の影から飛び出た。それを見てセシリ亞は鈴の肩を掴んで自販機の影に戻した。

「お待ちくださいーーまずあの二人をトラッキング（追跡）して情報収集をしてから、どこまで行つている関係なのか見極めるのが専決ですわ」

「じゃあ俺達はこっちの方へ買いに言つてくるよ」

「おひ、イイの選べよ」

別れた2組を見て鈴は東側の繁華街へ行つた一夏達を、セシリアは西側の繁華街へ行つた一樹達を追跡し始めた。

アンナは日本の繁華街に興味を示し、走つていった。すると・・・

「アンナくん、前！」

一樹が注意したと同時に景氣のいい音がした。

「あいた、あ～頭打つたあ～」

アンナは看板に激突し、頭を押さえていた。やはりエリカのひ孫。激突看板娘の血は継がれているようだ。

「えへへへ、アンナまたやつちゃいましたあ

アンナのぶつけた頭をなでなでする一樹に、セシリアはハンカチを噛み締めていた。

一方鈴の方も、恋人気分でいる一夏達をさうに怨めしそうに見ており、「（もし一線超えたら赤兎馬に乗つて、その幸せを壊しに行つてやるわー）」と考えながら追跡していた。

第30話 追跡者（後書き）

タイトル由来はそのまんま映画「追跡者」より
感想待つてます。

第31話 天使に水着を（前書き）

水着購入の道程で続々と新キャラ登場です。活字内のキャラクターは読者の皆様のイメージーション（想像力）にまかせます。

第31話 天使に水着を

水着を買いに来た時期は7月で当然外は暑い。駅に着いた時、一樹とアンナは夏服を持っておらず冬服を着て來たのでめっちゃ暑かつた。そこで一人は急遽、駅前にあつたIS学園制服の取扱店に行き、夏の制服を買った。

数十分後、店を出てきた一樹の格好は、薄い生地(きじ)のスponで、上は半袖の開襟(かいきん)Yシャツ。続いて出てきたのはアンナ。彼女の格好は十字架の入つた半袖ロングワンピースタイプの制服で、両腕には紫外線防止の腕カバーという日焼け対策万全の制服だ。アンナはシスターだから肌が焼けてはいけないのでさらに日傘も買い、これで肌が焼けることはないだろう。

「お待たせしましたあ、大神さん。どうですか？」

「よく似合つているよ、アンナくん」

「ありがとうございます。大神さんが褒めてくれるだなんて、これもひとえに神様のおかげですね」

アンナは神様に感謝をした後、傘をクルクル回しながら走つていき、一樹もあとを追いかけた。IS学園の制服は指定された制服を自分なりにアレンジして着ることが許されつ。例を挙げると鈴の肩の露出出したアレンジ例や、ラウラのナチス風のアレンジ例がある。ちなみに一樹の制服は一夏のとは違い、学ランタイプの制服を着ていた。

一樹ペアのいる繁華街西側は、巴里のシャンゼリゼ通りをモチーフとした通りに様々なお店が並んでいるオシャレな町並みだ。アンナは故郷に似た風景に大はしゃぎした。ちなみに一夏ペアの行った東側はアメリカのブロードウェイをモチーフにした通りだ。ここでアンナは臨海学校の事を聞いた。

「大神さん。臨海学校つていつ、何処に泊まるんですか」

「来週の日曜からだよ、場所は熱海で、『超新星』つていう旅館に泊まるんだ」

『超新星』とは熱海にある三ツ星旅館だ。そこに泊まるとはさすがは国立。その時、後ろからボロ～ンとギターの音がした。

「臨海学校はいいなあ～～～。俺は試験だけど」

振り向くとそこには小学校時代からの一樹の親友、加山雄四がいた。それも初夏なのに白いスースでクラシックギターを持っていた。やっぱり暑かつたのか、加山はタオルで汗を拭き、無理矢理の爽やかな顔で一夏に近づいて来た。

「いょう、大神い。久しぶりだな」

「加山!なんでここに?」

「実は東京の親戚の家に遊びに来ていてるんだ。で、近くにお前のいるIIS学園があつたから脅かしてやるつと思つたわけだ」

「そりか、久しぶりだな。4月に旅立つたから3ヶ月ぶりか」

懐しの友人と親しげに離す一樹をアンナジ～と見ていた。それに気づいた一樹は互いを紹介しあつた。ここでもやつぱりアンナは、加山に「チヨンマゲの免許」を聞き一樹は「まだ持っていない」とごまかした。一度本物を見てみたいものだ「チヨンマゲの免許」というヤツを。アンナの天然を堪能した後、加山はさつき一樹の話していた泊まる旅館の事について話だした。

「大神。さつき言つてた『超新星』っていう旅館。あそこはトオルの母親が女将をしている旅館だぞ」

「トオル・・・もしかして、米田トオル？俺たちの後輩のトオルか？」

米田トオル。一樹と加山の中学校時代の後輩で現在中学2年。彼は心身を鍛える為に朽木の父親の実家で暮らし、熱海で働いている両親とは別々に住んでいる。もちろん両親との仲は凄いイイ（特に母）。つまり一樹達の行く臨海学校の旅館とは、その後輩トオルの母親が経営する旅館なのだ。ここで加山は一樹とアンナを連れ、オープンカフェのお店手前15m手前まで来た。

「あそこ見てみる」

加山が指を指した方向に、カフェで牛乳を飲んでいる中2に見えない童顔の少年がいた。彼こそが一樹と加山の後輩、米田トオルなのだ。加山はドッキリを仕掛けようと一樹に耳打ちした。ドッキリの打ち合わせを終え加山は携帯を取り出し、トオルへ電話をかけた。

「はいもしもし、米田です」

「あ、もしもし。トオルか。俺だ雄四だ」

「え、加山先輩！加山先輩ですか！？」

久々の先輩との電話に驚くトオル。一樹はソロリソロリと忍び足でトオルに近づいて行った。加山はトオルが一樹に気づかないようにな話に集中した。

「お前さん、今何処にいるんだ。俺と久々に会わないか？」

「加山先輩に会いたいのはやまやまなんですけど、僕はいま紐育ニヨーヨークにいるんです。己の修行に来ています」

大きなウソをついたトオル。加山は電話を続け、一樹は気づかれないように電話に集中しているトオルの背後に近づいた。加山はトオルにもう一度、居場所の確認をとった。

「ほお～紐育。お前、紐育にいるのか

「はい！」

「ウソつくな！」

一樹は優雅にしているトオルの脳天をひっぱたいた。トオルが慌て振り向くと一樹と、電話姿の加山がゆっくり近づいて来るのが目に入り動搖した。

「あれっ、大神先輩！？加山先輩！？なんでここにーー？」

「お前こそ何やっているんだ、こんなところで？しかも紐育にいるつてウソついて。霧岡ヒロ氣なら西側じゃなくて東側のほうが合ってない

か

ドッキリ大成功。トオルは慌てており、困り顔で弁解した。この*わけ*にいた理由は中学の期末試験が終わり、栃木から熱海へ帰郷する道程で東京の劇団にいる妹のナナが「熱海に帰る前に新しい水着が欲しい」と言うことで、買い物に付き合わされたのだ。紐育というウソをついたのは、彼が今「紐育に行って、でっかい男になる!」目標を掲げており、一樹達にアピールしたかったという。するとカフェの向かいのお店から、大きな袋を背負った三つ編みの小学生の女の子が出てきた。

「とおる~、水着たくさん買つてきたぞっ!」

この無邪氣で可愛らしい少女がトオルの妹、米田ナナ。ドスンと袋を置くナナ。その上に星模様の入ったフェレットがいた。

「おお〜、かずき。かやま。久しづりだなーアレ、そつちはダレだ?」

「初めまして。アンナ・フォンティーヌです。あなたがナナさん?」

「うんっ!米田ナナ!みんなはナナって呼ぶー!」の子は二歳。ナナのもじもの「ハ」

縁起でもない紹介にフェレットの「ほつきゅう」と鳴いた。互いの紹介をし終わつた隣りでは、買った水着の量を見てトオルは買すぎだから8割はお店に返品していくよつた。しかしナナは聞かず、トオルに反発した。

「11歳の夏が終わつたら11歳の夏はもう2度とやつてこない。」

だから悔いのない11歳の夏を送る。これナナの掟！

「去年と同じじゃないか！」

去年も同じ事をしていたのか。暴走する下の兄妹をもつ兄はつらいなあ。ここでアンナはナナに買いすぎた水着を返品をするよう説得し始めた。

「ナナさん。その年、その年を大事にするのはとてもいいことです。でもたくさん水着を買っても、着なければその水着をつくった人達の努力がムダになってしまいます。その人たちの努力をムダにしないためにも、水着は必要な分だけ買いましょうね」

見習いとはいえますがシスター。彼女の慈悲深い説得にナナは考え込んで、そして明るい顔で答えを出した。

「わかった！ナナ、買すぎる水着返してくる！」

そう言つとナナは買った水着の9割を返品しお店へ走つて行った。トオルはアンナに感謝の言葉を贈つた。ここの一樹も自分たちの新しい水着を買いに行くという事を思い出し、加山とトオルにしばしの別れを告げた。

「じゃあ俺たちも、これから水着買いに行くから。トオル、来週そつちの世話になるよ」

「はい、母さんに伝えておきます」

「大神、水着を買うならこの先の『ブルー・ラド・マレ』という店がオススメだぞ」

加山に礼を言い、ここで旧友と別れた。一樹とアンナは加山に勧められたフランス語で「青い津波」の意味を持つ『ブルー・ラド・マレ』という店に入つていった。

『ブルー・ラド・マレ』は男女の水着の品揃え豊富で競泳用からバカンス用、勝負用まで一通りそろえてある。一旦、一人は別れ、それぞれの売り場へ水着を選びに行つた。

「これいいな。これにするか

男性水着売り場にいる一樹。どうやら気に入ったのが見つかったようだ。一方、女性水着売り場にいるアンナも気に入ったのが見つかったようだ。

「これ、カワイイです!。よし、この水着で大神さんのハートをゲットしちゃいます!」

果たしてアンナの選んだ水着とはどんなのか。一樹とアンナはそぞれ選んだ水着の会計を済ませ、モノレールで学園に帰つていつた。

帰りの電車の中で、一樹はアンナの選んだ水着の事が気になる。やはり彼女が気になるお年頃なのだろう。

「アンナくんはどんな水着を買ったんだい?」

「えへへ、内緒です」

完全なデータムードで二人は学園の寮へ帰つて行つた。

第31話 天使に水着を（後書き）

タイトル由来は映画「天使にラブソングを」より
感想待つてます。

第32話 インシテマス 午前2時のコンタクト

学園に帰つて来た一樹とアンナ。正門を入つたその背後から一夏ペアが帰つて来た。二人とも冬服で行つたので、汗だくでおまけにすごい疲れている。一樹たちの涼しい夏服を見て一夏は指を指した。

「お・お前たち、その涼しそうな服は……」

「Hへへ、どうですかあ？」

「これかい。駅でお前と別れた後に買つたんだ。お前も買いに行けばよかつたのに」

「ずるいなあ、俺たちは汗流して買いに行つたのに。おまけに大玉くらひこともしちまつたし。なあ、シャル」

その話を聞いたシャルロットは顔を赤くして下を向いた。

「あ、あのセー樹。もうボクが女だつていう事はみんな知つているわけだからさ。……一樹もボクのこと・・・シャルつて呼んでいいいよ」

「じゃあそつをせてもらひうよ。よろしくシャル」

2組が寮へ帰つてたその数秒後、正門に汗をダラダラ流して帰つてきた1人の女子がいた。

「あ、今日一日の・・・暑すぎ・・・何だったなんですか・・?」

セシリアだつた。彼女も冬服で街にいたので夏服を買わず、ずっと一樹を追跡して一部始終監視していた。

「セシリ亞、アンタも帰つていたの？」

その後ろに同類がもう一人。首からタオルを下げ汗まみれの鈴が帰つてきた。2人は今日一日の互いの尾行の成果を聞いた。

「鳳さん、どうでしたの？一夏さんたちのほうは？」

「あの一人、一緒に試着室に入つてモゾモゾしてたわ。殴り込んでやろうと思ったら、居合わせた山田先生と千冬さんに一夏達は怒られたけどね」

一夏は旧友とその妹とあつた後、シャルに連れられ一緒に試着室で彼女の選んだ水着の感想を聞かれた。その時、同じように水着を買いに着ていた千冬先生と山田先生に見つかり、正座させられお説教を受けた。今度は鈴は一樹ペアを尾行したセシリ亞に今日の成果を聞いた。一緒に水着と夏の制服を買い、旧友にもいい印象を与える帰りの電車の中でラブラブな空気を聞いた鈴は衝撃を受けた。

「なに！？あの2人そんなにイイとここまで行つているんだつたら、今度の臨海学校での完全にくつこちやうんじやない？」

「そうはさせません！・・・・宣言します！今度の臨海学校でわたくしはアンナさんを逆転させ、大神さんをゲットしてみせますわ！」

鈴の前で大胆に宣言したセシリ亞の野望は実るのか。

臨海学校の前日、1年生全員は荷造りを始めていた。一樹はすでに荷造りを終え、新聞部の部室で『篠ノ之束』に関する資料を見ていた。

「『篠ノ之束』2006年にIISを発明した科学者。一人でIISの基礎理論を考案、実証し、全てのIISのコアを造った天才科学者である。しかしIISを開発したことから政府の監視され、2013年に突如行方をくらませる。失踪後、世界で唯一、コアの製造法を知っているため、現在も各国から追われている』。この人が篠くんのお姉さんか。写真、後ろからしか写ってないなあ。俺の第5世代型開発には強力は協力したって主任は言つてたけど、一度も見てない」

一樹は束の資料をしまい、今度は保管されていた第2回モンドグロッソの記事の乗った学園新聞を見た。

「『織斑千冬 不戦敗！第2回モンドグロッソIIS世界大会で連覇確実だつた織斑選手は、決勝戦数時間前に突如行方不明。試合開始になつても現れず、そのまま不戦敗となつた。不戦敗判定から3時間後、戻ってきた織斑選手はインタビューに関してはノー・コメントだつた』。（これが一夏の言つていた事か。この事件がきっかけでラウラと千冬先生が出会つたんだな。でも一夏の誘拐の事は一言もしゃべつていないみたいだ）」

一夏誘拐事件は公にはなつていない。事実を知るのはラウラと一樹の2人だ。新聞を読み終え棚にしまつた時、ドアから黛が入つて来た。

「ああ～しんどい。あの先生、今回のテスト難しくしてない? どんだけ落とす気なの」

「黛さん、試験お疲れ様です。」

2、3年生はこの時期、期末試験真っただ中。1年生は臨海学校に備え早めの期末試験を終えたのである。黛は椅子にどかっと座りペシを飲み始めた。

「大神くん、明日は臨海学校なんでしょ。今年の1年生はいいわね、男が2人もいるし」

「いやあ、今度は全員水着なのでちよつと恥ずかしいですよ」

女子9割8分の中でも3ヶ月生活している人間が今更何を言つているのか。

「でも大神くん、いいカラダしているからモテるつて評判よ。私の学年でも付き合いたいって言う人が結構いるわ」

上の先輩からもお誘いがあるとは。付き合つなら一夏でもよさそうな気がするが、彼は恋愛に關しては生徒達から「唐変木・オブ・唐変木ズ」と呼ばれているほど鈍感。紳士かつサムライな一樹の方が人気が出てきた。掘られるところ危介と感じた一樹は話をそらした。

「黛さん、この間の学年別トーナメントの新聞、できました?」

「うん、まだ刷つていはないけど。でもデータはパソコンに入つているけど見る?」

「『謎のIHS 再び現る』前回のクラス対抗戦に現れた謎の機体に続き、今大会でも謎の機体が乱入、破壊活動が行われた。謎の機体は鎮圧部隊を返り討ちにした後、アリーナから出ようとしたところを大神一樹選手に倒された。けが人數名でアリーナを4割破壊という被害がでたにもかかわらず、死傷者は0だつた』。（謎の能楽師のこととは書かれてないな。やっぱり見えたのは俺だけか？）」

「すげいよね大神くん。学園の危機を2度も救うなんて、ヒーローみたいね」

「そんな、俺は平和のために精一杯やっただけです」

黛の褒め言葉に一樹は少しテレた。一樹の活躍ぶりは学園のみならず、世界各国の上層部、国家代表操縦者にまで知れ渡っている。

その夜、一樹は能面の力ケラを見たあと、机の引き出しにしまいそのまま寝込んだ。夜中の2時をまわったその時、急にエアコンが止まり室内はみるみる熱気に包まれた。一樹は寝苦しく、暑さで目を覚ましたが、何かおかしい。ベットの上ではない感触がある。すると光が当たられ半径数メートルが見渡された。

「（…）は、一体？」

一樹は何やら木の板の敷き詰めた床の上にいた。暗闇の向こうから誰かが来る。それはトーナメントで見た謎の能楽師だった。

「（あんたはあの時の）」

能楽師はまた独特の口調と低音で話かけた。

「（男・・・よ・・・我の・・・・力・・・を・・・・手放・・・して・・・
は・・・・な・・・ぬ・）」

「我の力？アレの事か？」

「（動き・・・出・・・・す・・・・悪・・・に・・・備え・・・
よ・・・）」

能楽師はそう告げると暗闇の奥にへと消えていった。

「（待つてくれ・・・悪とはなんだ・・・どうして俺に・・・）」

一樹を照らした光が消え、再び暗闇に覆われた直後、一樹は目を覚ました。

「ン・・・夢・・・・か？」

周りを見ると寮の部屋で隣りのベットでは一夏が汗をかきながら眠っていた。そして窓から朝日が入り込んで机を照らしていた。

一樹は起き上がり、昨日寝る前に引き出しに入れておいた能面のカケラを取り出して驚いた。寝る前まで面全体の4分の1しかなかった能面のカケラは、2分の1まで形が出来上がって、禍々しい姿

を表していた。

第32話 インシテマス 午前2時のコンタクト（後書き）

タイトル由来は映画「インシテミル 7日間のデス・ゲーム」より
感想待つてます。

第33話 THE 有頂天旅館（前書き）

またまたまたサクラ大戦キャラを彷彿させる新キャラ登場。

第33話 THE 有頂天旅館

高速道路を走る熱海行きのTBS学園のバス。その中にバスに揺られる一樹の姿があった。一樹は外を眺め、巾着袋から半能面のを取り出しじっと見た。

「（一體あの夢はなんなんだろ？）面も寝る前よりも形が出来ているじ（）」

謎の能楽師の夢を見たあと、不思議に思つた一樹は一応半能面を持つて行く事に。何事もなく無事に終わつてほしいものだ。その時、大声で女子の声がした。

「見て！見て！海よ！海！」

とつあえず今は楽しもうと、半能面を巾着袋にしまつ一樹であった。

バスに揺られること2時間半。1年生を乗せたバスは老舗旅館『超新星』についた。一同がバスから降り、女将とのあいさつが行われた。

「それでは、今日から3日間お世話になる旅館『超新星』で、こちらが女将の米田カオルさんだ。全員、従業員の仕事を増やさないよう注意しろ。」

「諸君、初めてまして。旅館『超新星』の女将、米田カオルだ。この3日間、私の旅館で心身ともに成長する事を期待する！」

「やがておねがいしまーす」

「うむ、今年の一年生も元氣があつてよろしい！それに今年は以外な生徒もいるみたいだしな」

そう言うと一樹と一緒に夏を見るカオルさん。とても威勢のいい女将さんだ（しかも結構若く見える）。ここでカオルさんは大声で誰かを呼んだ。

「トオルく―――ん。こつちいらつしゃいー。」

女将力オルさんに呼ばれて走つてきた少年。大声で呼ばれたその少年の顔は若干赤かった。

「母さん、大きな声出さないでください。恥ずかしいですよ」

「ほら、ここちに来て」のかわい女子高生達にあいをつしなさい」

背中を叩かれて前に出てきたトオル。トオルは実家仕込みの営業スマイルで自己紹介をした。

「えへへ、姫さん、ここにちは。自分は女将の息子の米田トオルです。3日間、どうぞ、ゆっくりと楽しんで、いつていつてください。なお、サプライズな催しもありますのでお楽しみに」

さすが老舗旅館の女将の息子。跡継ぎはとても有望だ。トオルのルックスと真面目な性格をみた女子は・・・・・

「ねえキミ、キミーいくつなのー?」

「14ですけど……」

「えへへへへマジー? 中2なのー? てっきり小学生かと思ったら

」

トオルは童顔なのでよく小学生と間違われる事がしょっちゅうある。女子高生の黄色い声を浴び、トオルは困り顔になつた。これで黄色い声はと止むと彼は思った。が、あまりの可愛げのある困り顔に女子の心はさらにキューンと掴まれ、お持ち帰りしたいと言い始めた。トオルは「仕事があるので失礼します」と言い、旅館へ逃げ込んだ。めどが立つたので、千冬先生はこの後の指示を出した。

「ではこれより、各自荷物を部屋に置いて行け。30分後、海水道具を持つてここへ集合だ」

一同は解散し、女子はトオルを追いかけて旅館の中へ入つて行つた。置いて行かれた男2人は、女将カオルさんに目を付けられた。カオルさんは親しげに一樹の肩を組んだ。

「一樹、久しぶりだな。新聞で見たときは驚いたぞ」

「どうもお久しぶりです、カオルさん」

「大神、女将さんと知り合いなのか?」

「ああ。さつきの童顔少年、あいつ俺の後輩でこの人がお母さんなんだ。中学の合宿のときはよくお世話になつたけど、高校でもお世

話になるとば

一樹から離れ、カオルさんは一夏の方へ近づいた。

「やつちの少年、名は聞いているぞ。織斑一夏くん」

「ああ、どうも。はじめまして」

「堅苦しこあこせつはいこから、もつと楽しもうではないか」

カオルさんは一夏の背中をバンバン叩いた。千冬先生が出てきてカオルさんと少し話をした。

「女将さん、すこません。今年は男がいるので浴室わけがややこしくなつてしまつて」

千冬先生が人前で誤つてているのは初めて。まあこれも社会人の常識だ。でもカオルさんは全然困つていなかつた。むしろ楽しんでいた。
「な～～」。旅館での男女の駆け引きも青春の一部だ。今年はなんだか楽しくなりそうだ。さて腕が鳴るぞ！」

やる氣満々で旅館に戻つていったカオル。なんだか豪快な女将さんといふことが一夏の脳に焼き付いた。

一樹と一夏の部屋割りは寮と同じ同室。まあ無難だな。室内もさす

が老舗旅館と言つ」とあつて悪くない。どつてもイイ部屋だ。

「あの人いろんな意味でスゴイ人だな」

「中学の剣道の合宿の人と手合わせしたとき、手加減ナシでボコボコにされたことがあるんだ。今思い出ただけでも恐ろしいよ」

全国剣道大会の優勝者の筹を負かした一樹を負かすとは。もしかしたら千冬先生に匹敵する強さなのかもしない。突然ふすまが開き、トオルが逃げ込んできた。

「先輩、助けてください！女子が僕を追つて来るんです！」

廊下からトオルを追いかける女子の声が。

「何処にいったの～～～～トオル～～～～ん」

「あたしたちと海いきましょ～～う」

このままでは見つかる。中学時代、女子にいじられるとそれはもう・・・いろんな意味で・・・ホントに・・・とにかく一樹はトオルをかくまう」と。

「とりあえず押入れの中へ隠れろ」

トオルを隠し、タッチの差で女子が一樹の部屋に入ってきた。彼女達はプレデターのようにトオルを探した。

「大神くん、織斑くん、トオルくんは来ていない？」

「いや、知らない」

「俺も」

2人の証言を聞き、女子達は部屋を出て行つた。もうすぐ集合時間だ。一樹は自分達が海へ行くまではここで隠れていろと言い残し、海水道具を持つて一夏と一緒に旅館の玄関へ行つた。

第33話 THE 有頂天旅館（後書き）

タイトル由来は映画「THE 有頂天ホテル」より

第3・4話 オーシャンズ11 ヒーチ・ロワイヤル（前書き）

お待ちかねの臨海学校篇スタート。やや妄想爆発気味ですが、最後までお楽しみください。

第34話 オーシャンズ11 ビーチ・ロワイアル

午前11時。強い日差し、青い海、遠くまで行き渡る砂浜。IS学園1年生御一行は熱海の海岸へ来た。女子が海、砂浜でキャイキャイ楽しんでいるそばで一樹はビーチパラソルの下で、スポーツドリンクを飲みながら女子たちの水着を鑑賞していた。

「大神さん。どうですか、アンナの水着は？」

横を振り向くとランチセットを持つた水着姿のアンナが。彼女の水着は、胸元にリボンの付いた赤いワンピース水着にパークーを着て麦わらぼうしをかぶっていた（絵がなくてごめんなさい）。ちなみに一樹の買った水着は、船の錨のマークが点々と入ったトランクス水着である。

「う・・・うん。すごい・・・似合って・・・いるよ・・・」

アンナのスタイルは平均以上で、やや大きめな胸に露出した綺麗な太腿の水着姿の彼女に一樹は見とれ、手に持っていたスポーツドリンクを全部こぼしてしまった。アンナは一樹いるのビーチパラソルの中へ入つて行つた。その様子を見ていた一夏もアンナの水着姿に見とれ、鈴そっちのけで見ていた。

「ちょっと一夏!どこ見てんのよ!」

嫉妬した鈴に蹴られて、砂に埋もれた一夏。口に入った砂を吐き出したその様子を見ていた一樹は気の毒に思つた。女子3人組が来て、大神とアンナを遊びの誘いに来た。承諾してアンナとパラソルから出ようとしたとき気品あふれる声がした。

「大神さん、ちょっとといいかしら？」

横のビー・チバラソルにセシリアが。隣りは彼女のマイビー・チバラソルだった。セシリアはうつ伏せに寝て、ビキニの上の紐をほどいた。

「大神さん、サンオイルを塗つてください？」

「あ、ああ。俺でよければいいよ」

セシリアの体は巨乳グラビアアイドル級でなかなかのものだ。一樹は心臓をドキドキさせながら、セシリアの後ろ側をサンオイルで塗つた。彼女の背中一面が塗られ、それを見ていた見物者の、3人組みまでドキドキしてきた。

「よ、よし。背中は塗り終わつたよ・・・」

「ま、まだですわ。手の届かない所は全部・・・足と・・・その、お尻も・・・」

何たること！お、お尻も！？ここまで大胆に誘惑する16歳、まあいい。これがセシリアの立てた一樹落とし作戦なのだ。一樹はどうしようか迷つた。

「（フフ、これで大神さんは私に惹かれるハズ・・・）」

自分のボディを利用した完璧な作戦。が、彼女はミスを犯した。それは計画に異分子の存在を計算に入れてなかつたことだ。その異分子とは・・・

「はいはい、はい！私交代します。見ていたらおもじろやうです」

アンナだつた。アンナは容器を取つてオイルを手に塗り、セシリアの体に塗りたぐつた。太腿、ふくらはぎ、足首、そしてお尻にまで・・・。

「あんつ！ いやんつ！ わたくしは大神さんにやつてもらいたいのに・・・」

「ほりほり、おとなしくしてくだれこつて！」

セシリアの体にはオイルがまんべんなく塗られ、その絵はとつてもエロかつた。さすがのセシリアも怒つてアンナに怒鳴つた。見ていた女子3人組が、なんかセシリアの体がにおつ事に気づいた。

「ねえ、ちょっと。なんかにおわない？」

「え・・・そう？」

「ホントだ・・・なんか、甘いにおいがあるぞ」

一樹も気づいた。疑問に思った一樹は、アンナがセシリアに塗つたオイルの容器をとつて見た。その容器を、恐る恐るアンナに見せて確認した。

「ア、アンナくん・・・セ、セシリアくんに塗つたのつてもしかして・・・コレ？」

「あ。これ、サンオイルじゃなくてハチミツですね」

「…………」

セシリ亞はガバッと起き上がり、全身の匂いがをかいだ。体から甘いにおいが放たれ、今にもカブトムシが寄つてきそう。アンナはサンオイルと間違えて、ランチでサンドウイッチに挟むハチミツをセシリ亞に塗つてしまつたのだ。

「い・・・い・・・・・いやあ――――――氣持ち悪い――――――」

セシリ亞は胸を腕で隠しながら、シャワールームへで全力で走つていつた。

「あらら。アンナ、またやつちやいましたあ」

「コケたポーズをしたアンナ。」（）してセシリ亞の『一樹落とし作戦』はアンナのド天然によつて失敗した。鈴と一夏も一部始終を見ていたが、さすがの2人もセシリ亞にちょっと同情。

「うわ～～悲惨ね、セシリ亞……」

「全身にハチミツ塗られるなんて、昔のバラエティ番組みたいだな・・・（しかしセシリ亞の胸、結構テカかつたな・・・・・・）」

「アンナくん、後でちゃんと謝つとくんだよ。いいかい（でもセシリ亞くん・・イイ体だつたな）」

走つて逃げていくセシリ亞の胸は大きく揺れていて、男達にはとても目の保養になつた。すると後ろからシャルの声がした。

「一樹、ここにいたんだ」

「おひ、シャ…………隣りにいるミイラはなんだ？」

シャルの隣りにはバスタオルをグルグル巻きにした人物がいた。よく見ると見覚えのある眼帯が。間違いなくラウラだ。

「ほら、一樹にを見せたら。大丈夫だよ」

「だ、大丈夫かどうかは私が決めるわ」

そうは言つても、彼女にとつては、ビーチに来ていて今更見せたくないとも言えない状況だ。

「ラウラ、せっかくの海なんだし、顔見せて俺たちと遊ぼう」

「ま、待て。わ、私にも心の準備といつものが……」

モジモジしてラウラは一向にバスタオルを取らない。ここでも彼女の本領が炸裂。

「ラウラさん。タオルなんて早くとっちゃいましょうか？」

「うわあ～～！何をする！」

アンナはラウラを巻いていたタオルを掴み、全部剥ぎ取つてしまつた。バスタオルの下には水着姿のラウラが。ラウラの水着は彼女の小さい体に合つた紫色の可愛らしい水着だ。

「うう・・・わ、笑いたければ笑え」

「キヤー――。ラウラさん、とってもカワイイです!」

「ああ、カワイイぞ。ラウラ」

ラウラの中の何かに電撃がビリビリッと走った。

「（カワイイ・・・カワイイ・・・私・・・カワイイのか・・・）」

自分に自身がついたのはいいが、一樹のカワイイの言葉にポワ～んとしているラウラ。一夏と鈴がスイカと棒を持って来た。

「なあ、大神。これでスイカ割りでもしようぜ」

「お、いいね。みんなでやるか、スイカ割り」

男に恋心を寄せる乙女の戦いは続く。

第34話 オーシャンズ11 ピーチ・ロワイアル（後書き）

タイトル由来は映画「オーシャンズ11」 + 「007 カジノ・ロワイアル」より

ちなみに「オーシャンズ11」のオーシャンは「海」という意味ではなく、映画の登場人物の「ダニエル・オーシャン」のという意味。

ここでは作者の都合により、2週間の休載をいただきます。気長にお待ちください。

（2011年9月3日）

第35話 驚いてはいけない旅館（前書き）

いつもお久しぶりです。長旅から無事帰還し、執筆再開です。

第35話 驚いてはいけない旅館

PM6：00。海でのバカンスを終え、旅館『超新星』に戻つてき
た1年御一行は豪華な露天風呂、懐石料理を堪能していた。

「美味ぞ、この赤身」

「Jのサザエもイイ味だ」

海の幸をがつつく男達。一樹、一夏のワサビを刺身にのせて食べる
のを見て、シャルも見よが見まねでトライ。皿に盛られたワサビ全
部を口へ運んだ。

「あ～ん・・・・・・んつんんんんん！」

「シャル大丈夫か！」

「だ、だいじょうぶ・・・風味があつていいね・・・」

慌てて水を飲み干すシャル。涙目になつても彼女は体裁を保とうと
自然を振舞おうとした。その横でもう一人ワサビのみを食べ続ける
者がいた。

「大神さん、コレがワサビっていうんですね。ツーンとしておいし
いです」

ワサビまるまる1分本食べたアンナ。どうしち 「なんだらいかわ
らない。

「アンナくん、それは刺身と一緒に食べるもので生じやちょっと…
…。アンナくん。はいあ～ん」

一樹はアンナにワサビの正しい食べ方を教え、彼女の刺身にワサビをのせアンナの口へよそつてあげた。その様子を見て、隣りに座つて足を痺らせたセシリアも一樹におねだりをした。

「お、大神さん、わたくし足が痺れて動けませんの。もしよろしければよそつてくださいなー？」

「いいよ。はいあ～ん」

「あ～～～～～セシリアするー！」

「大神くんによそつてもううなんて、卑怯者ー！」

「な、なんでわたくしじだけ責められますの？アンナさんだつて…」

「

セシリ亞にブーイングを飛ばす女子達。宴会場全体が騒ぎ始めた。するとふすまが開き千冬先生に怒鳴られた。一喝を入れられた食堂は静けさを取り戻した。

「お、おほほほ。怒られてしましましたわね」

「ああ、すまないセシリアくん。『飯おかわりしてください』

一樹は立ち上がり、「『飯をよそいに行くとき会所へ引きずり込まれた。一方アンナは食後のデザートをパクパク食べていた。

「ん～～～～」のプリンおいしそう

「ちょっとアンナ、食べ放題だからって食べ過ぎだよ

と、そこへ、飯をよそつてきた一樹が戻ってきた。

「大神さん、遅かったですわね」

「ちょっとね。セシリアくん後で俺の部屋に来てくれるかい」

それってまさか。セシリアはすぐにOKしてテンションがグーンと上がった。このとき彼女は知らなかつた。これから始まる恐ろしい事に。

PM7：30。豪華料理を食べた後、各部屋ではトランプ、ウノ、花札、人生ゲームなど修学旅行のムードがあふれてい。しかしある人物を覗いては。

「大神さんがわたくしを部屋に呼ぶなんて……。これはきっと殿方との……」

セシリ亞だつた。一樹に呼ばれて同室の他の女子を出し抜いて一人、彼の部屋へと行く彼女はルンルン気分だつた。一樹の部屋は寮と同じ一夏と同室だ。部屋に着き、ふすまを開けて中に入る。

「大神さん、セシリ亞・オルコットですわ。入りますわよ

おしとやかに振舞い部屋の中へ入つていく。しかし中は電気がついておらず、真っ暗闇の部屋だった。

「あら、真っ暗。・・・キャつ」

急にふすまが閉じ、真っ暗な部屋に閉じ込められたセシリ亞。明かりも何もない空間でセシリ亞は戸惑うばかりであった。すると後ろに何かがいる気配がして振り向くと血まみれナイフをもつた人間が下から照らされていた。その風貌はイギリスの殺人鬼『切り裂きジャック』そのものだつた。

「いやあ――――――、ジャック・ザ・リッパー――――――！」

世界的に有名な殺人鬼のいわく付きの国の生まれであるセシリ亞は腰を抜かした。その時電気がつき、押入れから出てきた鈴が寄つて來た。

「あつはははは。大成功！いい絵もーらいつと」

「鈴さん！？なぜここにー？」

「大丈夫か、セシリ亞」

切り裂きジャックの正体は変装した一夏だつた。鈴は写真を撮り、腰を抜かしたセシリ亞を起こす一夏。鈴のイタズラにまんまとひつかつたセシリ亞は、半ベソをかいていた。その時、ふすまに一樹、アンナ、筹备、シャル、ラウラそして女将、米田カオルが立つていた。

「あら～セシリ亞さん、どうじゅちやつたんですか。ベソかいてますよ」

「お前にも苦手なものはあるのだな」

「完璧に見えて以外と怖がりなんだね」

「情けないな」

「ち、違いますわ。これは不意をつかれただけですわ」

必死で言い訳するセシリ亞をみんなでイジリ回した。イジリ回した所で本題に入り全員部屋に座った。ここに集められたのは8人は、全て一樹に呼ばれた者達であった。食事の時、女将力オルに呼べて、「特別肝試しをやるから友達をつれてこい」と言わされて、一樹はこの7人を呼んだのだ。

「さて、全員集まつたところで。カオルさんお願いします」

「ふふふふ。君たち、そんなちゃつちい物よりも8人で恐怖感のある体験をしてみる気はないか？」

女将力オルの持ちかけた企画。それは夏の定番、肝試しだった。ルールは2人1組でこの旅館の裏にあるお堂へ清めの塩を盛りに行き、そこで写真を撮つて帰つて来るというもの。持ち物はペンライト、清めの塩、デジカメの3つのみと、幽霊に対してはある意味頼りになる物だ。組み合わせはくじ引きで、引いたくじに書かれている番号が同じ者がペアとなり、行く順番もその番号となる。結果は

3番 アンナ・シャル

4番 一樹・セシリ亞

となつた。

「あ～ん、一夏と一緒にがよかつたのに～～」

「（くつ、私も一夏とがよかつたのに。なぜこのよつなじやじや馬と・・・）」

「シャルさんと一緒に夜道を歩けるなんて。アンナ大感激です」「いや、アンナ。夜道といつてもオバケが出る道だよ」

「大神の親友の背中は私が守る」

「いや、楽しく行」

「それ、それが歓喜、不満、不安を述べる中、運が向いてきた者がいた。
「（や、やりましたわ。ここへ来てわたくしにも運が向いてきましたわね。これで大神さんに一気に近づくチャンスですわ）」

時間は30分後、ジャージに着替えて玄関口に集合。このとき8人は知らなかつた。世にも恐ろしい出来事に遭遇することになることを。

一刻一刻と迫る恐怖の時間を持つ。とそこへカオルが、
体の頭につける三角の布 白装束にでやつて来た。

「全員来たか。じゃあ早速はじめよう。言つとくが脅かす側もガチ
だから、半端な気持ちで行かないほうがいいぞ」

カオルの脅しをかけられた8人は急に静かになつた。トップバッタ
ー、筈・鈴ペアにペンライト・清めの塩・デジカメがの3点が支給
される。そして筈・鈴はカオルに誘われて旅館の裏へと歩いて行つ
た。待たされる残りの6人は、ポツンとうす暗い玄関口に待たされ
る。この待つている間の空間が、もう既に肝試しが始まつていてるよ
うな感じであつた。

「日本の肝試しつてどんなものなの？」

「ハロウインみたいなのは期待しない方がいいぞ。日本のホラーは
世界一だからな」

キヤ――――――――――――

早速2人の悲鳴が悲鳴が聞こえてきた。その声を聞いてビクンつと
驚く6人。さらに2回、3回と聞こえてくる悲鳴に、じわりじわり
と与えられる恐怖に背筋が凍つてきた。20分後、戻ってきた筈・
鈴にはとてつもない疲労感と冷や汗をかいていた。

「これは・・・キツイぞ」

「こんな脅かし方今までにないわよー」

一体なにがあつたのか。次に行く一夏・ラウラペアの口数が減つて

いた。さすがのハウリも緊張しているのか、顔が引きつっていた。

第35話 驚いてはいけない旅館（後書き）

タイトル由来はTV番組「ダウンタウンのガキの使いやあらへんで」
「！」内の「笑ってはいけないシリーズ」より

第36話 遠かれたお堂（前書き）

自分自身は怖いモノが超苦手ですが、自分なりのホラーティストに仕上げてみました。

第三六話 遠すけたお堂

「うああああああああああああああああああつー。」

山から一夏とラウラのスクリーム（叫び）が聞こえてくる。既に終了した簞・鈴ペアは、下を向いてグッタリしていた。

「わたし、急に帰くなつてやめました。禁られたことないですよ。」
「ね？」

さつきまで明るかつたアンナが、不安な表情で落ち着かない素振りを見せた。21世紀の科学の時代でも、いつの時代もオバケとは怖いものだ。

「なあ、もう引き返さないか。これ以上進むのはムリだ」

「そりは言つてもなあ。お堂に塩盛つて、写真撮りなきや示しがつかないや」

一夏とラウラはお堂の手前まで来ていた。ここまで何回も驚き、首すじが痛い。不気味に光るかがり火の照らすお堂へ入つていった。数分後、その中からとてつもない叫びが、数十メートル離れた、一樹の所まで響いた。

一夏・ラウラペアが真っ青な顔で帰ってきたあと、3番手のアンナ・シャルペアも行って帰って来た。その顔は2人とも泣き顔で、アンナは一樹に抱きついた。カオルに呼ばれ、いよいよ一樹・セシリアペアの番だ。ここまでウキウキ気分だったセシリアは、待ち時間に聞いた叫びと帰ってきた者の顔を見て、無口になっていた。

「最後は一樹ペアだな。来い」

「あ、行こう。セシリアくん」

「ま、待ってください。まだ心の準備が・・・」

一樹は怖がるセシリアの手を引いて、旅館の外へ出た。カオルに連れられて、案内された所は旅館の裏側の林道。見るからに出そうな霧囲気^{ムード}で、前3組の悲鳴を聞いた一樹もセシリアも部屋に帰りたい気分だった。

「じゃあこれを。健闘を祈る!」

威風堂堂に立つカオルからペンライト、清めの塩、カメラを受け取り2人は真っ暗闇の林道へ足を踏み入れていった。

林道は一本道でちゃんと整備されて歩けないことはないが、明かりがいっさい無くライトが消えたらオシマイだ。しかも不気味なほど

静まりかえつて、たまに吹くそよ風が揺らす草木が2人の恐怖心を仰ぐ。

「セシリアくん、大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫ですわ。わたくしを誰と思って？」

強がりを言つている割に、一樹にひつ付いているセシリア。イギリス代表候補生は怖がりのレッテルを貼られないようにとしているもの、怖いものは怖い。その時、急に後ろから冷却ガスをかけられた。

「キヤー…………ツ…………」

バラエティ番組でよくある光景だが、こんな場所でやられるのは絶対怖いし、心臓にすごく悪い。まだ始まって5分も経っていないのに、セシリアは既にギブ寸前だ。

「・・・本当に大丈夫かい？」

彼女は無言で首を縦に振り、2人はさらに暗い林道を歩いて行った。夜、森、肝試し、男女、この要素はホラー映画に欠かせない要素。そう、今まさにこのホラー映画にありがちなシチュエーションは、2人から徐々に平常心を奪つていった。

10m間に驚かされながらもスタートから50m地点に差し掛かつた時、矢印の書かれた看板がありその先の石段を一段、一段ゆつ

くじと登つて行つた。さすがに階段で脅かしはないと想い、2人は一瞬氣を緩めた。ここまで大声を上げることが少なかつた一樹を見て、セシリ亞は男のたくましさを感じていた。

「ここで刺客はないだろ？ 一歩間違えば転落してしまうからね」

「大神さんは、怖くないのですか？」

「いや、俺もすつしぐ怖いんだ。でもセシリ亞くんを守るためならそんなのどうつてことないよ」

「い、いやですわ。こんな時にそんな話しないでくださいまし・・・
キヤーーっ！」

氣の緩んでいる2人の上から空き缶が落ちて來た。地味とはいえ油断していた一樹もこれにはビックリした。石段をのぼり、さらに恐怖は続いた。

数十メートル歩くと、分岐点のお堂が見えて來た。怖さを引き立てるかがり火が、辺りをゆらゆら照らしていた。お堂前の広い敷地に足を踏み入れたとき、大声がした。

「たたりじやあ～～～～～～～～～～～～～～

横を向くと、カオルの娘でトオルの妹のナナが白装束に懐中電灯を頭にくくりつけ、両手に刀とピストルを持って走つて來た。モチーフはおそらく八つ墓村なのだが、作中の様に恐怖感は無く、ナナは2人の周りをグルグル回つて「たたりじやあ～」を言いながら、刀を振り回し、ピストルを撃ちまくつた。八つ墓村を知る一樹はそんなに怖くはなかつたが、セシリ亞はキヤーキヤー叫んだ。

「やつはかみようじんのたたりじやあ~~~~~」

ナナが去ったあと、セシリ亞は叫び終えて息を切らしていた。彼女が落ち着いたところで、2人はうす暗いお堂へ入って行つた。中を照らしているのはロウソクのみで、ロウソクの照らす室内が普通じやない空気を醸^{かも}し出す。

「怖いなあ~~。脅かされる以前に、この空気が怖いよ」

「大神さん。わ、わたくし、もつ限界ですわ・・・」

「大丈夫だよ。口々で2つの任務をやればあとは来た道を戻るだけだ。しかし、ここはお寺というより何かの稽古場みたいだな。」

セシリ亞のメンタルも限界だ。さつきのナナの八つ墓村の件で彼女の精神力は大幅に削られた。お堂の入口ははまるで能舞台のような造りで、中は武道ができる畳張りのスペースに、周りには仏像があつた。その中の一つの仏像のそばに「ここで塩を使え」と赤い字で書かれた看板があり、テーブルの上には前のペアが盛つていた塩の皿があつた。

「え~っと、ここに塩を盛つてと・・・」

「ま、ま、待つてください。こ、こ、こはわたくしにお任せを」

セシリ亞は心が満身創痍にもかかわらず仏像に塩を供えた。ここで仏像が動くというのがセオリーだが、一樹達の「動いてほしくない」という願いが叶つたのか、仏像は動かず何も起きなかつた。反対側に掛けてあつた掛け軸横の看板には「カメラを使え」と赤い字で書かれていていた。この掛け軸を撮れということなのか。一樹がデジ

カメで「輝き」と書かれた掛け軸を撮ろうとした瞬間、掛け軸が上へ勢い良く上がり、裏から斧を持った男が現れた。

「お密さんだよおおおおおお

「うわああああああああああああああ！」

シャイニングのジャック・ニコルソン風の男が出てきてこれには一樹も驚き、セシリ亞を連れて逃げ出した。すると塩を供えた仏像が動きだして2人の行く手を遮^{さえぎ}つた。セシリ亞は恐怖のあまり、腰を抜かしてその場にペタンと座り大泣きしてしまった。

「いやあああ！・・もづ・・・イヤですわあ！・・・こんなことお！・・・」

セシリ亞が腰を抜かしたことを気づいた一樹は彼女の元へ駆け寄り、背中を差し出した。

「セシリ亞くん、早く逃げよう。俺の背中に乗るんだ！」

「ぐすり・・・大神さん・・・早く逃げましようよお

泣きじゃくるセシリ亞をおぶさり、お堂から外へ出た。お堂前の広い敷地に出て、振り向くとお堂の中からニコルソン風の男以外にも周りからジョイソン、フレディ、チャッキー、レザー・フェイスなどの殺人鬼から、貞子、伽椰子^{かやこ}などの怨霊、さらに入間大の目玉のおやじ（？）など古今東西の怖いものばかりが出てきて、もう何がなんだかわからなかつた。一樹はセシリ亞をおぶさつて、後ろから追つてくる怖い者を振り返らず、とにかく走つた。

第36話 遠すぎたお堂（後書き）

タイトル由来は映画「遠すぎた橋」より。
後々気づいたのですが外国のホラー映画って殺人鬼やモンスター系
が主で怨霊系ってないんですね。あつても見たくはないです。

第37話 タタミネーター2（前書き）

肝試し後の就寝における出来事です

第37話 タタミネーター2

「ひっく・・・大神さん、怖かつたですう・・・」

「わたくし・・・もう・・・怖くて死にそつですわ」

アンナとセシリ亞は終了しても泣いていて、一樹に抱きついていた。やつぱり女の子で怖いものはやつぱり怖いのだ。

「あんた・・・いい身分ね・・・」

「そんな・・・鈴、誤解だよ」

それを見ていた鈴はふてくされた。

一同が部屋に帰った時は10時を回っていた。一樹と一夏は布団を出して寝る準備をしていた。その前にアンナとセシリ亞を部屋に送つていったあと、スケキヨかと思いまやバックをした山田先生に驚いたことはあまり知られていない。

「はあ・・・今日は疲れたよ」

「さうだな。おやすみ」

「早いといい寝よう。もうすぐ消灯時間だ」

2人は布団を敷くと、よほど疲れたのか5分もからないうちに寝てしまった。

「・・・さん・・大神さん・・・」

一樹を呼ぶ声、誰か枕元にいる。その呼び声に応え静かにまぶたを開くと、そこにはマクラを持ったセシリ亞がいた。

「・・・ん・・・セ、セシリ亞くん！？何しているんだ

「大神さん、わたくし怖くて眠れませんの。一緒に寝てくださらない？」

「待ってくれ・・・こんな所・・見られたらマズイよ・・・」

セシリ亞は布団をめくり、中に入ってきた。マズイ、これじゃあ不純異性交遊が成立してしまう。特にセシリ亞はイギリスの代表候補生。こんな不祥事が起きたらどんな処分がされるかわからない。場合によつてはイギリスの機関に抹殺ターミネートされるかもしれない。

「何をしている・・・」

「あんた、また抜けかけ！？」

「卑怯な真似を・・・大神は私の嫁だ」

「これは・・・そう・・・寝癖でここまで来てしまったのですのー。(ちつ、もつ少しでしたのに)」

部屋の入口に篠、鈴、シャル、ラウラ、アンナがビーフジャーキーの天狗^{てんぐ}のような顔で、こちらを睨んでいた。

「大神さん! 私との関係は遊びだったのですね!」

「一樹とアンナってそういう関係だったの」

アンナのせいで話がややこしくなってきた。このままではイギリスの機関より、先にこの人達に抹殺^{ターミネート}される。5人の後ろに黒い影が。

「ひひひ、何をしている! さつと部屋に戻れ、馬鹿ども!」

千冬先生が般若^{ターミネート}のような顔でこちらを睨んでいた。先生のおかげでこの事態は終息された。怒鳴られた女子6人は慌てて自室へ帰つて行き、千冬先生は一樹の布団から出て部屋に戻るセシリ亞の尻を叩いた。こんな騒ぎにも目を覚まさず、隣りでは一夏がグース力寝ていた。

再び眠りに入り、一体どれくらい時間が経つたのか。寝返りをうつた時、畳を踏みしめ何かいる気配を感じて一樹は目を覚ました。またセシリ亞が来たのかと思った。だが・・・

「セシリ亞くんか？」

「…………闇が…………迫…………る…………」

スローで超低音な声、セシリ亞じゃない。この声、どこかで。上を向くと、あのアリーナでやられそうになつた時、そして臨海学校の前日の夢に出てきた能楽師がいた。一樹は動こうとも口は動くのには体は動かない。金縛りだ。

「闇…………は…………」の…………だけ…………は…………すまぬ…………」

「闇とは・あの脇侍のことか?・」

「あれは……雑兵に……過……ぎな……い……。そ……の……上の……闇……が……お……前に……くる。そ……い……つ……て……そ……の……面を……使……え……」

何を言つているのか一樹にはわからなかつた。能楽師が言つ闇とは何なのか、能楽師の正体は何者なのかわからぬことだらけであつた。その言葉を聞いた時一樹は再び眠りにつき、次に起きたときはもう朝だった。

一樹は朝食を食べに一夏と食堂へいく渡り廊下と途中で地面をじつと見ている筈を見つけた。

「おはよう、簫くん。何しているんだい？」

一樹と一夏が簫の見つめる視線を見てみるとそこには、地面からウサギの耳のように生えた物体と、『ひっぱってください』とマジックで書かれた汚い看板があつた。

「なあ、簫……」れつてもしかして・・

「知らん、私に聞くな」

簫はそのまま無視して行ってしまった。簫と一夏は何か知っているようだったが、一樹はその物体と周りを疑う。これがあの能楽師が言っていたものなのか、そうは見えない。むしろ巧妙な罠なのか、純粋なイタズラなのか、選択の余地はなかつた。

「一夏、とりあえず引っ張つてみてくれ」

「え〜。イヤな予感はバシバシするんだけどなあ」

一夏は渋々ながらも、ウサギの耳のような物体を掴み、勢い良く引つ張った。でも耳の下には何もなかく、一夏は尻もちを付いた。
・・・・・ 何も起きない。やつぱりイタズラだつたみたいだ。一樹はホツと一息いれた。すると空を見ると何か落ちてくる。その物体は一夏の目の前に落ちて一樹は衝撃でふつ飛ばされた。落ちてきた物はニンジンの形をした口ケツトのようなもので、それが縦に二つに割れ、中に動くものが見えた。

「ひつかつたね〜いつくん。ブイ、ブイ」

人だ。紫の髪にさつきのウサギの耳をつけた女の人が出てきた。

「お、お久しぶりです・・・束さん」

「うんうん、おひさだね～。といひでこつくん、篠ちゃんど、第5世代持ちの2人はどこかな?」

「え～っと」

「ま、いいや。また後で、じゃあね～～～」

一夏の返答を聞くまでもなく、ウサギ耳の女の人は立ち去つていった。彼女が去つて行つたあと、ふつ飛ばされた一樹は起き上がりつゝ土を払つた。

「いててて。なんだつたんだあの人」

「篠ノ之束さん。篠の姉さんだ」

第37話 タタミネーター2（後書き）

タイトル由来は映画「ターミネーター2」より
セシリアの一樹の布団への忍びは、「サクラ大戦2」第5話のす
みれの抜けかけのオマージュ。

第38話 束の異常な愛情 もたは私は如何にして心配するのを止めてヒリを離

タイトルは長いフルネームです。

第38話 束の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めてトロを離

朝食を食べ終え千冬先生に呼ばれて一樹他、専用機持ち7人はIS-Sースに着替え人目のつかない海岸の広い岩場に集められた。が、何故か専用機を持たない篠もその場にいた。

「アンナさんのIS-Sースも、わたくし達のとは随分違いますわね」

「ホントね。第5世代型のはみんなそんなカンジみたいね」

アンナのIS-Sースは全身タイツのインナースースに太もも半分までのロングブーツ、胴には6つの銀ボタンの赤いジャケットのスースだつた。しかも肩には一樹のと同じコネクターがついていた。第5世代のIS-Sースを観察しているところで千冬先生が来た。

「よし、専用機持ちは全員揃つたな」

「ちょっと待つてください。篠は専用機持つてないでしょ?」

確かに篠は代表候補生でもないし専用機は持つていない。それは一樹も一夏もアンナも同じなのだが、3人の場合は特例ということで専用機をもつことが認められている。そんな篠がなぜここに呼ばれたのか。

「私から説明しよう。実は・・・・・」

遠くから何やら声がして、篠と千冬先生は声を聞くと顔をしかめた。後ろを見ると人が崖を走り降りている。岩から大ジャンプ、空へ舞い上がった。それは一夏が篠ノ之束と呼んでいた人だった。束

は千冬先生に抱きついて来たが、先生は紙一重でかわし迫る束の顔を掴んだ。

「やー やー、ちーちゃん会いたかったよー。 もーゲハグしちゃう、愛を確かめ、むぎゅーー」

「うぬせこべ、束」

束は今度は妹の笄に近づき、彼女の胸を触ろうとしたが笄は実の姉を容赦なく木刀で殴った。あまりの姉妹劇に一同はあ然としていて棒立ちしていた。

「おー束、自己紹介からし」

「えー面倒くさいなー。私が天才の束さんだよー。ハロー、終わりー」

「あの人俺や世界中のIISを造ったの・・か?」

篠ノ之束。IISの開発者にして、IISの基礎理論を考案、実証し、467機+1機（一樹機）のコアを造った自他共に認める天才科学者だが、そうは見えない。しかし、各国から追われている逃亡の身の者がなぜここにいるのか。

「さあ大空をぞ」覧あれ

そう言つと、空からリピュタの飛行石のようなひし形の物体が降つてきた。

「ジャジャーン。」これぞ笄ちゃん専用機こと、紅椿）。第5世代移

行型 IIS を純製第4世代型 IIS として開発した束さんお手製の機体
だよ～」

ひし形が、紅色の IIS に ^{トランسفォーム} 変形した。これが紅椿。一樹、アンナの
第5世代型よりも1世代下だが、この紅椿は正式な第4世代型だ（
白式も名田は第4世代だが、事実上は第3世代）。まだ各国が第3
世代型の試験段階にあるのに、これ以上の世代 IIS が出たら国際 I
S 委員会がなんて言うかわからない。ここでシャルが質問した。

「一つ質問があります。第5世代移行型 IIS とは何ですか？」

「私が説明する。大神、フォンティースの第5世代型を見た各国は
自國の配備されている IIS を無理矢理第5世代にシフトしようとい
う無謀な計画を考えた。ノープランだから当然、全て失敗。機体も
いくつかは破棄された」

「そこでわつたしい、天才束さんがカワワイイ妹の為におじやんした
機体で純製第4世代型をつくつたつてわけ。じゃあ篠ちゃん、セッ
ティングをするから乗つてね～」

篠は新しい IIS スーツに着替え、紅椿に乗り込み束はセッティン
グを開始した。ピピピとなる電子音、束は紅椿と篠の同期をスゴイ
速さでキーボードを打ち込んだ。セッティング終了。その時間2分、
通常は3人がかりで15分をかかるセッティングを一人でやるとは。
天才科学者というのはまんざらウソではないようだ。

「セッティング終了～さっすが私の。じゃあ試運転も兼ねて飛んで
みてよ」

「ええ。では試してみます」

筈は機体に念を込めるように刃をつぶり、次の瞬間すゞこ速さで空へ飛んだ。あつという間に上空100mまで上昇した筈は4、5回旋回させた。機動性も第5世代を除く従来のISよりも遙かに上だ。

「なにこれ、早い」

「一樹の機体と同じくらい早い。これが第4世代の加速・・」

「じゃあ刀使ってみてよ。右のが雨月で左のが空裂ね

筈は空中で停止、ホバリング状態にして一刃を抜いた。まずは右の雨月で突き。すると雨月からレーザーを放出され、そのレーザーは雲を晴らした。次に束は量子化していた小型の広域防空用地対空ミサイル、通称・パトリオットミサイル8発を筈に向けて発射した。筈は焦ることなく、左の空裂を振りエネルギー刃の斬撃を飛ばし、8発全てのミサイルを撃墜した。

「やめな・・・

「すげえ・・・

「やれるーーの紅椿ならつー・

一同は第4世代型の性能に見とれていて瞬きすむ間もなかつた。試運転を終えた筈は降りてきた。その顔は満足そうな笑顔であふれていた。

「いいね、いいね～ウフウフフ～。じゃあ次、アンナちゃん。エヴァンジル出して～。」

「あ、はい。いきますよお～」

アンナはロザリオ状に待機していたエヴァンジルを展開、赤色の機体に十字架がペイントされた機体が姿を表した。第5世代型IS：エヴァンジルも光武と同じように機体から伸びたコードが搭乗者のスースのコネクターに接続されているという形だ。主力装備は右腕に取り付けられた対IS用可変銃身式20mmガトリングのみ。可変銃身式とは使用時には銃身が伸び、不使用時には銃身が縮んで安全状態になる武器だ。ちなみにこの20mmガトリングは光武の二刀『銀狼』、『白狼』と同じで量子化出来ない。

「今度はアンナちゃんの機体に新装備を追加するよ～」

束は今度はエヴァンジルにコードを繋ぎ、武器のデータを送った。また高速でキーボードを叩き、スピーディ速さでエヴァンジルの装備を変換、追加させた。

「転送完了！バージョンアップするね～」

次の瞬間、エヴァンジルのスラスターが、翼をイメージしたウイングスラスターに変わり、新武装の対IS用120mm砲ライフル、対IS用12・7mm機銃、対IS用7・62mmマシンガンが加わり、その姿はまさにワルキューレ。ちなみに120mm砲は戦車の主砲に使う弾で、それをどうやってライフルに改造できたのかは

謎である。

「最後に一樹くん、ちょっと光武をいじりせてもいいよ~~~」

一樹は言われるままに光武を展開し、束は一樹の光武を調べ始めた。束が作業をしている時、一樹が束に質問した。

「篠ノ之博士。俺とアンナくん、2人の第5世代型IISを開発したのはあなたですか?」

「そだよ、すみれ会長とシスター・エリカに頼まれてね。私が直々2人の為に第5世代をつくつてあげたんだよね~。色々大変だつたんだよ~。あ~と~、博士なんてメンドーだから束さんでいいよ。」

そつやり取りしている間に束は光武を調べ終えた。一樹はクラス対抗戦のころから気になつて「ことについて質問した。

「束さん、もう一つ教えてください。光武は今までのIISとは何かが違います。第5世代型IISの本質とは何ですか?」

「ああ、それはね~~~~」

束その質問に答える瞬間、千冬先生を呼ぶ声がした。岩場の入口の方を見ると山田先生が血相を抱えて走ってきた。そして手に持った情報端末を千冬先生に見せ、先生の顔色も変わった。

「テストは中止~お前たちにやつてもらいたいことがある~」

一体何なのか。そして山田先生は束の存在に気づき、初めて会ったIIS開発者に驚いた。

第38話 束の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めてHISを離れる

タイトル由来は映画「博士の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか」より
束のやつた事はこの映画と違いないことかもしません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4365t/>

サクラ大戦 花たちからの手紙

2011年10月6日03時42分発行